
W.E.M【世界の終わる音が聞こえる】

作倉エリナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W・E・M【世界の終わる音が聞こえる】

【Zコード】

Z2170B

【作者名】

作倉エリナ

【あらすじ】

初恋の女、愛里にピアノを習いながら彼女に執着し続けるテツ。テツの幼なじみで彼にとつて大きな存在でもある御浜。御浜が恋する、才能あふれる音楽家ティアス。紗良を誰より大事にするあまり、常に恋人を捜し続ける真。頑なで恋に不器用な紗良。兄の幼なじみに恋をし、つけこむスキを狙う柚乃。テツの父の全てを知りながら、それでも彼に執着し続ける愛里。恋と友情と進路に悩む人々の群像劇。

第1話 (the heads) 前編

楽しいことなんて何もない。
世の中希望なんて何もない。

オレだけじゃない。

誰も彼もそう思つてゐる。

そう感じりし、そう思ひ。それでいいじゃないか。

そう言つたら、笑うヤツがいた。

だから「マイツだけは違うんだと、幼いころからずつとずつと思つてた。

彼はオレにとつて誰よりも特別だった。

誰も彼も違うんだ、と全ての人間を排除しながら生きてきて、それでもそう思つてる。

沢田鉄人。

この無駄に強そなのがオレの名前。

この名前をつけてくれた母親は妹を生んでも死んでしまったの

で文句も言えない。

「テツ！ホントにこじこじた」

「…御浜。お前、学校は逆方向だろ？」

スタバには珍しく、店外に喫煙席がある。ここが毎日のオレの通う席だった。

御浜はオレん家の隣に住む、いわゆる幼なじみってやつだ。高校から学校が変わったので、学校帰りにこじこじして余つひとせ、めつたになくなつた。

…はずなんだが。

「オレ、真に呼ばれて来たんだけど、知らない？」

「そんなこと、学校じゅう言つてなかつたぞ」

真はオレのクラスメートだけど、なぜか御浜のことを気に入つてるらしく、よくつるんでる。

「御浜！いたいた。…って、テツちゃんもいたの？」

「お前がわざわざ！」に御浜を呼び出したんだらうが。オレは大概ここにいる

「はこはい。あの美人のピアノの先生待つてんでしょう。戀里ちやんだつけ？」

つとに、こいつは見た目に違わず、思つきし軽いな。なんで真面目が歩いてるような御浜と仲がいいんかな。

「わざんづけするよつうな年齢かよ、あの女が」

「あら、言つてくれるじやない、テツ？」

「げ、愛里…」

「カフュミスト、ディカフュのトール。テツの奢りでね」

緩く内側にカールした長い髪を揺らしながら、こんなセリフを吐いてるとは思えないような、爽やかな笑顔でオレを顎で使う。田線だけでオレを席から立たせ、愛里は代わりにそこに座った。いやいやレジの列に並ぼうと動いたオレを、真が止めた。

「オレも何か買つてこよ、御浜、何がイイ?」

「キャラメルスチーマー、ショートね」

「了解つ。相変わらずお子様だねえ」

御浜に対して小さく敬礼っぽいポーズをとつて、オレの背中を押した。

「見かけだけなら、お前が御浜をパシらせてそうなんだけどな」「うわ、言つてくれるね、テツちゃん。オレ、いつも見えても恩くすタイプよ?」「…うそくせ」

ディカフュは他のドリンクより時間がかかるので、後から注文した真が先に両手にドリンクを持つてオレの横に立つた。

「今日、相原とか新島は? 一人なの珍しくない?」

「あー、知らね。別にいつも約束してるわけじゃねえし。お前だつて、いつも勝手に人の横に座つてんじやん」

「ナマイキに男子高生が毎日のようにこんなとこ通つてつから、付き合つてやつてんだよ」

「知るかよ。コーヒーは好きだけど、スタバは愛里の指定なんだよ。別にそのまま大学なり家なりぐりや良いのにわざわざ……」

「付き合つてあげてんだ」

「やつだよ」

「ふーん。テツちゃんは愛理ちゃんのこと相當好きだよね」

「……」

「ぱつかばつかーんなわけあるか、ぱつかー」

「…今どきそんな真っ赤になつて否定する方がハズカシイヨ…。もしや今までフリー? せつかく親にイケメンさんに生んでもらつたの」

「」

あー、もうひひむとこここつー愛理のことなんか御浜にしか言われたことないの！」

「テツちゃん。ディカフェ出来たつて」

鬼の首をとつたみたいにへらへら笑いやがつて、ちくしょ。

「わーつしるよー」

「子供だな。言わなきゃ 何も変わらないの！」一生シロート童貞だな

「つるやこ。良いから愛里にんないと言ひんじやねえ」

真は大抵のヤツがたじろぐオレのガンシケにビックともせずにへらへらしたまま、

「よもやテツちゃん、自信がない? 大丈夫じゃね? テツちゃん見映え良いし、年上受けするから、意外とイケそつじゃね? 仲良いし」

「つるやこ。ダメなもんはダメなんだよ」

「言い訳つけてビクついてるだけじゃん?」

「あいつ、親父の女なの」

さすがの真も黙つてしまつた。

「…またまた～、愛里ちゃんそんなタイプやないでしょ～？大体、テツちゃんのお父さん、いくつよ？」

「35。金あるし、こんなでけーガキが一人もいるよつこは見えないし。奥さん死んでるし。24の院生なんてヨコードしちゃ・オレ、親父にそつくりだし」

「…自信過剰だよ。冗談だろ？」

「御浜に聞けば？ほり、冷めるから早く行こうぜ」

冬空の下、緑色の木枠の窓の向こうで、ピアノを弾くあの白い手で煙草を持て遊ぶ彼女を、誰にもバレないようにして見つめた。オレにとって、母親のようで、姉のようで、何よりはじめて好きになった女。

ずっと彼女は家に通い、オレにピアノを教えてくれた。

彼女が家に通う理由が他にあると、オレが知ったのはいつだったか。

それでもオレは、愛しい者を撫でるよつこピアノを弾き、いつか、いつもとは違うことが起きることを期待しながら、彼女をあの席で待ち続ける。

楽しいことなんて何もない。
世の中希望なんて何もない。

そう思いながら、何とかなると期待しているオレがいる。
期待してゐるから、オレを絶望させた彼女にしがみつける。

今のオレの世界にはあのピアノしかなかつた。

普通は受験のためにきちんとした先生をつけるものだ。

「この待ち合わせのスタバからほど近い芸大で、オレは受験のために愛里にピアノを習う。

その様子を見た他の先輩達はみなそう言つた。

佐藤愛里は舞台映えもするし、ピアノ科の院生の中でも巧い。だけど…って話らしい。

でも別にそんなことはどうでもよくて、オレは愛里にピアノを教えて欲しかつただけで、何だつて良かつた。

芸大に出入りしてゐるのだけ、別にここに入りたいからつてわけじゃない。（そもそも部外者だし）

愛里の練習の見学とか手伝いとかいう名目で入つてゐるだけで、ホントにそれだけのつもりだし。

別に大学なんか、この近辺なら上から下まで選び放題だし。入れりや何処だつていい。

もう2年も終わりだから、真剣に。特に音楽系は早めの対策をつて言われるけど。

別に、なあ…。

「テツ、この曲は好きじゃない？」

大学の練習室でオレのピアノを聞いていた愛里がオレを制す。

「なんで？」

「つまんなうだから。パワーゼロつて感じ。ピアノだつていつも

はヤバ〜〜りい神経質に触るの」

神経質…。あのなあ。オレがどんな思いで…。

「受験は来年なんだから、今は好きなことじよつよ。つまんないヤツはつまんないものしか造れない…」

受験は…てセリフはまずいだらう。田の色々えてるヤシもこののみこサシヤがてらの

」。

「造る?ピアノなんだから弾くで良いだらう?」
「だつて、これ言つたのは陶磁科の後輩(同じ年)なんだもの」
「ピアノ関係ないし…」
「あら、芸術に限らず全てにおいて、生み出すものには創造主の全
てがにじみ出るものよ」
「じゃあ、オレのピアノは愛に溢れてるはずだ」
「あら〜、ナマイキに高尚なこと言つわね。音楽への愛だなんて」
「愛里へのだよ」
「あら残念。私、子供には興味ないから」
「奇遇だな、オレもおばさんには興味ないや」
「…チツ、あんまり失礼なこと言つてると後が怖いわよ?」
「…自重します」

ホントに何かしそうで怖いっての。

「…」で、本氣で話せば、何か変わるのか?
〔冗談にしか取らないってわかってるから、何だつて言えるや。
ハズカシイなオレってヤツは…。
真の言つ通りかもしけないな。」

「失礼しま～す」

練習用の個室に人が入つて来るのはよくあることだつたが、その時の声は、なぜか学校で聞いた覚えのある声だつた。

「おー、ホントに沢田がいる。マジでピアノ弾いてたんだ」「こつもれつ言つてるだろ？が。新島こそ、なんでこんなとこ？」

新島灯路も真同様、よくあの場所に集まつてくる。つるんでもともよくあるけど、芸大で会つのはさすがに初めてだ。

「いや、従姉妹がさ、ここの声楽科の編入試験を受けるとか言つて、見学に来たわけよ」

「なんでお前まで？」

「案内だよ。ベルギーから来たばつかだし、こっちの地理に疎い上に方向オンチだし」

「ベルギーならあつちの音楽学校の方が…」

愛里が少しうらやましそうに言つたが、

「いや、あいつ学校行つてないはず…。なんかこの教授の名刺もつてたし。編入が無理なら、まだ18だし、4月から入学でもいいしつて…。人數少ないし、年齢幅もあるから居心地は悪くないとか言つて…なんかその教授に招待されたつて言つてた」

「なにそれ、そんなおかしな話あるわけ？！留学生がなんか？」

「いや、名前は向こうの名前みたいなついてるけど、ほとんど日本本人ですよ？」

「愛里、なに噛みついてんだよ」「噛みついてなんかないわよ。」

噛みついた理由が少しだけ判った気がする。愛里はこの大学にはいるのに結構苦労してるから、降つてわいたようなチャンスを貰つてゐる新島の従姉妹とやらが、気に入らないだけだ。

「灯路、知り合い？」

「何、だよ、ティアス。賢木先生はもう良いのかよ」

「賢木先生ですって？ピアノ科の先生じやないのよ？なんで声楽に……」

あー、なんか愛里の逆鱗に触れまくつてるなあ……。しかも、拾つてきたのはあの賢木先生っぽいし。

親父の旧友で、ピアノ科の助教授。愛里としては気に入れられたい相手だしな。

「さあ？なんか友達が来たからつて、そつちに行つちやつたわ。勝手な人。ねえ、ここで誰かピアノを弾いてたでしょ？」

声と共に、軽やかな足音が徐々に練習室に近付いてくる。どんな美人が出てくるか、当然のよう期待してしまう。あの賢木先生が気に入つたつてことは、相当美人なんじやないの？そのティアスつて女。

女の手が扉の向こうにちらりと見えた。その後、ゆっくり入つてきた。

「ねえ、ピアノひいてたの、誰？ここ的学生さん？」

「違うよ。オレの同級生だよ。あいつ、沢田鉄人つて言つんだ」

「ふうん」

じろじろとオレを見る女。確かに賢木先生好みの美人だけ……確かに、年上だつたと思つたけど？すつげえ童顔。賢木先生、これは

「ロリコンじゃねえ？確かに体はすごいけど。

ダメージチームに薄手のグリーンのニット。栗色の髪は多分地毛だろう。ショートカットに切りそろえていた。さつぱりした格好で俺は嫌いじゃないけど、確実に愛里は嫌いだな、こういう女は……。全然タイプが違う。

「君さ、なんか、さつき賢木先生の所に来てた人に似てるね。兄弟かな？お兄さんとかいる？」

「あー。それ、オレの親父じゃないかな？賢木先生の友達」「そーなんだ。じゃあ、君は高校生だけど、この大学の関係者つてこと？」

「いや、別に……。てか、あんた、妙にオレに突つかかってない？」

感じ悪い。この女、さつきからじろじろオレを見てるし、なんか話し方には棘があるし。美人だからよけーに冷たく感じる。

「べつに。ここの大學生の人つてどんな感じなんだろうと思つただけよ。だつてさつきのピアノ、つまんなかったんだもの」

……なつ？！

「言つに事欠いて、つつ……つまらないだとお？！」

「ちよつとーあんたねえ？賢木先生のお気に入りだか何だか知らないけど、失礼にもほどがあるわよ？私が教えた子よ？」

「……なんで？だつて君、ああいうの、弾いてて楽しかった？」

……さつ言われると……。それは、どうだろ？

「ティアス、どうしてお前はそつ気が強いんだよ。愛里さん怒つて

んじやん。すいません、ホント。沢田も悪い悪くすんなよ?「コイツ、
ちょっと口が悪いから。悪いな。ほら、謝れよ」

「なんで?怒らせたから?」

別に怒らせたつもりで言つたんじゃない、とでも言いたげな顔だつた。

「気分悪くするようなこと言つたから。別に何を言つのも自由だけど、言い方に気をつけろってことだよ、もひ。佳奈子さんが言つてただろ?」

なんか新島つて、思つたより大人だな……。人の受け売りとは言え、そう言つこと言えるか?

「あ、そつか。そうだね。ごめんね」
「謝つて済むわけ?相当失礼よ、その子!」
「愛里……。こいつ、謝つてんじやん。……それにつまんないって思つたの、ホントなんだろ?えつと……ティアス、でいい?」

ティアスはオレを真正面から見上げたまま、頷いた。
確かに、彼女の言つことをオレは認めてはいたけど……さすがにへこむな。

彼女はまだ何か言いたげにオレを見上げている。

「何だよ?」

「名前、何だつけ?」

「沢田鉄人。ホンツトに失礼な女だな、あんた!」

さつき新島が説明してただろ!あつたま悪いんじやねえの?

「沢田くん。ピアノ、真剣にやりたいなら、私とやらうつかっ・絶対楽しくしてあげる」

「自信過剰じやねえの、あんた?世話になんかならねえよ」

「オレには愛里がいるのに。」

「そう。残念」

意外にも、ティアスは特に怒った風でもなく、オレに笑顔を見せた。

少しだけ、胸の奥の方がざわめいた。

それが彼女の台詞のせいなのか、笑顔のせいなのかは判らなかつたけれど。

声楽科の教室に戻つていくティアスの後を新島が追いかける。新島がティアスには聞こえないように、俺達に身振りで謝つてるのが見えた。

「つまんないですって!何なのよ、あの女!」

新島達の姿が見えなくなつたのを見計らつて、オレに怒鳴りつける愛里。もう慣れっこだ。

「お前だつて、同じ」と言つたじやねえか、愛里」

「私が言つのと、あんな一回聞いただけの女が言うのは別問題!あなたは私が教えてんのよ?私がバカにされたのも一緒よ!」

……『めんな、愛里。

そういうから、オレはあの女のことがおつ、ホントは楽しくなかつたんじやないかって思つんだよ。

オレのピアノがつまんないつて言つて、オレが楽しくないことの方がオレには問題だ。

だつて、こんなに心の奥の方がぞわついてるんだ。

『ピアノ、真剣にやりたいなら、私とやるうか？絶対楽しくしてあげる』

それにしても、何あんなに自信たつぱりなんだ……。信じられん。

ムカツク。感じ悪い。

でも、売り言葉に買つて言葉とは言え、オレも相当やな態度をとつてた気がする（だつて、新島があんなに申し訳なさそうにしてた）

ていうか、何でこんなにオレ、自信喪失しちゃつてんの？！

『つまんなうだから。パワーを口づけ感じ』

おかしいな。今日に始まつたことじやない気がする。

「……ひょっと、じつじちゃつたのよ、テツ。なんか元氣ないわね」「いや、別に……。オレ、そんなつまんなうピアノ弾いてた？」

「うーん。まあ、誰にでもそういう時期はあるわよ。迷っちゃったり、判らなくなつちやつたりしてわ。メンタル面がどうしても強く

出でやうから。楽しいだけじゃどうもつもなことってあるわけだ。弾きたくなかったら弾かなきゃイイだけの話。自分を追い込んで、一皮むける人もいるけど、それで壊れちゃう人もたまにいるから、無理しない方がいいわよ」

「ううん、オレは相当つまんなそうに弾いてたわけね。

「もつとポジティブに考えなさいよ。誰だつて迷う時期はあるんだから。受験シーズンじゃなくて良かつたじゃなし」

なんだよもつて、受験受験つて……。

「じつは、今日の練習。テシの好きにすればいいわよ?」

彼女はもう言つて、からつビデオの方を見た。

正直、今日はもつ弾く気にはなれない。でも、愛里がこれからどうしたいのか判つていたから、ホントは動きたくなかった。

「親父、来てるって……」

「会いに行くに決まつてるじゃない。こんな堂々と会えることなんて最近無いから。わざわざと帰つて来てるの? 鉄城は

「そりや、あそこしか家はないみたいだし、夜と朝はいるよ。たまに夕食作つて待つてる」

「そつなんだ。受験シーズン近いから忙しことか言つてたのよ、そんなことしてるんだ」

「愛里に『そんない』と言つてんだ。オレ達には何も言わはずよ、いつも通りだつたけど。

愛里も親父も、お互に何もあるわけがないって言つ。

でも、愛里はずつと親父を追つかけてる。

家に来るのは遠慮してるみたいだけど。

本当のところはどうなんだろう。そんな言葉なんて、信じられるわけもないのに。

「他に別[モ]の一つや一つありそうだけどな、あの親父は。モテるし。よく女から電話かかってくるし」

「ないわよ。確かにモテるから、女の一人や一人や三人はいるだろうけど、やつは男じゃないのよ、あなたの父親は」

人の目つて言つのは……主觀と理想が入り交じつて、見たいものしか見えないものだよ、愛里？

何でそんなに親父が好きなの？

「オレ、一緒に行つた方がいい？」

そう、精一杯気を遣つたオレの言葉を受け、彼女は

「あんた、時々子供みたいね。でも、嬉しいわ。来て欲しい。会いややすいし……あなたの話もしておきたい」

「オレの話？」

オレの手を引き、練習室から引つ張り出して、扉に鍵をかけた。

「あんたの受験の話よ。本気で受験する気があるなら、いいかげんちゃんとした先生つけないとね。私だけじゃダメなのよ。そしたら、お金がかかるでしょ？お金出すのは鉄城なんだから」

「ああ、受験……」

なんか、いろんな意味で気が重いな……。

普段なら、どの練習室にいるかとか、教務室に聞きに行くのだが、今日はその必要はなかった。

「な……なによ、あれ！？」

音楽科棟内の一番はしにある大練習室。そこには異常な人ばかり。40人くらいだろうか？（一学年に40人もいないのに）普段は広すぎる練習室が狭く感じる。

その中にいたのはピアノを弾く賢木先生と、歌うティアス。奥の方に新島と親父が控えていた。

何故か、隣で騒ぐ愛理の声が、耳に入らなくなってきた。

クラシックかと思つたら、ロックだった。

だとしても、それを抜きにしても……彼女の歌声はすごい、の一言だった。

楽しくしてあげる、って言葉、案外嘘じやないのかもしれない。

ピアノと歌い手。たつたそれだけの存在が作る場なのに、この大きな部屋と、彼女たちを囲む人間を揺さぶっている。

「テツちゃん！これ、なんて曲？」

「え！？」

人混みの中から声をかけてきたのは、真だった。

隣には御浜と……、確か真の遠縁にあたる南 紗良さんだ。クールビューティーって言葉がぴったりの美人だが、いつ会っても笑顔が固い。そういう、彼女も芸大だ、つつってたな。

「知らない。ロックっぽいけど聞いたこと無い。何でお前らここにいんの？ 美術じゃなかつたつけ？ 彼女」

真が大学に出入りしている話はよく聞いてた。南さんに会いに美術の方によく行くんだって。こんな山奥の、交通の便の悪いところまでわざわざ。

知つてたけど、大学内で会つたのは初めてだつた。

「たまたまだよ。なんかす」い子がいるって美術の方にも噂が流れてきてさ。見に来たの。まあ、8割はその子がすつごく可愛いってことだつたんだけど」

「あれ、なんかプロの人人が来てるとかつて話もなかつた？」

「そうだっけ？なんか情報が錯綜してるけどね。気分転換に見に来つてわけ。部室の近くだつたし」

真と御浜がいたらしい「部室」がどこにあるかは俺はよく知らないが、美術科棟はこの音楽科棟から（心理的に）ちょっと離れている。（といつても、通り道が草木の手入れがしてなくて移動しづらいだけで、距離的には同じ敷地内なのでそういうのだが）

「す」「い」ね、彼女。きれいな声だし。なんて言つか力があるよね。オレ、音楽のことよく判らないけど、彼女は何だか良いよね。すごく楽しそうで。見ててこっちも楽しくなるって言つか。やつ思わない？テツ」「

御浜の言葉は、いつでもオレに重くのしかかる。

今までも、これからも、きっと。

でも、今日の言葉は……

「そ……やつかもね……」

重いつづーか、……痛いつづーのー

曲が終わり、彼女が一礼をすると、歓声と共に拍手がわき起る。クラブやライブハウスではなく、大学の練習室でこんなことってあるのか？

「テツちゃん。聞きたかったんだけど、なんで奥に新島がいるの？テツちゃんの親父さんがあそこにいる理由は御浜に聞いたけど」

「あー、なんかあの女の従兄弟で付き添いらしいよ。やつを挨拶に来た。今日はやけに知り合って会う日だな」

「ふーん。あの人、友達？」

新島の方を見てそつまつ御浜。そつこや、知らなかつたつ。

「まあ、そんなもんかな。テツちゃん、御浜にお友達紹介してないの？」

「お前が紹介すればいいじゃん……」

「いろんなヤツと仲よさうにしてるくせに、ビックリ線を引いてるような所があるよな、真は。

「じゃあ、紹介して、オレのこと」

「良いけど。珍しいね、御浜。あんまりそう言つ」と言わないくせに。なに、彼女に興味持つちゃつた？新島から紹介して貰おうってハラ？」

「言い方悪いけど、そつかな？」

……あれ？

なんだ？なんか今、やな感じがした。

さつきティアスと話したときにぞわついた場所が、引っかかれるみたいに痛かった。

「オレ、あの子の」と、好きになっちゃうかも

何言つてんの？

御浜の言つてる」と、よく判らねーって。

ティアスは、歌つてただけなのに？

お前、そんなこと言つようなタイプじゃないし！

「へー。いいね。御浜、そつこいつと言わないから、オレ、手伝つ
ちやねつかなー」

「邪魔するのはよく見るけど？」

「うわー、酷ここと言つね、紗良。御浜みたいなお子さまにまでそ
んなコトしなこつてば」

「何だよ、お子さまって」

怒つて見せる御浜は、オレの知つてる御浜だつた。

人混みの向こうで、ティアスが賢木先生や親父と話している。
何の話をしてるか判らないけど、先生達は楽しそうで、新島が一
人判らなそうな顔をしてるとこを見ると、専門的な話でもしてる
んだろう。

親父も、多少なら話が分かるし、賢木先生達といふことも楽し
そうにするからな……。

その様子を遠巻きに見ながら、唇をかみしめる愛里の姿があつた。

「なんか、テツと一緒に帰るのつて久しぶりだね。家にはよく行く
けど」

「そーだな。てか御浜、そのへラへラ浮かれた顔を何とかしろよ。
さかりのついた猫がお前はつつー！」

「えー。それはさすがに酷い言い方。オレが女子に声かけちゃいけないわけ？」

「まったくだね。なーんでテツちゃんはそんなにかりかりしてんの？何かやなことでもあつたわけ？愛里ちゃんのこと？」

「うるさい！何でお前が着いてきてんだ！真！」

「いやだー、この人。今日の愛里ちゃんの前での態度つたら落ち着き扱つて、一体どこのおっさんかと思つてたのに、今度は何だかかりかりしちゃつて、情緒不安定な思春期の女子高生みたいー」「だまれ！棒読みすんな！余計へこむわ！わーっとのりつーのーー！」

すっかり夜も更け、芸大からの最終バス（20：10）に何とか乗り込んだオレ達は、バス停から歩いて家路についていた。オレと御浜は良い。お隣さんだし、仕方ないけど、なぜか真が後ろから着いてくる。

いちいちオレをからかうような、カソに触る態度をとつときやがる。

確かに、真の言つとおり、今日はかーなーり、かりかりしてはいるけれど。

「南さんに送つてもらえればよかつたじゃねえか、お前らは」「だめだつて、卒制があるから忙しいんだつて」「なに忙しいのに押し掛けんんだよ、そーんなに彼女に会いたいわけ？」

「仕方ないじやん。紗良のヤツ、忙しそぎて帰つてこないんだから。年明けじゃないのか？卒制つて……？」

……オレのつづこみはスルーかよ。顔色一つ変えねえ。

「ふーん。つき合つてるわけでもないのにご執心だな。……てか、

一緒に住んでるみたいな言い方

「住んでるよ。言わなかつたつけ? オレ、紗良んすに面候してるの」

「……やつ言えば」

確かに、真は家族を事故でなくして、遠縁の親戚の家に預けられてるつて聞いてたけど、そこが南さんちか……。

「真は、ホントに紗良さんのこと好きだよね。ちひらく大事にしてる」

「おー、御浜は良いこと言つよね。そりやう、オレつてば大事にしちやつてるわけよ。あの人お堅いから」

「何が大事か! ? 見るたび、違つ女連れて歩いてるくせに」

「南さん一筋だといつなら、やつ言つ態度をしりよ。軽あざえんだよ、お前は。いくらなんでも。(ある意味つらやましいけど)

御浜もそんな真のことを笑い飛ばしていた。

そういうえば、今まで、御浜のそり言つ話つて聞いたこと無いよな。もしかしたら学校でそり言つ女がいるかもしれないけど、御浜がオレに言わないわけがないし……。

どつちかつつーと……相当奥手で、そんなに下ネタも興味なくて、中学の時から先輩女子に人気のあつたさわやか美少年のイメージそのまんまのいい子ちゃん、つてかんじなんだけどな。

何で、急にあんな失礼な女が良いなんて言い出したんだか。

「ただいまー」

「おじやましまーす」

「……つて、何で真までオレンちに着いてくるんだよー」

「あ、ひどいなー。御浜はよくてオレはダメなわけ? てか、御浜がフツーにこっちに来たから、オレもこっちに来ただけなんだけど」

「ああ、もう何もつひこむ氣になりな。……今日は一人にして欲しい。考えることが多いからなよ。」

「あ、テツちゃんおかえり。御浜さんと真さんもこいつしゃー」

セーラー服のまま台所から出でてきたところを見ると、妹は帰つてきたばかりのようだつた。ショットウも「家に来るから、もう御浜も真も顔なじみだ。」

「親父は賢木先生と飲んでくるから遅くなるつて。ちよつとピアノ弾いてるから、テキトーにして」

玄関を上がつたところで、学ランを脱ぎながら、御浜達をおいて、奥にあるコビングに向かつ。

「ちよつと、テツちゃんー待つてよ。御浜さん達とはお盆さんよ? ほつとこていいわけ?」

「10時までしか弾けないだろ? が、今さら歌もくそもあるかよ」

「あはは、良いつて、柚乃。テツ、なんか調子悪いみたいだからさ。あと30分しかないし、弾かせてあげよつよ」

リビングの扉を閉めた後、電気もつけずに思わずその場に座り込む。

そんなこと、ここに来るまで一言も言つてなかつたじゃねえか……。ホント、かなわねえな、御浜には。なるべく、フツーにしてたつもりなのよ。

…… もう、何も考えたくない。とにかく弾こう。

弾いてる間は、忘れられる。

集中してれば……

ダメだ、なんでだ？

扉の前に座り込んだまま、体が動かない。

暗闇の中、どうして良いか判らない。

…… 弾かなきや。

御浜が、心配する。

何とか体を起こし、電気をつける。

母のグランドピアノの蓋を開け、赤いキーカバーを無造作にはずし、楽譜を開く。

ショパンエチュード。確かに、面倒くさくて、難しい。けど、別に嫌じやない。

指、動かねえし！ なんで？！

ついこないだ、普通に弾いてたつもりだったのに。
これが愛里が言つてた、メンタル面つてヤツかな……?
でも、こんなことで?別に何もないのに。辛いこととか、大きな
ショックとか、別に何もない。

ティアスの言つた「つまんない」って台詞?

いや、あの程度ならいいくらでも言つ奴はいる。

今、彼女の言い方を思い出せば、(あの時はむかついたけど)は
つきり目の前で言つてくれて、いつそ清々しいくらいだ。
あの大学で練習してたら、いろんな陰口が聞こえてくる。
愛里がティアスの待遇に対しても怒ることをフツーに感じる程度に
は。それくらい、みんな苦労して入ってる。それでも上を曰
指すヤツもいる。そんな場所。
だから理解できる。

……あー。オレ、やっぱ楽しくないのかな?わかんねーよ。
動機が不純だからな。

愛里に教わつてるのが楽しかった。

愛里が誉めてくれるのが嬉しかった。だから、毎朝5時に起きて
練習して、夜も10時までずっと練習。
部活も何もしないで、ひたすら練習してた。

それでも普通科高校を選んだのは(確かに県内にあまり選択肢が
なかつたのもあるけど)迷つていたから。

「弾かなきや……」

迷つてゐる場合ぢやない。愛里はオレの受験のことが、真剣に考えてくれてた。

オレは期待に応えないと。

でも、愛里以外の先生なんていらない。
だから、オレにはこれしかないのに。

焦れば焦るほど、オレの頭の中でティアスの歌がぐるぐると回る。

忘れよつと思つても、忘れられない。

彼女が歌つた後の周りの歓声、拍手。そして、彼女を見いだした賢木先生の満足そうな顔。

あの御浜ですら魅了された、彼女の笑顔。

なんか、「負けた」つて感じだよな……。

「テツ、今日、ティアスに貰つた楽譜あるだろ？弾いてみてよ。今日歌つてた曲だろ？」

「……御浜。何でここに？」

立ち上がつた勢いで椅子が転がる。その失敗を取り繕つよつて、ゆつくりと椅子を拾い上げた。

御浜に對して、そのフェイクは意味がないと知りながら。

「良いから。初見だろ？ゆつくりで良いから、練習しながらで良いから弾いてよ。オレ、あの曲好きなんだ」

オレが最初していたように、彼は扉の前に座り込む。
しかし、彼の目はまっすぐオレを射抜いていた。

あの時、歓声がやみ、学生達の波が退いた後、知り合ひの強みで彼女たちに近付いた。

新島とティアスに、真が御浜を紹介した。

何かトラップすることを期待していた。でも真の気持ち悪い「ぐりぐり」の猫かぶりつぶりと、元から異常なくらい愛想のいい御浜でそんなことが起こるわけもなく、滞り無く話は終わった。

オレはもう、何も話もしたくなかった。

それなのに、あの女がこの楽譜を押しつけてきた。

今、賢木先生が使ったのと同じ楽譜だよ。と言つて。

「何様だよ、あの女。いきなり押しつけてきて、弾けとも何も言わないで」

「弾けて言つて欲しかった？」

「……なんで？！」

「弾いてよ」

御浜の言葉に押され、オレはピアノに向かつ。

今度は、カンタンに指が動いた。

そんなに難しい曲じゃない。

初見でいきなり弾けるほど、オレにはテクニックがないけれど。

「50年代ロックンロールだな。賢木先生、年こまかしてんじゃねえの？」

たゞたゞしく弾きながら、ピアノに集中しすぎないよう会話をはじめる。

「鉄城さんよりは少し上なんだっけ？ 賢木先生、今年40だっけ？」

「…にしても、計算があわねえか。クラシックの先生が50年代オクションホールを、ピアノとボーカルだけで、しかも芸大内で披露しちゃうのか。だから敵が多いんだな、あの人」

「多いんだ、あの人」

「多いね。良い話も悪い話も、あそこにいるとたくさん聞くよ。在籍してるわけでもない、顔出してるだけのオレがこれだけ色々聞いてんだ。中ではもつといろいろ言われるだろうな」

「敵も味方も多いってことか……」

賢木先生は、こんな風に弾いてなかつたな。もつと……なんて言うんだろう？

「敵も味方も多いつてことは、幸せなことだね。ねえ、テツ」

ティアスの目が、オレを射抜いた、あんなまつすぐな目ではなくて……
もつと……

「テツ？」

「え？！……いつの間に、横に？」

「てか、話聞いてた？手が止まつてたし」

「聞いてた聞いてた。幸せなことだねつてことだろ？敵が多いのは不幸じゃね？」

御浜は取り繕つようこそついたオレの台詞を受けて、静かに微笑む

「両方あるから、ちよつと良いこともあるんだよ」

時々、言つてることが判らん。御浜の言つことはオレには難しす

きて。

ただ、心地よい重さでオレこのしかかる。その強引さも癖になる。
だけど今日は何だか心臓に悪い。まだ、鼓動が早い。

「顔が赤い。ホントに調子悪かったりして。柚乃にいつとこいつか?
いや、いい!何でもないから。それより、真はどうした。待たして
るんじゃないのか?」「うん、そうだね。練習、してて」

あと10分。そう言って御浜はリビングを出ていった。

練習曲、やらなくちゃな。

そう思つても、先生のピアノ、彼女の歌声。絡み合つて、オレの
脳裏をぐるぐる回る。

つまんないつて言つたティアスと、歌うティアス。

やつぱり、指は動かなかつた。

練習を終えてキッキンに向かうと、大抵、御浜と柚乃がそこについ
る。真がそれにつき合つて……。

でも、今日は柚乃と秀一だけがそこにいた。

「御浜は?もしかして帰つた?」

「真さんが、今日は御浜さんちに泊まるから、また明日つて言つて
た」

「最近、よく来ますね、あの泉つて子」

秀一は勝手しつたる何とやらで、勝手に換気扇を回し、側に椅子を移動し、煙草に火をつけた。

彼は向かいの開業医の次男で、N大の理学部で講師をしている。

「うして時々家の様子を見に来る。

寝ぐせだらけで、もうそりゃいつ髪型のように見えてしまひ、手入れの全くされていない長髪に、中途半端に細い黒縁眼鏡。無精ひげもしそつちゅう生えている。はつきり言つて、清潔感ゼロ（本人はわりと潔癖性なのが）今どきオタクだつてもう少し身なりに気を遣う。制服のままの柚乃とキッチンに座る姿は、はつきり言つて犯罪一步手前。

ちなみに、ただご近所さんなだけではなく、戸籍上は御浜の「甥」に当たる。といつても、秀一はもう今年で32になるのだが。

「まだ31です。失礼な」

「そんなにかわんねえだろうが。1歳や2歳でがたがた言つた。こんな夜中に何しに来た？」

「テツちゃん。秀一さんは夕食持つててくれたのよ。様子見に来てくれたの、パパに言われて」

「先輩も助教授ともなると、忙しさに拍車がかかっているようですね」

「親父は賢木先生と飲みに行つたんだよ。いつものことだ」「そんなこつたろうと思いました……」

親父と秀一はN大理学部の先輩後輩だったそうだ。そのまま一人とも院にいき、教員になった。（その間、オレも柚乃も生まれたし、母さんも死んでたのに、金は一体どうしていたのか？母さんの実家が金持つてるのは知つてるけど、子持ちの婿を院まで行かせるか？我が親ながら謎の多い人だ……）

「御浜が先に帰るなんて珍しい。何かあったのかと思つてましたが」「何かつて?」

「いいえ。……今日はちらし寿司です。桃の節句に向けて、花まるで特集してたので、参考にしてさらにバージョンアップ版です。錦糸卵の幅も均一で完璧です」

「秀一さんて、ちゃんと大学行つてます? 何で、そんな朝やつてる番組見て、料理作れるんですか?」

「柚乃のつっこみももつともだ。家に来るたびマニア度の高い料理を持つてくる。」

「ちゃんとしたもの食べないと大きくなれませんよ? 特にテツ。こそそこ毎朝ランニングしたりピアノ弾くだけじゃなく、ちゃんと栄養とんない、栄養を。だから筋肉ばつかついて、背が伸びないんですよ」

「お前と比べたら、(真以外の)大抵のヤツは「背が低い」に分類されるつづーの……。オレはフツーだ。てか、それより……」

「……何でオレの朝の行動を……ストーカー?」

「秀一さん、いつ寝てるんですか……?」

「ノーコメントかよ。」

「じゃあ、私はこれで。ついでだから、御浜の家にも差し入れしてきましょうか。……テツ、何か伝言は?」

「伝言で……。別によいよ」

「そうですか。なら結構」

彼はそのまま、たばこをくわえたまま、玄関へ向かつた。

秀一がここに来たのは、親父に言われてオレ達の様子を見に来ただけなんだろうけど……。

「何なんだよ、一体？」

何か言いたげな秀一の態度が、オレの混乱を増していく。

第1話 (the heads) 後編

「こんちは。灯路に聞いたりこじだつて言つから」

昨日の暴言を忘れたかのよつこ、笑顔でそつ言つたのはティアスだつた。

彼女の後ろでは新島が苦笑いしてゐる。

いつものよつこ、いつものスタバで愛里を待つ長い時間。誰か一緒にいれば喋つてゐるけど、一人の時は大抵譜面を読んでることが多い。

新島も、いつもといつわけではないけれど、仲はよいのでこじで話をすることがある。

「昨日の譜面、読んでくれてるんだね」

オレの手元を見て微笑む。思わず手で伏せてしまつたが、もう遅い。

「……別に。ついでだよ。大体、あんた、何のつもつてこんなもの？」

いかんいかん。落ち着いて、冷静に喋るつと思つてゐるのだが……。口からどうしても暴言がつ……。

彼女一人ならまだ良いけど、新島が隣にいるつてのがな。

「だつて、すつごい真剣にこつちを見ててくれたじやない、昨日。だから、好きなのかと思つて」

席は4つ。彼女は極当たり前のようすにオレの左隣に座つた。……
近いよ。

「ティアス、なんか飲む？ついでだから買つてくるけど」
「あ、ホットカフュミスト、ティカフュでトールね。よろしく」

愛里と同じのかよ。って、何でこんな小さないと反応してんだ
オレは。乙女かよ。
大体、ここは愛里の席だし、愛里だってこんな近くには座んねー
つづーのー向かいだよ、フツーは。

「何でティカフュ？」

あえて田をそらしながら話してゐるのに、彼女はオレとの距離をさら
に縮め、でつかい田で下から覗き込むようにオレの顔を見つめた。

「こつもコーヒー飲み過ぎちゃつから。カフュインの摂取過多でし
ょ。日本はティカフュ少なくて困るんだ」

彼女の返事に、少しだけ困つてしまつた。どうじても愛里と比べ
てしまつ。

彼女はこんなにも愛里と違うのに、同じことばっかり言つのだ。
ここで焦つたら、みつともないだけだ。

「君と同じこと言つた女がその内ここに来るよ。オレはその人待つ
てんだけだ」

無理矢理笑顔を作つて、覗き込む彼女と田を合わせた。
一瞬、彼女が田をそらしたのに、オレは満足した。

「ふーん。それって、昨日一緒にいた人？賢木先生と沢田先生がなんか言つてたなあ……。確か、佐藤さん？」

「やう。何、君も一緒に飲んでたの？「うちの父と、賢木先生と」「つづん。帰つたよ。灯路も一緒だつたし、沢田先生も「今日中には帰る！」つて叫んでたし」

「そういえば、朝はしつかり帰つてきて、シジ//のみそ汁とか作つてたな。

「私は、あなたのことが知りたくて来たんだけだ」

「……オレ？ つまんないとか言つてたくせに」

「あなた自身は面白やつよ？ 灯路の話を聞いても、御浜の話を聞いても」

……なんか、不審な名前が出たな。

「つてか、何で昨日の今日で御浜と、オレの話なんかしてんだよー！」

「んー……メル友？ 今日のお昼くらいまでで、20通くらいしたかな？ 今日もこれから会つ予定だし」

「何じやそりや？！ こつまに？！」

「そんなこと言われて。御浜が会いたいって言つんだもん。私も別に御浜のこと、嫌いじやないし。あの子は一緒にいると楽しそうだし」

いや、まあ、御浜はこの女のこと相当気に入つてたみたいだから、良いことだけさ。

それにもしても、意外と手が早いな、御浜……。今までそう言つことがなかつたから、たんに奥手なのかと思つてたけど、対象がいかつただけなのか。押しまくつてんな。

しかし、20通は、普通会つたばかりなら退くと思つたが、この

女も相当変わってるよな。

それとも、女の方もまんざらじゃないつーことか？

「うーん……相手が御浜だと思つと、なんか変な気分だ。

「御浜が、沢田くんのこと気にしてたから。仲いいんだなって思つて」

「仲いいつーか……まあ、隣にいても構わないつてくらいだけど」「そうなの？まあ、そんなもんなのかな。でも、御浜の話であなたに興味を持ったのは確かだよ」

「何言つたんだよ、あいつ……」

「沢田先生の息子さんだつて聞いてびっくりしたけど」

新島が一人分のドリンクを持つてオレの向かいに座る。

ティアスがドリンクを受け取りながら、笑顔でお礼を言つた。

「沢田の父さん、かつこいいよな。優しいお兄さんだけど、いざつてとき頼れるつて言うか、しつかりしてるつて言うか。まあこんなでかい子供がいるから当たり前なんだけど、若いからかつこよく見えるつーか。オヤジっぽさゼロだしな。ティアスもああいうの好みじゃんね？フケ専だし」

「灯路……フケ専で、言葉が悪すぎ！ちょっと年上の人のが好みなだけよ。沢田先生はかつこよかつたけど、あの人がかつこいいのは、子供がいるからよ？」

「そうなの？……不倫願望？」

「だーかーら、そう言つのじゃないつてば」

「知つてるつて。ティアスはブラコンだから」

「だからーもうやめてよ、沢田くんの前で恥ずかしいしー！」

なんか変な単語いつぱい出てきたし。

「フケ専なの？年下王子様系さわやか美少年（近所のお隣さん談）は恋愛対象外？」

「は？沢田くん、何言つてんの？」

「うるなしか、顔が赤い。

「いや、判んないなら良い。てか、うちの親父はぶつちやけかなりモテルよ？」

「だから、そういうのないつて。聞いてた？」

やつぱり顔が赤い。

ちゃんと聞いてたつて。親父をかっこいいとか、いい男とか言う女は結構いるけど、「子供がいるところが」って言ったのは多分初めてだ。ダシにされたことは数知れなきけど。

「プラノンなんだ？」

おつと、いかん。うつかり顔がにやけてしまう。なんか弱みを掴んだ気がするぞ。

「……違うもん」

なんだ。可愛いじちゃん、この女。俯いて照れりやつて。拗ねてやんの。

「まあ、じじんちの兄ちゃん、苦労してるからな。年も離れてるし。性格は歪んでるけど、結構すげい男だよ。だから、ちょっと男選びの基準がずれちゃつただけだよな？」

「……やっぱ、ずれてるかな？那人、相当よね」

「うん、相当だよ？」

新島は自分でまいた種を刈り取るよつこ、さりげなくフォローに入つた。

「あれ、ティアスー何でここにいるの？待ち合わせは……」

何故か店に現れた御浜は、そういうながら、空いているオレの右隣の席に座り、携帯で時間を確認した。

別に御浜とも待ち合わせなんかしてないけど、コイツがいろんなことを突然行うのはいつものことだ。

「うん。まだ時間あるから。沢田くんの様子を見に来たの」「そう。奇遇だね。俺もちょっと早く学校終わったから、テツの様子見に来たんだ」

「何でだ……。

何でオレがお前らに様子を伺わねなくちゃ行けないんだつーの

……。

「これ、昨日の楽譜？」

まったく、ティアスも御浜も、めざとい。手で隠してたのに。そろそろ愛里が来るころだ。ついでだし、しまつておこい。多分、愛里がこれを見たら、不機嫌な顔をするだろうから。

「……愛里が来るまで、時間があつたからだよ」

「また、弾いてオレに聞かせてよ。それで、ティアスが一緒に歌えばいい。きっと、賢木先生の時よりすこくなるよ」

「お前ね、芸大の先生と比較して、何言つてんの？」

「なるよ」

そう言つて、御浜は笑つ。

新島は少し苦笑いしていたけど、誰も彼の言葉を否定はしなかつた。茶化すことすら。

オレだけかな？御浜の言葉に力を感じているのは。ティアス達の様子を見る限り、そういうやないと想いたい。

「かもね」

「うへー、沢田、自信過剰」

何でオレだとそう言ひ話になるんだよ。

「そうこやせ、佐藤さんて、いつ頃くるの？」

「ああ……今日は遅いまづかな？」

御浜に言われ、思わず携帯を見た。連絡はない。

まあ、酷いときは全く連絡なしで3時間くらい待たせるしな。

「ティアス、昨日メールした本さ、今から見に行こうか。ここ、上

に本屋があるから。今日、夜は用事があるって言つてたろ？」

「うん。……灯路も……」

御浜と一緒に立ち上がるティアスが、新島に視線をくれる。何だろ、どういうつもりなのかな、この女。

「後で行くわ。オレ、もつもつさんだから、ゆっくりせてくれ。」
「一ヒー残つてるし」

彼女はオレをちらりと見る。視線がぶつかったとき、思わず目を背けてしまった。

それは彼女も一緒に、もうオレを見ることがなく、御浜の後ろについて行った。

「何だよ、御浜に氣い使つてくれた? わざわざ」

「いや、オレ、邪魔かなー? と思つてさ。ティアスがついてこ、つづーから来たんだけど」

意外。あの女がついて来いつたんだ。メールの話を聞いた後だから、変な感じだな。

新島は空のカップを弄びながら、オレの顔を見ずに話を続ける。

「てかさ、よく判んないけど、白神つてやつを氣を遣つたよな? お前になのか、ティアスになのか知らないけど」

「ああ、愛里のこと?」

「そ、佐藤さんの性格じや、ティアスと合わないのは明白じやん? 昨日もかなり睨んでたし、そうでなくとも怒らせてたし。佐藤さんほどじやないけど、ティアスも性格きつついから、衝突するの目に見えてるし。女同士はえぐいからな……」

確かに。そんな怖い状況に立たされるのは嫌だ。もしかしてその礼つてコト?

昨日も思つたけど、新島つて、いつも所スゴイつか、えらいつか……。今まであんまり氣にしてなかつたけど。

「なんかさ、ティアスの保護者みたいだな」

時計仕掛けのオレンジのテーマが流れる。渋い着メロ。さすがにオレはその選択はしないな。

「わりい、ちょっと出でた。はいはい、なんすか、お兄さん？ ティアスですか？ いや、オレ、知らないな。うちの親とか連絡しました？ ……ああ、そりゃそうですよねえ。オレも聞いてないですもん」

そう言つたところで、新島は電話を切つた。
明らかに相手が途中で切つた、つて感じだけど。

「……ついさまで田の前にいたじゃん、ティアス。相手誰よ？」「ティアスの義理の兄ちゃん。また、うつさい上に血[ハ]チューなんだわこれが。電話も勝手に切るし」
「……兄貴かよ」

「わざわざ一人でずれてるだの、怪んでるだの言つてた、あの兄貴ね。どんなヤツだろ。」

「教えてやればいいじゃん。てか、家出？」
「似たようなもんだよ。居場所ばれるといけないから、うちの親とかにももちろん内緒。アイツ、めちゃくちゃだよ？」

メチャクチャつづーか、クソ度胸はありそつだけど。

「ベルギーにいたのに、わざわざ兄貴の元から出でてきて、なんでこんな片田舎に？」

「ああ、あんまり詳しく聞いてないから知らん。横浜に兄ちゃんのマンションがあるから、そこに行くつて言つて飛行機代だけ借りて日本に来て、東京から『ながら』でわざわざここまで来たからほとんど金なし。いきなり携帯にかかってきて、どうしようつて言われてな」

「どうしようつて言われて、どうしたんだ？お前たちの両親とか知らないんだろ？」

「ああ、それは何とかしてる。携帯も昨日持たせたし」

「……何とかって……。てか、何でそこまですんの？」「へら従姉妹だからって。もしかして」

新島つて、ティアスのこと好きなんじや……。てことは、御浜の存在つて、邪魔じやない？

「いや、ないない。あの女、ガキだし。可愛いけど、年上だけど、妹みたいなモンつて言つた……まあ、アイツには借りもあるし、借り……？」

「そ。だから、別に白神がティアスのこと落とさうと落とすまいと、どうでも良いつて。やつ言つことだろ？」

「いや、落とすかなあ。ああいつのと無縁の男だからな、御浜つて。まあ、本気なら、うまく行けばいいかと思つたけど」

「……ああ、そう。オレた、別にどうでも良こなさ」

「何だよ」

「もし、……もしもだよ？ティアスの意志が違うといひにあつたら、オレはそれを尊重するよ」

遠回しに言つてゐつもりかもしれんけど、それって、今の時点でティアスは御浜のことやつでもなつてコトへ幸先不安だな。

「お互このことだろ？」

「この言つのは環境もあるつて。タイミングとかね。沢田はやつ言つ」となかつた？

入口に、愛里の姿が見えた。

「なさそうだな。沢田って基本的に『待つ』タイプだしね。オレ、そろそろ行くわ」「

「ティアスの所？まだ30分もたつてない」

「いや、一応、連絡あるまでは待つさ。あいつ、白神のこと、まんざらでもないみたいだし」

今度はオレに気を遣つたつてわけね。
「丁寧に、テーブルに残つてた3人分のカップをまとめて持つて
いた。

それにしても……どっちだよ。あの女は御浜に氣があるのかない
のか、はっきりしろって。

結局、その後何も言わずに、新島と入れ替わりで愛里が来た。

「テツ、今、新島くんいたけど、ここにいたの？……テツ？」
「……あ、悪い、愛里。ちょっと考えごとしてた。なんだっけ？」
「だから、新島くんよ」

もしかしたら、嫌な気分だつたかな？アイツ。

何であんな根ほり葉ほり聞いてるかね、オレつて。ティアスがど
こに住んでようが、どうやつてきてようが、関係ないじゃん。

あんな女、どうだつて良いじやん。

正直、練習には身が入らなかつた。

今日は大学ではなく、愛里の家でのレッスンになつたのもあるかもしねない。

大学で、他の人が出入りしている環境の方が、ずっと良い。

でも、ちゃんと指が動いた。

それだけでも、何だか助かつたような気がした。

愛里が……オレが指を動かせないって知つたら、どんな顔をするだろう……いや、してくれるだろう。

想像できない。

まっすぐ、家に帰る氣にもならなかつた。

愛里の家は、大学に近いけれど、オレの家からはちょっと距離がある。だから、いつも帰りは送つてくれる（8時過ぎるとバスがないし）

でも、今日はまだバスのある時間だったから、オレは彼女の気遣いを断つて、一人で帰つた。

そのまま、終点である地下鉄の駅前で降りた。

もうすぐ万博が始まるとかで、工事をしてゐるし、店が減つていた駅前だが、残つていた本屋に入つて立ち読みした。

でも、すぐ閉店時間になり、ふらふら歩いて、コンビニに入る。

……いま気付いたけど、なんか、この無駄にふらふらしてゐる感じつて……！

うう、考えたくない。

何、町中さまよつてんだ。マジか自分？
せめて、さまよつたら、着替えてくればよかつた……てか、その前に、さまよつてゐる場合じゃねえだろ。

コートを着てるから、学生服は隠せるとして……」のいかにも学校指定のバッグはヤバイだろ、この時間。

大体、オレが家に帰らない理由がわかんねえ！なんでこんな所でふらふらしてんだ。ピアノが弾けないからか？！

……って、答えでてるし。

もついいや。家に帰ろ。ピアノの前にいなきや良いわけだし。それに携帯もなつてた気がするし……

着信履歴が15件で！まだ11時なんですけど。別に行方不明になつたわけでもないし。何だよ、誰だこれ？もしかして愛里？

期待する自分の妄想力が悲しくなるな。御浜8件、真4件、新島2件、オヤジが1件……。御浜、電話しそうだ。それに真や新島からつて珍しい。

そう思つてたら、コンビニの前で御浜から着信。少し躊躇したけど、取らないのもな。

『テツ。レッスン終わつた？もつ家に帰つてる？』

あれ？家にいなかから電話してきたかと思つたけど、この様子だと御浜も家にいないな。

「いや、駅前のローソンにいるけど。お前にそどこにいるんだよ」『真と新島くんと一緒に、駅前のクラブにいる。テツも呼ぼうと思つて何度も電話したんだけど』

何、そのメンバーでクラブつて。てか、それでこんな何度も……。なんか、予想が出来たぞ。

「もしかして、ティアスが出るから?」

『そう。よく判つたね。テツもおいでよ。なんか、知り合いのコネで歌わせてもらえるって言つて、喜んでた。ブルースだつて言つてたけど』

「一人で歌うの?」

『なんか、その知り合いの人のバンドがいて、特別プログラムって扱いで一曲だけ歌うつて』

なんだそりや。

そんなむちゃくちやな話、あるかよ。

その知り合いの「ネつてヤツは、相当強力だな。また、愛里が聞いたなら関係ない話なのに怒りそつだ。

『場所が判らないなら、そこまで行くよ。もつすぐ始まるから……』

「あー、良いよ。オレ、もう帰るから」

『いや、一緒に聞こいつ』

いきなり、後ろから腕を捕まれる。

「御浜……！」

「何、制服のまま? ちょっとまずいかなあ?..?」

心臓止まるかと思つた。

道理で、周りが静かなわけだ。地下鉄も止まり、飲み屋も少ない駅前の深夜は、ほとんど人がいない。

「せつかくここにいるんだから、ちょっと覗くだけでもよくなない?」

「この近くだし」

「いや、オレ、こんな格好だし」

「一曲だけだよ」

オレの腕も掴んだまま、強引に引っ張っていく。

「やだつてー何でそんな無理矢理……オレは別にあんな女の歌なんか……」

「ここまで拒絶してんのに、無視かよ。なに考えてんだ？」

「テツ、そんなに嫌がる理由が判らないや。別にティアスのこと嫌いなわけでもないし、怒つてるわけでもないのに。ここまで拒否しなくても良いと思つけど。それに、ホントは聞きたいんじやないかな？」

「御浜の力なんか、すぐに覆せる。彼の腕を逃れるのなんか簡単だけど、そうしようとは思わなかつた。」

「御浜には、理由がある。……多分。」

「昨日、あの女の態度、悪かつたんだぞ？お前は知らないだろ？けど」

「新島くんに聞いた。佐藤さんが怒つてたつて。テツにフォローしてくくれつて頼まれた」

「何もしてない顔してその気遣いは何だ、新島。」

「愛里は……怒つてる。今日も、新島の姿を見かけたから、またあの女がうろついてるんじやないかつてカリカリしてた。オレのこと、なんか言われたのが、相当いやだつたみたいだし」

「でも、それって、自分のことと言われたからだよな。」

「そんなの、テツには関係ないし」

確かに、そんなんだけじゃ。

愛里のことは、オレには関係ない。

つて、何げに酷いこと言つてるので、御浜。それは……へこむよ、
オレは。

いつの間にか、裏通りにあるクラブの目の前についていた。御浜
はオレの腕を引っ張つたまま、階段を下りていく。

「……大体、あの女は何がしたいんだよ？ 昨日はロックで、今日は
ブルース？」

「聞けばいいじゃん。聞いてから文句言えば？ 彼女みたいに」

チケットは？ もしや顔パス？

扉を開けると、ホールはざわついていたが、奥の方に用意された
舞台上に、ティアスが立つてするのが見えた。

「後ろでキーボード弾いてるの、女優の佐伯佳奈子じゃねえ？」

「だれ？ 佐伯佳奈子つて？」

「しらねえの？ とし行つてるけど、2時間ドラマとかでてる……。
ほら、こないだ深夜の音楽番組でちよつと喋つてた」

なんか、バンドに有名人がいるらしく、ホールからしきりに佐伯
佳奈子つて名前が聞こえてきた。

「テツ知ってる？ 佐伯佳奈子つて。周りがなんか騒いでるけど」
「うーん、どんな顔か知らんけど、オレが知ってる佐伯佳奈子つて

女優は、クラシック雑誌に「ラムを書いてる」

「その人かなあ……？ オレ、あんまりテレビ見ないから判んないんだよね」

本人がどうか知らないが、奥でキーボードを弾いてる年輩の女性は、周りがかすむほど華やかな女だった。

中心に立つ、ティアスを除いては。

昨日とはうつて変わって、落ち着いた感じのタイトなブラックドレスだった。

キーボードのソロから、曲が始まった。

「あ、御浜！ いたいた。ホントにテツちゃん連れてきたんだ。すげーね」

「あれ？ 新島くんは？」

「一番前」

「そうなんだ。さすがに、あの人数を割つて、今さら前には行けないな……」

彼女の歌は、力強く、心地よかつた。

原曲は確かにブルースだった。けれど、アレンジがされていた。

彼女の歌の持つ世界は、まっすぐな一本の光のようだ。

アレンジされた曲の持つ疾走感に、彼女の声も昇つていくようだ。

ヤバイ……、ちょっと、好きな声かも。

「ティアス、綺麗だと思わない？」

「まあ、舞台映えする子だよね」

「そうじやなくて、歌つてるとこりうが」

「何、御浜つてそこがよかつたわけ？」

「……だから、いまそいつの話をしているんじやなくてー。」

聞いたら、またオレは「うじて彼女に引き込まれてしまつんじやないかと思つて怖かつたんだ。

だつて、それは愛里を裏切ることにならないか？

彼女が育てたオレのピアノを否定したティアスを、オレが認めるだなんて。

彼女の歌が終わつても、ホールはざわついたままだつた。バンドが舞台からはけてる最中も、音楽が流れ、踊り始める。

「ティアちゃん？ 終わつたよ？ 何ぼーつとしてんの。てか、制服じやん？！」

「え？ あ、真、いたのか」

「ずつといたつての。ティアちゃんに挨拶して帰るけど？」

ティアちゃんて……ああ、ティアスのことか。何なんだよ、その軽い呼び方。

「来るだろ？ ティ」

「いや、先に帰るよ」

「なんで？ すつこに真剣に聞いてたくせに」

オレはやつぱり、御浜にはかなわないかもしれない。
改めて、そつ思つ。

舞台のさらに奥に、楽屋が用意されているらしい。眞の案内でそこへ向かう。

さつきから、顔パスで入つたり、楽屋まで押し掛けたり……。一体何がどうなつてんだ？歌つてたヤツの知り合いだからって、……いや知り合いつつても、昨日会つたばかりなのに。

「てか、テツちゃんは何で制服なんだよ？どこいたの？」

「それがさー、家にいないで駅前のコンビニにいたんだ。珍しいよね。今日はどっちで練習してたの？」

「あー、もう、うつさい。その話題には触れるな！」

帰りたくないふらふらしてました、なんて言つたら、何言われるかわからんねえ。

黙殺。黙殺するに限る！

樂屋の扉前の廊下にティアスと新島がいた。

「チームにセーター、ごつめのジャケットにニット帽。夕方会つたときと同じ、カジュアルな格好だった。さつきのドレスは舞台衣装だったらしい。化粧は落としてないのか、ちょっときついまま。

一人はなにやら争つていたらしいが、傍目からちょっと見た感じでは、ティアスに新島が言い負かされているように見えた。

「ティアス！よかつたよ、今の」

笑顔で彼女に駆け寄る御浜。さらりとそういうことが言えるんだよな、お前は。

「ありがとう。沢田くんも……来てくれたんだね。どうだった？」
「別に」

「また、聞いてね」

我ながら素っ気ないし、冷たい態度だと思ったのだが、彼女は気にする様子もなく、笑顔でそう言った。

「そういうやさ、なんか喧嘩してなかつた?」「一人?」

「いや、大したことじやないんだけど……。ティアスがよけいな気を遣うから」

「余計じやないわよ。フツーでしょ?じゃ、私、もう行くから」「だから、帰ればいいって言つてんだろうが。オレのことなんか気にするなつづーの」

ティアスは黙つていたが、歩みを止めよつとしない。それを新島が必死に引き留める。

「一体何があつたんだか。」

「……沢田んち、妹がいたよな、確か。今夜もいる?お父さんは?」「ああ。いるけど……。オヤジはどうかな?電話があつたし。柚乃がどうかした?」

「ティアスのこと、一晩泊めてやつてくんない?」「はあ?」

何をわけの判らん」とを!

「いや、ティアスのことさつとき話しただろ?で、コイツ、オレに気を遣つて今夜は部屋に帰らんつて言つんだよ。コイツ、言い出したら聞かないからさ。だからつて、この時間にコイツを一人で放り出すのも悪いしぃ」

「ちょっと待て、それで何でオレンちなんだよー!」

御浜が……。

「だつて、白神の家は父さんと一人暮らしだし、オレン家に連れて帰るとあの凶暴なにーちゃんにばれちまつし。お前んちなら妹いるから間違いも起じられないだる！」、お父さんも顔知ってるか？」

確かに……。賢木先生のつてで、一緒に飲んでるくらいだしな。どんな紹介をされたかしらんが、オヤジと賢木先生はかなり仲良いし。

つて、せうじやなくて！御浜がこの女に気があるつて知つてて、それはどいつよ！？いくら柚乃がいたつて……。

多分、オヤジも柚乃も何も言わないと思つけど……。

オレはどいつなる？高校生男子の家に、こんな……可愛い女……。

「今夜だけで良いから、頼むつて！」

「……わかったよ」

新島にここまで頼まれちゃ仕方ない（ホントに保護者みたいだな）。それに、ここで頑なに断る方が、なんか変な気を回してみたいでよくない気がしてきたし。

御浜がずつと笑顔なのが気になるけど。

「それでいいだろ？ティアス。大丈夫だつて、ここんちの妹は確實に可愛いし、この系統の血が入つてるなら」

「それ、何か関係あるの？……ホントに良いのかな、沢田くん？」

「良いよ、別に。泊まつてくだけだろ？どいつせ家は人の出入りも激しいし。御浜なんか入り浸りだ」

何でオレつて、こうこう言い方しかできないんだよ……。

「えー、ちやんと夜には帰つてるよ」

「うん。御浜も気にしてないみたいだし。てか、コイツは俺が愛里のこと好きなの知つてるしな。そんな心配なんかしないか。」

「……じゃ、みひしくお願こします」

彼女はオレに向かつて、軽く頭を下げる。
「ハラハラ」と、可愛いんだよ。

「別に」

思わず、顔を背けてしまつた。

「テツちゃん、冷たいね。そんなんじゃ、モテないよ? いくら顔がよくても」

「てか沢田つて、……うんと、硬派、つてヤツなのかな?」

新島、お前、今ものすゞーへ言葉を選んだだろ。

「女の子の扱いを知らない、お子をまつてコト?」

「いや、そこまで言ってないし。泉は沢田にメチャクチャ言い過ぎだつて。でもまあ、女がいるつて話も聞いたことないし、女がいるよつた感じもしないし。古風つて言うか」

「新島、テツちゃんにははつきり言つた方がいいつて。あの人根暗だから、根を持つよ? あれでしょ? 女を知つてんのか知らないのか

!」

「……知らない、かな?」

「あー、だよねー」

頭痛い……ここから。好き勝手言いやがつて。

「え？ テツは中学のとき彼女いたよ？」

「そうなの？ 意外！ その子とはどうなったの？」

ティアスまで……何こんな話題に食いついて。泊めてやんねーぞ、このやろ。

「んつと……2人だつけ？」

「3人だよ」

「そうやつ。みんな3ヶ月くらいしか保たなかつたけどね」

何で真も新島も不審そつな田で見るかな？ オレに女がいたのが何がおかしいんだよ。

「あー、でもなんか予想できる。下手に見かけが良いから、女の子から告られて、興味本位でつき合つてみたものの、結局どつでも良くなつちやつて、やることだけやつてポイ捨てしたあげく、彼女に悪い噂とか流されたりしてそう」

「顔が良いからつつき合つてみたけど、超つまんない、とか言われてそうだな。そう言つとこ、中坊は酷いからな」

見てきたのか、お前らは！ 御浜もなんか頷いてるし！

ノーコメントだ！ 何も言わない、表情すら変えるもんか！

……。
……。まだ、真や御浜が愛里のことを口にしないのが救いだけど

「へー……」

オレを見上げるティアスから、必死に目をそらす。
何がそんなに面白いんだ、この女は。

「良いから、さつさと帰るぞ。これでも家は門限にはいつるといんだ。
さつきだってオヤジから電話があつたし」

なぜだか複雑な表情でオレを見つめる彼女。
でも、つっこむわけにも行かず、オレ達はその場で真と新島に別
れを告げた。

駅から家はそんなに離れていないので、御浜とティアスと3人で
話ながら歩いて家に帰った。

20分くらいの距離だつたけど、御浜がいれば、そこまで酷い態
度をせずに彼女と話が出来た。

家についたときには、時計の針はもう12時半をさしていた。
玄関の前で御浜と別れ、彼女を家の中に促す。

この時間なら、オヤジも柚乃も大抵起きてるはずだつた。

「……あれ？」

台所の電気が消えていたので、不審に思つて、電気をつけてテー
ブルの上を確認する。

……携帯、オヤジから電話があつたはず……。
あれ？ メールも入つてる。柚乃からだつた。

『今日はパパが急な出張で帰つてこれないです。テツちゃんと
連絡つかないって、怒つてたよ？ 適当に誤魔化しておいたけど。私
も出かけるので、パパにはうまく言つといてね（*^-^*）』

ちょっと待て！

「ことは何か？今夜はこの女と一緒にいつてコトー？」

どうしよう。とりあえず、ティアスには事情を説明するしか……。

「うだ、それで帰つて貰おう。余計な誤解を生んでも嫌だし。あ、帰るところはないんだつけ？」

「ねえ、誰もいないみたいだけど？」

「えと……悪い、今日、妹もオヤジも出かけてたらしい……。オレも今知つた。いや、ホントに、マジで。ほら、メールの履歴、0時になつてるし！」

「……そんな必死にならなくとも

わざわざ携帯まで見せてんのに、あつさりしたもんだった。

てか、必死になるつづーのーお前、もしかしてオレを男扱いしてないな？襲われるぞ？

それに、御浜が……。

「そうだ！御浜んちに……。

「もう無理よ。御浜の家はお父さんがご高齢で、この時間はもう寝てるつて言つてたし。うるさくしたら悪いよ。沢田くんさえよければ、この家に泊めて貰つても良い？沢田先生とかいない方が、逆に氣を遣われなくてすむし」

「……あんたがよければ、それで良いけど」

「うわー、冷静だな、おい。一人でおたおたしてるとオレが、かつこわるいだろ？」

「……和室でいい？ 布団もあるから」

「ありがと。でも、沢田くんのピアノが見たいな？ どこにあるの？」

そんな展開になるような気がしてたけど。他に興味がないのか。心配するとか。

別に減るもんじゃないので、リビングに彼女をいれ、電気をつけた。

彼女はためらひとなくピアノの前に座った。

「スゴイね、グランピアノ持ってるんだ」

「母さんだよ。弾くなよ。もう遅いから。近所迷惑」

「判つてるよ。どうしてそう言つ言い方しかできないかなあ？」

「お前だつて相当だと思つけど」

「失礼よね。……お母さんは？」

「オレが子供のときに死んだ。音楽の先生だったらしいけど

「ううなんだ」

彼女はオレを見ることなく、ただ黙つてピアノの前に座つたまま。会話が続かないでの、彼女を置いてキッチンに向かつた。

案の定、冷蔵庫にはショウウジが作つた夕飯が残つていた。今日はレバニラ炒め（ピーマン混入）だつた。一応、柚乃のメモが残つてる。

そういうや、何も食べてなかつたな。

「こんな時間にご飯？ 妹さんが作つてくれてるの？ 沢田先生？」

いつの間にカリビングからこっちに来ていたティアスが、普通に
オレの向かいに座った。（隣に座るかと思っていた）
オレが作ったという発想はないのか？！（作らないけど）

「オヤジも妹も作るけど、これはシユウジが作った」

「誰？」

「親父の後輩で御浜の甥で、お向かいさん」

「？？？え？……うーんと、男の人？いくつなの？」

「10年近く女のいない、悲しい32歳だ」

「わざわざご飯作りに来てくれるの？」

「うーん、それもあるだろうけど、趣味もあるかな？テレビ見て料理作るわりに、あいつんちにレトルトの食材とか調味料とかあるの見たことないし。老酒とかテンメンジャンとかフツーにおいてあるんだぞ」

「スゴイね……」

「……お前、食いたいの？」

ものすうじく物欲しそうな顔してるんですけど。

「食べたい」

ハラ減つてんなら言えつつーの。

仕方ないので、かるうじて炊飯器に残つてるご飯をよそい、箸と作つてあつた海苔と卵のスープを用意してやる。

「すーーー、おーしー！」

……よーけ食つなあ……。ほとんど一人分残つてたからよかつたものの。まあ、うまそうにしてるから良いけど。シユウジにも言つた

ところやね。

あんなきつこ」とを言つ女だから、どんなかと思つたけど、笑つてれば可愛い。美味しそうに食べてる姿も。

「うれしかったわよ」

綺麗に残さず食べてる。よつぼづハラ減つてたかな？

「沢田くんの笑つた顔、初めて見た」

彼女はそう言つて、また笑つた。

オレ、今笑つてた？

「オレだつて、笑う」とくらうあるつ……」

あー、ホントだ。なんか顔が緩んでる。何でだ？

「笑つてた方がいいよ。なんか、そうしてる方が話しゃやすうに見えるし」

普段は話しゃべれりうて口上ですか？ そういうですか。

「笑つてたら、ピアノ……楽しくなると思つよ？ 残念だな、こんな時間じゃなかつたら、沢田くんのピアノが聞きたかった

「つまんないつて言つたくせに」

「だつて、君がつまんなうだつたから。楽しそうに弾いたら、変わるよ。私は、沢田くんのピアノ、好きだけどな。だから、つまんなそなのはもつたといつて思つただけ」

「……言葉がたりねえよ、お前」

「それは、お互い様よ」

「この女は～～ああ言えぱ」いつ間にかからこ～

「コーヒー、いれて良い?」

「ああ。」コーヒー豆は戸棚だ

彼女はオレの顔を見ずに席を立ち、人んちだと呟つのにコーヒーをいれようとする。わけわからんねえ、この女。

大体、今せつきました。お前はオレに喧嘩を売つただろうが。

……ホントに、この女は……。

「だーつー何やつてんだ、さつきからおとなしく見てりやー。」コーヒー一杯まともにいれられねえのか!しかもコーヒーメーカーなのに!漫画かお前は!」

「コーヒーメーカーにフィルター、ペーパーも敷かずに、豆も挽かずにいれやがつた。」— いうわけの判らんヤツつて、ホントにいるんだな。

「コーヒー、いれたことないの?」

「インスタントなら……」

「良いから貸せつて、座つてろ」

「コーヒーメーカー人分をテーブルに出し、牛乳も」— 寧に温め、ピッチャーにいれ、角砂糖も用意する。

うん、何でオレがこんなコトしてるんだ?

「スゴイね、沢田くん……。美味しいよ、これ

「当たり前だ。インスタントと一緒にするな。てか、お前、ホントに何も出来ないんじゃないの？」一人暮らしだろう？今「……まあ、何とかします。……何でしようか、その珍しい生き物を見るような眼差しは？」

「別に……」

「ごめんなさい……」

「何、謝つてんの？」

「怒つてたし」

もしかして、それでコーヒーいれて誤魔化そうとか思つてたんだらうか。

謝るんなら最初から謝れつづーの。

まあ、オレの言ひ方も悪かつたけど。

「別に。オレ、こういひ方しかできないんだろ？」「やっぱり怒つてるし。しかも根に持つてるし……」

彼女の頬に、右手を伸ばす。

髪に触れ、耳の後ろ側を軽く指でなでる。

「持つてないって、別に」

「……顔が怒つてるし」

少しだけ、彼女の顔は赤くなつていた。

自分でも、何で彼女に手を伸ばしたかは判らなかつたけど、今さら引つ込めることが出来なかつた。

「テツちゃん？まだ起きてるの？……って、何してんの？…女の子連れ込んでる！スゴイ！あり得ない！明日、地震！？」

そう言つオチか……！オヤジじゃないだけマシか。
それでも、彼女の頬から手を離さない自分がいた。

第1話 (the heads) ヘローグ

一通り、誤解が生じないように、ティアスのことを柚乃に説明する。

まだ、2時半なのに、帰つてくるの早すぎるので。

キッチンに向かい合わせに座つたまま、ティアスは俯いていた。

「どうしよう。私、友達の家に泊まりに行つた方がいい？ それともシコウジさんちとか……」

「お前、人の話聞いてたか？ 何を勝手に捏造しとるか！」

「だつて、このテツちゃんが！ 女の子を家に連れ込むなんて…すごいくない！？」

「いや、そう言つんだつたら、絶対家には連れてこないから。こんな人の出入りの激しい家に！」

「え？ でも、ホテル行くお金なんかあるの？ ……ああ、相手の家に……」

「だから、違うつづーの。いい加減にしろつづーの！」

「だつて、さつきの説明に、その、ものすつづーくつこい感じに恥ずかしい雰囲気の説明がなかつたから」

うん、それはオレが悪かった。
て言つた、つこまんしてくれ。ホントに。

「彼女じゃないの？」

「だから、昨日会つたばつかだつて！ 大体、ティアスだつて帰る家あんのに、何で今日に限つて帰らんとか言つてんだよ。オレ、事情聞いてないぞ！」

「……何で私に丞先が向くのよ。また怒つてるし」

「怒つてないつづーの。なんかもう、新島も誤魔化しながら喋つてたし。どういうことだよ。オレ、相当人が良いぞ？！」

「テツちゃん、みつともないから逆切れしないで」

誰のせいだ！

「……テツちゃん、相当恥ずかしかつたのね、彼女とのことをからかわれるの。カリカリしてるけど、割と「別に」とか言って冷めた返事をしては、女の子に逆切れされるタイプなのに。彼女、照れちゃつてるじゃない」

「お前、何でそんなに発言がおばさんぽいんだ。何様だお前は。それに、ティアスはこんな子供みたいな顔してるけど、オレより年上だぞ」

「え？！そーなの？中学生くらいかと思つた」

それはさすがに失礼だろう。でも、ティアスは柚乃には何も言わなかつた。

「今住んでるマンションが、灯路の彼女の持ち物なの。それで、今日は彼女と灯路が会う日だから、私がいたら邪魔でしょ？だから、消えてようと思つたのに、灯路が『そんな気を遣う必要ない』って言つたよ。全然、会えないくせに」

「へえ……新島の彼女の……？」

新島に彼女？

「アーッ、今彼女いるんだ。初耳。4月くらいに女子校の女と別れたつづーのは知つてたけど」

「その彼女、すごくない？だって、自由に一人でそのマンションを使つてコトでしょ？」

柚乃の言つことにも一理ある。

どこのお嬢様？金持つてるよな。

新島んちは、ふつーのサラリーマン一家だから、そんなもの持つてるわけもないし。それに、新島んちのものだつたら、ティアスがそこにいるのがばれるから、違つし。

「今日はそのマンションに一人でいるつてコトか。わざわざマンション用意して男と会うつてのも……。どんな女だよそれ、すげえな、マダムか！？それに、全然会えなつてのは、忙しいつてコト？」

「うん。そうね。今日は来てたけど」

新島のヤツ、隠してんのかな？ そう言つタイプじゃないんだけどな。

ティアスに興味がないつて言つときには、「彼女いるから」つて一言言えよかつたのに。

「年上で、働いてるわね、その人。しかもバリキヤリじゃない？ その新島つて人、テツちゃんの同級生でしょ？ すごくない？」
「うーん。 そうだよな。 うちの親父と母さんみたいな感じかな」
「あ、そつか。 そうだよね。 パパって、高校生のときにママと結婚したんだっけ」

興味本位で話すオレ達を見つめながら、ティアスはただ黙つていた。彼女はどうやら、それ以上話すつもりはないらしい。

オレの問いかに答えた。それだけなのだらつ。

柚乃もさすがにそれを察したらしい。

「私、お風呂入つてから出かけたからさ、もう寝るね。ティアスさん、気にせずシャワー使つてくれて良いから」

ステージ用のきつい化粧のままのティアスを見て、由乃はそう言った。

「ティアスで良こよ。ありがとう」

「テツちゃんのお密さんだから、あと頬むね。つこでに密聞で一緒に寝たらしい。」

「うみせえ、早く寝る。おっさんかお前はー。」

柚乃はオレの台詞を笑い飛ばすと、キッキンを出でいった。

「悪い、ティアス。ちょっとパーへー飲んでろ」

そう言つて、彼女をキッキンに残してオレは柚乃を追いかける。一階にある彼女の部屋に入ろうとしてるところを、捕まえる。

「柚乃ーーちょっと待てーー話が……」

「何よもう。邪魔しないから」

「そうじやないって、ティアスとオレが一人でいたこと、御浜には言つなかよ?」

「何で? 何で御浜さんなの?」

「だつて、お前だつて変だと思つたら? 御浜があんなに一人の女に執着するなんて。ティアスがいるから言わなかつたけど、アイツ、あの女を見たときに『好きになつたかも』なんて言つてたし。だから……何もないつて思つても、気にするだろ?」

「……御浜さん、ティアスのこと好きなんだ。そつよね、すつゞく可愛いいし」

「うん、まあ、可愛いとこもあるけど。……お前は怖いぞ」

もしかして、とは思つてたけど……。てか、ほぼ確信してたけど、
柚乃つて……。

「テツちゃん、頑張つてね。私もいたことこじこじあげるから、
何があつても今なら誤魔化せる」

悪魔的契約？

御浜とティアスを引き離したいだけじゃん、それつて。

「あのなあ、オレは……」
「冗談よ。でも、ホントにいい感じに見えたけど？愛里さんより、
よっぽどいい人だと思うけどね。あの人は、パパの追つかけだし。
私は……」

そう言つて、柚乃は黙つた。そして、小さく「じめん」と言つて、
部屋に逃げ帰つた。

柚乃が愛里のことをあまり好きじゃないのは知つてゐる。でも、オ
レがあんまりあの女に執着してゐるから、気を遣つてゐるのも知つてゐ
る。だから、オレと柚乃はそこら辺の兄弟よりよっぽど仲がいいのに、
そのことに関しては腫れ物を扱つようとする。

そのたびに、オレだって申し訳なくて仕方がない。何度もこの思
いを捨てようと思つた。
だけど、それが出来ない弱い自分がいる。

それは何だか、ピアノの前で弾けずに苦しんでる自分と同じだつ
た。

ぐだらない。女一人のことで、こんな風に考え込む自分なんか。

それより、やつやとキッチンに戻つて、ティアスに部屋を用意してやらないと。

「ティアス、部屋を……」

For e s t a n d m e a d o w a r e s t i l l .
e a c e f a l l s o n v a l l e y a n d h i l l .

食器を洗いながら彼女が口ずさんでいたのは、モーツアルトの子守歌だつた。（しかも何故か日本語でもドイツ語でもなく英語！）ついたさつき、ステージ上でバンドをバックに、あんなに力強く歌つていたとは思えないくらい、優しく、そして子守歌にしては甘い歌声だつた。

「あ、ごめん、何だつた？」
「いや、何でもない。食器、洗つてくれてたんだな」
「うん。これくらいなら出来るから」
「英語で歌うんだ、子守歌」
「あ、ごめんね、夜中なのに」
「良いよ、今くらいの声なり。それより、続き、歌つて

彼女は心底驚いたような顔をした。

「聞きたい」

彼女が照れたように微笑む。それに答えるかのように、オレも笑つた。

明日、弾いてみようかな、この曲を。

01

朝7:00。何故か「月光」で起こされた。
何でオレ、リビングのソファにもたれて寝てたんだ?
ピアノを弾いていたのはティアス。オレを起こしに来たのは柚乃
だった。

「テツちゃん、今日は走んじゃないの? 大体、いつ寝たのよ、こんな所
で。真冬なのよ? 風邪ひくわよ?」

布団になるものが何もなかつたからか、オレはティアスの着てい
たコートにくるまつっていた。

昨夜、結局ティアスとオレははずつと話をしていた。

一応客間も用意したし、風呂にも入つた。だけど、リビングに戻
つて、ピアノの前で話をしていたら、こいつの間にかここで寝てた。

清々しいほど、やましいことは何もない。

そして、オレはうつかり寝てしまつたといつのこと、俺と一緒に話
していたはずのティアスは、朝からピアノを弾く程度には元気だつ
た。

「いや、もう、走つてる時間とかないし。……眠いし。今日休もう
かな」

「私は止めないけど、パパは今日、帰つてくるわよ?」

「……顔、洗つてくる」

「朝食の準備、手伝つよ」

ティアスは柚乃のあとについてキッキンに向かう。何でそんなにタフなんだ。

なんか、すつげーくだらないこと話してた気がする。いつ寝たのかも覚えてないし。

『良いよ、今ぐらこの声なり。それより、続き、歌つて。聞きたいあの時から、オレは確実におかしくなってる。何であんなこと言つたんだか。

顔を洗つて、制服に着替えてから、リビングに戻る。そう言えば、最近朝は練習曲ばかり弾いてた気がする。彼女が昨夜歌つた、モーツアルトの子守歌の楽譜を探す。たしか昔、弾いたことがある。

彼女の歌を思い出しながら、指を動かす。

「朝から子守歌で寝かしつけてどうすんのよ、」飯出来たよ?」

リビングまで呼びに来てくれた柚乃の後ろで、ティアスが微笑んでいた。

彼女の微笑みが、少しだけ照れくさい。

「なんか、すじく優しい。沢田くんのピアノ」

「つまんなかった?」

「つうん。すじく良かつたよ。私はああいう、感情的なのが好きだな。すじく丁寧だし」

優しい? 感情的? 丁寧?

ホントは、今のオレは、指が動いただけでも驚いていたのに。

「ティアス、今日はどうするの？家に戻るの？」

「ううん。芸大に行って、賢木先生の所に顔出して、受験の話をしよつと思つて」

「受験？」

箸と茶碗を持つたまま、オレの顔を見る柚乃。

そういうや、そんな話、オレもすっかり忘れてたし。

「試験を受けるとかつて新島から聞いたけど。学校とか行ってんの？」

「ううん。でも、高卒認定は持つてるから。来年の入試を普通に受けるよ。推薦枠があるって、賢木先生は言ってくれたけど、あの大学、ただでさえ人数少ないし」

「そだな。声楽なんか、たぶん5人くらいしか入れないはずだしな」

昨日、芸大に行って、ちょっと考えが変わったって感じだな。

「受験しないかもしれないし。なんか、大学に入らなくとも良いかなって思つて」

「なんで？てか、お前、何しに日本に来たの？兄ちゃんがベルギーで探してんだろ？」

「あ、それはね……」

呼び鈴が鳴る。多分、御浜だ。

たまにこうして呼びに来るけど、今日は絶対来ると思つてた。

「オレ、出るわ」

もう食べ終わっていたので、片づけを任せて玄関に向かつ。

やましこ」は何もないけど、心苦しかったので、ところのもある……。

「ティアスとちやんと仲良くしてた?」

「お前はお母さんか!別に、フツーだよ、フツー。柚乃とキッチンで飯食つてるよ」

フツー フツー と言いながら、必死にフツーに取り繕つて 分は、もう いっぱい いっぱいだ。

「今朝、ピアノ弾いてたね」

「……月光は、ティアスだよ?」

「でも、子守歌はテツだろ? 珍しいね、朝、練習曲じゃないのを弾くのつて」

「たまたま楽譜があつたからだよ」

ティアスの顔を見に来たであろう彼を、彼女の元へ案内する。

「今日、鉄城さんは?」

「出張だつて。……柚乃はいたぞ」

「別に何も言つてないのに……」

……なんか、墓穴を掘つた氣がするな。

余計なこと言わんど!。でも、誤解されても嫌だしな。

「急な出張だつたんだね。いつもは前日かその前には判るのに」

「そりいえ、そりだな。まあ、親父が何してるか、俺もよく判つてないし」

そう言えば、御浜が家に来る時つて、大抵親父がいないときだな。

まあ、フツーは家に親とかいたら氣い使つちゃうから、嫌かもしないけど。ティアスも、親父がいない方が氣を遣わなくて良いって言つてたし。なんか親とかにいちいち説明すんの、めんどくさいし。御浜つて、そう言つタイプじゃないけどね。

「ティアス、今日は何か用事がある?」

キッチンにつくなり、朝食をとるティアスに声を掛ける。ほとんど変わらない、柚乃の微妙な表情の変化に、オレは背筋が凍る思いだ。うちの妹は本氣で、怖い。

「あ、ごめん。御浜のメール、今朝見たばっかなんだ。今日は大学に行くつもりだから……」

「あ、いいよ。そんなの気にしないで。また、連絡する。昨日みたいなことあつたらまた呼んでよ」

「うん。ありがと」

御浜のためには、こいつらを一人にしてやつた方がいいのか?

「テツ、今日はバス?バスなら、そこまで一緒に……」

「……いや、今日は愛里の試験が近くでレッスンないから、原付で行く。バスだと時間かかるし」

朝の通学時間ですら、巡回バスしかないんだぞ?一時間に一本だぞ?私立みたいにスクールバスくらい出せつての。

「そつか。じゃあ、ティアスにはバスの路線はオレが教えるよ。新島くんと連絡付かないんだろ?」

「ありがと。今まで移動は灯路に頼りっぱなしだったから、どうやつて移動して良いかわからなかつたんだ。助かるよ」

「いづら一人見てる方が、よっぽど恥ずかしいつーの。
なんというか、不愉快だな。

人の幸せって、妬ましいつーか……。

「じゃ、バスの時間あるから、オレ行くね。ティアスも、バス停まで案内するよ」

そう言つて、二人は慌ただしく出ていった。

「テツちゃん……氣を遣つたんでしょう？ あの一人について言つたか、御浜さんに」

「何を？」

「一緒にバス停まで行けばいいじゃない。芸大なら、テツちゃんの学校の方向じゃない。何も、二人で一緒に行かなくても」「いや、でも、ティアスだつて、こっちに来たのが先週だつて言ってたから、御浜が案内してやんのは別に良いんでない？」

「それが余計な気遣いだつて言つたのよ」

「なるようにしかなんないって」

「うわー、テツちゃんのくせに、なんかヨゴーの発言。知つたかぶつた発言。嫌な感じ。そんな、なるようにしかなんないような経験ないくせに」

何その、妹のくせに、人をバカにしたような発言は。
しかし、御浜がいなくなつた途端、嫉妬に狂いまくつてるな。

「お前、ティアスのこと嫌いなの？」

「全然？ 嫌いじゃないわよ？ 借りてきた猫みたいで」

嫌味たつぱりじやねえか、お前は。

「ねえ、何で、ティアス？」
「何が？」

柚乃の質問の意図がよく判らなかつた。

02

御浜の登校時間とずらしてさつと学校に行くつもりが、結局遅刻する羽目になってしまった。

学校からほど近い公園の駐輪場に原付を隠し、そこから歩いて登校。とっくに始業ベルは鳴つていた。

まあ良いか、なんて思いつつ、メールの着信を確認。

『昨夜はお世話になりました。ありがとうございます(*^-^*)』

ティアスからのメールだつた。

えつと……昨夜、教えたんだっけ？

なんか、すっげえもり上がつたのも覚えてる。オレは始終笑つた

り怒つたりしてた。
でも、彼女のこの行為に抵抗はなかつた。特に驚くことでもない
し。

『新島にツケとくから気にするな。バス乗れた？』

『今バス停で待つてます。本数少ないよ～』

『乗るバス、間違えんなよ？』

「……テツちゃん。何にせにせしながらメールしてんの、気持ち悪い……」

「どわっ！？ 真……何でお前？ いつの間に？」

遅刻してるとこ（（してるから））（してるから） 堂々と裏にある非常口から教室に入ろうとしていたら、隣に真がいた。マイシもビリやら遅刻らしい。

「……お前、遅刻だろ？」

「まあ良いじやない。どうせ明後日には冬休みだし。今日も来るか迷つたくらいで」

「どうゆう理屈だ。だいたい、バス通じやねえのかよ？ お前

始業ベルにちゅうど間に合ひ時間のバスは2本しかない。この時間に遅刻してくるヤツは、家が近い自転車通学の連中だが、真もオレも路線は違えどバス通だつた。

「寝坊したから紗良に送つてもらつたんだよ。天氣予報で雨降るとか言つてたし。もうすぐ1限目始まるよ？ 扉の前にいると邪魔

「悪かつたよ……」

「何、いやに素直。気持ち悪い」

「どうすりや良いんだよ、オレは！」

メール打つのに必死になつてて、扉の前で立ちつくしてたから、悪いと思つて謝つただけじゃん！ なんだよもつ。

ホームルームの終わりを見計らつて、1限目の先生が来る前にこつそり教室に入る。

「なんだよ。泉も沢田も今いる来たのかよ、めずらじ。バス遅れて

た？」

席に着いた途端、後ろを向いて話しかけてきたのは相原だつた。

「いや、今日はバスじゃないから」

「ふうん。じゃあ、今日はあの美人のピアノの先生とは会わないの？顔見に行こうと思つてたのに」

「お前な、何しに来るんだよ。毎回毎回」

「目の保養だつて。佐藤さん、気の強いところがあれだけど、タイプだなー」「

美人見たらすぐそれ言ひじゃねえか。どういうのがタイプ何だか

……。

「相原、今日は新島どうしたよ？いないの？」

真が相原の隣の席を指さした。

「なんか、病欠つて親から連絡あつたらしいよ。風邪でもひいたんじゃない？」

「いや、違うと思つたな……。確実に女といるぞ、アイツ。泊まりだし。

しかし、親から連絡つて。親もグル？！」

「ティアちゃんと引つ張り回されてんじゃないの？アイツ、保護者じゃん」

「いや、違うつて。ティアスは今朝、一人で芸大に行つたし。御浜が朝来てバスの路線教えてた」

「あ、そーなの？怪しいねー、新島のヤツ」

どうやう、真も同じ口トを考えたらし。

「何? 誰、ティアスつて。新島の女?」
「いや、違う。新島の従姉妹だよ」
「でもあの一人、怪しくない? ティアちゃんて、超可愛いし」
「違うつてぞ」

「ここので新島に彼女がいることを言つていいものか、一瞬ためらつた。

普段なら気にすることもない会話なんだけど、今回の新島の態度は何だか違つていたし、何よりティアスがすごく気を遣つていたから。

「てか、何でその超可愛い女の動向を沢田が知つてんの?」
「相原め……顔が良いって聞いたり、何にでも食いつくな。
「関係ないつつの、前向けて」

先生が教室に入り、号令をかける。1限目はオレの苦手な英語だつた。予習も何もしてない。

愛里が、後々のことを考えたら、英語は力を入れておいた方がいいって言つてたけど、どうも身が入らない。

受験でも必須だし、仮に音大に入ることになつたら……。

なんか、何も考えたくねえな。

今日、愛里に会わないですむのはよいかもしない。

彼女のことを考えれば考えただけ、気持ちが重くなつてくれる。

指も、重くなる……。

なんで、オレはピアノを弾けたり弾けなかつたりするんだ？

一人で弾いてると？

愛里のレッスンや、御浜やティアスの前では弾けたんだ。

誰かがいれば弾けるつてのか？ そんなおかしな話あるのか。 それつて、自己顯示欲が強すぎて、みつともなくないか？ 要するに、人が見てるから、努力しますよつてコトか？ 自分、……。

『す、ぐ良かつたよ。私はああいう、感情的なのが好きだな。 すぐ丁寧だし』

つまらなさそりに弾いてるつて言われたり、丁寧だつて言われたり……。どちらなんだよ。

でも、昨日はピアノを弾きたかったんだ。彼女の歌のよつなのを。オレは彼女を羨ましがつているのか？
オレは彼女をねたんだいるのか？

どうしてなのか。この羨望と嫉妬に似た感情は何なのか、オレには判らない。
それでも、昨日一晩彼女と話して、判つたことはある。
オレは彼女を嫌いじゃないし、どちらかといつと興味を持つている。

それは、御浜が興味を持つた女だから、といつのももちろんあるし、何より彼女の歌と、その姿勢に惹かれた。

オレにはない、彼女の強い意志と力。

歌を聴いたあとで、彼女の話を聞いた。だからこそ、その力を感じた。

御浜はもしかしたら、オレが一晩話して（ほんやりとだけど）やつと氣付いた彼女の姿に、一目で氣付いていたのかもしれない。そして、彼のことだから、それ以上に彼女の何かを感じ取っているのかもしれない。

でも、御浜つて、ホントにティアスの何がいいんだろうな。あんなに熱心に口説いちゃつて。あの勢いだと、親父がいないつて判つてたら、うちに一緒に泊まつてただろうし…。

御浜があんなに興味を持つよつた女か……。ホントは彼女つて、どんな女なのかな？ オレが知つてゐるのなんて、きっとほんの一部分に過ぎないんだろうな。

ちよつと氣が強くて、でも怒られるとすぐ弱くなる。

言葉が足らなくて誤解を生みやすくして、でも悪いと思つたら謝れる。

あと、不器用だ。一人で暮らしていけなさそうだもんな。オレがしてやらないとダメだつたし。なんか新島が保護者みたいになつてるものも判る氣がする。ちよつと危なつかしいとこあるし。

確かに、最初の印象は悪かつたし、愛里はティアスが嫌いだけど、オレは嫌いじゃない。

少なくとも、あの女の歌は、スキかもしれない。

「セーウーだー？ なあ泉、この人なんかおかしいよ？ 顔にやけてるし。オレ、沢田つて古風でお堅い硬派な男のイメージがあつたけど

な。今どき珍しい、天然記念物みたいな」

「いや、意外と影でやるこったやつてたらしいよ？オレ、テツちゃんに中学の時は言え彼女が2人もいたことにショックを受けたね」「マジで！？この年寄りみたく枯れた男に人並みの性欲が！？……あ、でもどーせ、顔目当てでよつてこられたはいいけど、すぐに飽きられて振られたりするパターン？その場しのぎは得意そつだけど」

「それ、昨日オレも言つた」

「やっぱねー。…………って、ホントに沢田おかしくない？」

「テツちゃん！授業終わつたよーん。ノートは？」

なんか好き勝手言われてなかつたか？オレ。真がオレの頬を引っ張る痛みで気が付いた。

「いてえよ！ノートがなんだつて？」

「いや、オレ途中で寝ちつたから。相原も寝てるし。なんか、期末に出るとか言つてたのしか覚えてなくて、とつてないかなーって思つたんだけど……」

真が人の手元をじつと見つめながら、ため息を付く。ノートなんか取つてねえつうの。

「何これ、怖！沢田寝ぼけてた？何このノートにある無数の点はー。」

相原に言われ、初めて気付いたが、シャーペンの先で、ノートを何度も弾いたような痕が残つていた。

「いや、なんか考え」としてたかひさ。授業とか全然覚えてないしてか、オレもう英語捨ててるし

「威張つて言つ」とか。もーいや、誰かノートとつてねえかな？聞いてくるわ

……あ、オレも焦らないといけないんだった。

ホントに、何もかもどうでも良いな。どうでも良いってのはヤバイか。ただでさえ英語苦手なのに。

オレの気分を察したかのよひ、空はどんどん曇つてくる。原付で来たのに、勘弁してくれ。

「やつべ、今日は雨じゃなくて雪だつて！ 雨だと思ったから送つてもうひつたのにな」

携帯で天気を確認しているらしい真は、画面と空を交互に見上げた。

「いいじやんよ、オレなんか原付だぞ？……あ、降つてきた」

小粒の雨だつたが、みぞれが所々混じつていた。道理で寒いはずだ。

「道が凍つたら危ないだろ？が」

「ああ、南さんがね……」

その気遣いを他のヤツにもしてくれつての。メールを打つてたけど、相手はきっと南さんだな。他に彼女いるくせに。

ついでに自分の携帯を確認したら、メールが入つてた。ティアスだつた。

『どうしよう、迷つちやつた！（^—^）大学に着かないよ。周りに畠しかない……』

「はあ～？！」

突然立ち上がりつたオレに、びっくりした真。目をむいてた。オレは真と画面と空模様を交互に眺めた。

あの女は、ホントに一人じゃ何も出来ねえつづーか、お騒がせつづーか……。

「早退する。あと頼むわ」

「テツちゃん、なんか昨日から変だね。……御浜がさあ」

真が何か言いたそうだったが、オレはコートとバッグを抱え、こつそり教室をあとにした。

03

原付をのメッシュインの中に学ランだけ押し込んで、コートを着たあと、一瞬我に返つた。

オレ、どうするつもりなんだ？

大体、『迷っちゃつた』だけで、オレに助けを求めるわけじゃないし、もしかしたら御浜や新島にもメールしてるかもしれないし。なんか、勢いだけで出て来ちゃつたし、何で自分がこんなコトしてんのかよく判らないけど……。

昨日の新島とティアスの様子を見るからに、いう言ひときに御浜に連絡するとは考えにくいんだよな……。仲はよいけど、頼つてな

いつて言つた。ちょっとまだ、一線引いてると『ジ』があるつて言つた。
それにしたつて、オレの所にこんなメールを……。
とりあえず、新島に電話してみよつ。連絡もひつてゐるかもしだ
いし。

…………。

電源切つてやがんのか、あの男！相手はどんな女だ！言つて見ろ！
しかたない。なんかものすつゞく気が進まないけど、御浜にメー
ルだ。

『あの後、ティアスからなんか連絡あつた？』

たかが一文打つのに、こんなに気を遣つたことはないつづくら
い、気合いを入れたぞ。なんて当たり障りのない、完璧なメール。

『バス停で別れたきりだけど？どうかした？』

『何でもない。うまく引っかけたのかと思って』

よし、やつぱつ完璧だ。妙な誤解も生まないし（多分）。さりげ
ないぞ。

……つて、何で御浜に連絡すんのにこんなに気を遣つてんだ、オ
レは。何もないんだから堂々としてりや良いんだけど、変な誤解を
生んでもやだなあとは思つわけで……。

友達の彼女つて、結構めんどくさいもんなわけね。
まあ、まだ彼女つてわけじゃないけど。

それにしても、予想通りといつた。彼女は御浜には連絡してな

かつたか。多分、新島にはしただらうけれど。（でも氣を遣つてしなかつたかも）

オレよりは、御浜の方が助けてくれる氣がするけど、何でだ？

雨が強くなつてきた。霧が顔に当たつて痛い。ポートの上から合羽を着込んで（意外と暖かくて良いんだ、これが）木陰に避難する。
「ティアス？ お前、何してんだよ？ どこにいるんだ？」
『（…）… ごめん…。なんか、迷っちゃって、どこにいるか判らないの』

いきなり怒鳴つたからか、ちょっと声が小さくなつていた。子供かお前は。

「周りに何がある？ 煙だけ？ 道は？ 大通りある？」
『えつと、民家と…、遠くの木の陰に、大きな運送会社の看板が見える。トラックがたくさん走ってるけど、そんなに大きな道じゃない。工事してるみたい』
「バス停はどこで降りたんだよ？」

バス停と、彼女の見た景色で大体の場所は判つた。確かに何も印象のないところだから、初めて歩いたら迷うかもしれないけど…そもそも何でバスを間違えるかな？ 天然ぼけか？

ホントに、誰かいないと生きてけないのに、無茶ばっかしやがつて。

「どうか雨宿りできる所ある？ 雨が強くなつてきたから」

『あるけど…。どうしたらいいの？ 私、道を教えて？ 場所判つたんでしょ？』

「うん、でも、お前、絶対また迷うから」

『あ、酷い……』

ちゅうとむつとした声になつた。なぜだか、彼女の表情が手に取るよつに判る。

昨夜話していくて判つたけど、本当によく表情が変わる女だつた。

「迎えに行つてやるから、待つてろ。近付いたら連絡する」

『え！？』

彼女が驚くのを無視して、オレは電話を切つた。

雨と霧の中、原付を走らせた。

あの女は仕方がねえなあ、なんて思いながら。

ティアスは思つたより早く見つかった。彼女は随分歩いたらしく、かなり町中から離れた（といつても、芸大方面行きのバス自体が町中から離れたところも通るけど）所に来ていたので、他に何もなく、人がいそうな所が限られていたからだ。

彼女の目の前にオレが立つたときには、雨はやんでいた。でも、空気はますます冷たくなつていた。

「世話かけさせんな！」

「沢田くん！ホントに来てくれたの？……あの、あり……」

「大体だな、お前一人じゃ何も出来ねえんだし、土地勘ないんだから、何で言われたとおりにしないんだよ。どうせ乗り換えのときにはバスを間違えて、大学方面にいくヤツに乗つたつもりが、全然関係ないルートのヤツに乗つたんだろ？それか、うつかり乗り過ごして芸大通りで降りるつもりが、前熊あたりで降りたとかだろ。で、芸大に向かつてたつもりが、逆方向に歩つてたつてとこだな、この位置からすると。漫画かお前は！」

「不愉快だけど的確に人のミスを付いてくるわね……。せつかくお

礼言おうとしたのに、そんなに文句言わなくていいじゃない！」

顔を真っ赤にして怒るティアス。そんなに怒んなくても良こじやん。

「一応、怒る」とは怒っておかないと。良いから後ろに乗れ、雨がやんぐるついに移動するぞ」

「え？」

「迎えにきてやったんだから、当たり前だらうが。大学までならすぐだから」

彼女がオレの後ろに座ったとき、愛里のことが頭をよぎった。多分、オレがこの女と一緒にいたら、彼女は怒る。嫉妬なんかしてはくれないけど、オレは彼女の所有物の一つだ。できれば、鉢合わせはしたくない。

「あの……ホントにありがと、沢田くん。ごめんね、来ててくれたのに文句言つちやつて。授業中でしょ？ 今……」

「いいよ。じうせ、勉強する気なんかなかつたし。明日は終業式だつてのに、授業なんかする方がおかしいだろ」

「やうかしら？」

なんでだ？ この女が『ありがと』なんて言つたびに、ちよつと動搖してるぞ、自分。

彼女の手が、オレの腰に回る。そつと力を込めたのが伝わつくる。

彼女の手からまとわつついてくる何かを振り払つよつて、エンジンを掛け、走り出した。

「さつきまで、学校で何の授業してたの？」
「英語。まあ、元々苦手だし、良いつて」

風の音と、カブのエンジン音に負けないように、声を張り上げて会話をする。

雨のやんだ田舎道は、他に人もいなくてのどかなもんだった。
なんか、こうこうシーン、映画で見たことあるな……。

港町だつたか、のどかな風景の中を、初々しい高校生カップルが、
こうやって原付2ケツで走つてんだよな。最終的には悲恋なわけだけど、幸せな風景として。

まあ、それはないか。カップルでもないし、おしゃれスクーター
でもないし。別に幸せな風景でも何でもない。

「良くないよ。私、英語なら得意だから。一応喋れるし」

「あー、そういうや、向こうに住んでたつけ？でも、ベルギーって、
英語？」

「つうん。場所によつて違つけど……オランダ語かフランス語かな。
私がいたところはオランダ語だつたけど。でも、その前は英語圏の
国にいたから、日本の高校英語くらいなら教えられるよ？」

そ、それはなんか……魅力的な話？

いやいや、試験勉強で良いんだから、別にそんなに真面目にやる
必要はないつて。ちょっと出でつたところだけ、やつとおや良いん
だし……。

「忙しそうにしてるけど、お前にそんな時間あるわけ？オレが勉強
するのつて、練習したあとだよ？」

「じゃあ、その時間で良いじゃない。今日のお礼に教える。何かさ

せてよ

「良いよ、それであんたの気が済むんならね」

って、何オッケーしちゃってるかな、オレは。

それに、何でこの女も、オレに教えることをそんなに喜んでるわけ？

……まあ、いいか。別にやつて損があるもんでもないし。

「ついたぞ」

話してたつちに、いつの間にか大学の中を走っていた。音楽学部棟の前で彼女を降ろす。

「ありがと。帰りは大丈夫だから……。また、連絡するね

棟の中に入つていく彼女を見送る。思わず頷いたけど……これで良いのか？

「まあ、いつか……」

オレ皿身を納得させるために、そう呟いてみた。

空から雪がちらついてきた。天気予報通りだ。ここに来るまで、雨に降られないで良かつた。ホントにそう思つた。

とりあえず、誰か知り合いで見つかる前に帰るかな……。なんか、妙に人がいないのが気になるけど。

「沢田くん……」

「何やつてんだよ？つこさつき入つてつたばつかじやねえか。賢木

先生は？」

「もー、あの人信じられない！昨日電話したときは、明日学校にこいつて言つたくせに、教員室にも研究室にもいない上に、休みだつて言われたの！しかも、大学も今日から冬休みだつて！」

「うーん……。相変わらず適當だな、あのおっさんは。

それにしても、今日から休みだつたのか。それで、愛里のヤツ、他の場所に行つたのかな？」

「ティアス、とりあえず、戻る？」こにいても仕方ないし。学生がないのに、部外者がいるのもな

「戻るつて、どこに？学校？」

「いや……今さら戻つてもな。早退つて言つて来ちゃつたし。せつかくだし、どつか出かける？」こちの方、あんまり知らないんだろ

？」

「うん。灯路んちの実家つて子供のころに来て以来だから。でも大丈夫？まだ学校の時間なのに。私は一緒に行きたいけど」

「……いいつて。どうせうちの学校だつて、週末には休みに入るんだから。一日一日早くたつて大丈夫だつて」

「そう言つ問題？いいけどね」

ん？これつて、オレがティアスを誘つたつてコトにならない？でも、ティアスも行きたいつて言つたし。

彼女を後ろに乗せ、いつたん家に戻る。さすがに制服のままふらふらするわけにはいかないので、着替えるためだ。

一人で家を出ると、ちよつと雪がちらつきました。

一緒にバス停まで歩き、一人で並んでバスに乗る。会話は今までのことを思つと少なかつたけど、彼女が隣にいるのはなぜだか心地よかったです。

地下鉄に乗つて栄まで出て、オレも上つたことのないテレビ塔に行つた。一人でご飯を食べたあと、雪の降る町を歩いていたらいつの間にか暗くなつてきた。

平日だったのでほとんど密のいない観覧車に乗つた。向かい合わせではなく、隣同士で。

……完全に『データ』じゃん、これ……！

いや、観覧車の個室で、隣同士に座りながら後悔してゐる場合じやないけど。

でも、御浜になんて言つかな……。こんなコトになつてゐること。

流れに任せてたらいつなつてました、とか。
誘つてみたらついてきたのでなし崩し的に、とか。
自分でもよく判らないままこの状況に、とか。

うん。我ながらわけが判らん。てか、そんな理由でビートの誰が納得する？

大体、何でオレはこの女を連れて歩いてんの。
何で……一緒にいようと思つたんだ？

愛里のこと……は？オレ、忘れないし、こんなにも心の奥底に
引っかかつてゐる。

彼女の顔を、こんなにも簡単に思い描ける。

残念ながら、どうしようもないくらい、自分でもバカだと思つけ
れど、彼女が好きだ。あの、酷い女を。

じゃあ、ティアスは？

「なんか、デートみたいだよね」

……言わないようにしていたのに。あいつさつ口に出すか、この女は。

「よから~。オレとデートできるの」

「自信過剰よねー。顔が良いからって、うぬぼれてんじゃないわよ」

笑いながらぱぱっさり切るな。

もしかしたらこの状況を気にしているのはオレだけか？

御浜の存在、引っかかったままの愛里、そしてティアス自身の思
い。

どれもこれも、オレが思っているだけのことだ。もしかしたらそ
れぞれの人たちは、そんなことすら気にしてないのかも知れない。

御浜は、別にオレがティアスとどこに行こうが気にしないかもし
れない。オレがどうとかではなく、ティアスが彼に答えてくれるこ
との方が大事なはずだし。……多分。

愛里はオレのことなんか、親父に近付くためのダシと、自分が育
てた生徒って言う程度の感情しかない。だから、彼女はオレに対し
てどこまでも残酷だ。それすらも彼女は何も気にせず行っているか
もしれないのに、振り回されるのはオレの心のせいなのだ。

ティアスは……。

「なに？ 何かおかしい？ 私」

ティアスが少しだけ顔を赤らめる。オレは彼女の言葉を気にせず、ただまじまと彼女を見つめた。
何でこんなコトになつてんだ？ オレとティアスつて、一体何？
だつて、この女とはつい一昨日会つたばかりで、昨日はうちに泊めて話し込んで、今朝は彼女を迎えて飛び出して……。

……わからん！

てか、考えたくもない！

「あ、ついたみたいだよ」

ビルの3階にある乗降場についた途端、彼女は焦つて立ち上がる。

「……沢田くん、出ないと」

オレのコートの袖を軽く引っ張つた。
それに引きずられるように、ゴンドラから降りた。少しだけバラ
ンスを崩して、彼女に一歩近付く。

「沢田くん？」

オレとティアスつて、一体何？

オレは一体何に引っかかってる？ 御浜？ 愛里？ ティアス？ …… そ
れとも、オレ自身？

「沢田くん、ここだと邪魔になるから、行くよ?」

近付いたままのオレを意識することなく、彼女はオレの背中に手をまわし、ほん、と軽く叩いた。

彼女は、誰に対してもこうなんじゃないのか?

ビルとの間に設けられたステップを渡る彼女を追いかけ、肩を抱いた。

肩から、彼女の腰に掛けて、ゆっくりとなれる。

「あ……沢田くん!？」

彼女の動揺を見て、オレの心は少しだけ満たされる。

つい昨日の出来事と同じだ。

彼女の動揺を、彼女の心が僅かでもオレに傾くことを、オレは悦んでる。

僅かだけれど、心が満たされる。

その、満たしてくれる何かが、昨日よりも大きくなっている。それだけ。

それはオレにとって何も脅威ではない。

オレは何をこんなに不安に思っているんだろう。

考えることがありすぎて、もう何もかもを捨てたくなる。

だけど彼女の動揺が、オレを満たしている。

オレを襲う脅威を、不安を、薄めてくれることはないけれど。

正体が、判らないからか?

「連絡、あつた?新島から

彼女の右手を、彼女の背中越しに右手で掴む。手を絡ませる。

「え? だけ?……」

「こんなコートされたら、動搖して当然だ。

そう言つ意味で、彼女のこの反応は予想通りだし、期待通りだ。
それがオレの心を僅かだけれど満たす。

この心は、残酷なんだろうか? オレはどうして満たされるのか?

「邪魔されるのは、いやかな。いやじゃない?」

「……いやだ」

彼女と右手を絡めたまま、オレの左手は、コートのポケットの中にある携帯へと伸びていた。彼女に気付かれないように、手探りで電源を落とす。

まるで彼女の言葉に導かれるよ! 。

「やつ、良かった。一緒にね、私と」

邪魔されたくない。一緒にいたい。その思いがオレにも彼女にもあると。

「沢田くんちつて、門限あるの? 今夜、沢田先生帰つてくるんでしょ?」

「うーん……連絡すればうるさくは言わないけど……柚乃にはつるさいかな、さすがに。なんで?」

「何時まで一緒にいられるのかなって思つて」

そう言いながら、彼女はオレが絡ませた手をはずした。

「終電までだろ? でも、地下鉄の終電だぞ? その時間はもうバスないし。お前が帰れるのか? どちら邊なんだよ、住んでるマンション

つて

「ん？ 言つてなかつたつけ？ 星ヶ丘だよ。終電の止まる駅だつて」

一步ずつ、オレから距離をとしながら、言葉でオレとの距離を縮めてくる。

オレとティアスつて、一体何？

「じゃあ、遅くなつたらお前んちに押し掛けよつかな？」

「明るい時間ならね」

彼女の顔に、動搖はなかつた。笑顔のまま、オレとの距離は保つたまま。

「おなか空いたね、何食べる？なんか辛いもの食べたいなー」

方向を変え、一人でエスカレーターへ向かう。
その後ろ姿を、オレは黙つて追いかけた。

ティアスにとつて、オレつて一体何？

05

結局、終電で帰り、オレは歩いて家へと向かった。雪は積もることなく、降つてはやみ、降つてはやみを繰り返していた。

携帯の電源を切つていたことを思い出し、ポケットから取り出す。電源をいれた途端、メールが何件も入つてきた。留守電も入つていた。

大きくため息をつく。吐いた息は白く、空氣にとけていく。意を決して、まず留守電から……。

『ちーつす。新島でーす。ティアスから今朝T e l l あつたんだけど、その後連絡とれません。何か知つてたら連絡ください。てか、すんません、ホント。迷惑掛けます』

……留守電でこれつて言つことは……メールもこれ関係つてコトか？

思わず、道ばたで座り込んでしまった。

『新島からティッちゃんともティアちゃんとも連絡とれないって連絡来てるよ。どこ消えた？』

『真から早退したって聞いたけど、真面目悪い？』

か……帰りたくな。

でも、今日は親父も家にいるはずだし、御浜が家に来る可能性は

……。てか、親父がいても、なんか余計なこと聞かれそうだよな。
どうすっかな。

……しうつがない。借りを返してもううつかな、早速。

息子も家を出でいたせいか、深夜に一緒に帰ってきたオレを、新島の両親は快く受け入れてくれた。

新島んちつて初めて來たけど、……」
トにフツーの家だ。築10年って所だな。この辺じゃ何も珍しくない、猫の額程度のお庭がついてるマイホーム。
ますますティアスの住んでるマンションつづーのが怪しいな。ど
こでそんな女と……。

「こんな遅くに突然押し掛けても、何も言わないんだな、お前んと
この親」

「いや、今日はたまたまだ。ちゃんと連絡いれてたし、そのついで
にお前を連れてきたことになつてるし。いつもうるせえよ、昨日も
いなかつたから怒られたし。お前たちの方が絶対楽だつて」

新島は自分の部屋にオレを案内すると、床にクッションをおいて
そこに座るよび足した。言われるままに座ると、冷えた缶ビールを
投げ渡された。

「」の雪の降つてゐる日になあ……」

「文句言つながらん

「いや、飲むけど」

部屋に小さな温冷庫があつた。ナマイキな。

「何？ティアスとなんかあつた？もしかして、わざわざ家に帰らず、オレんちに泊めるだなんて」

「いや、別に何もない」

「でも、学校抜けて、ティアス捨に行つて、そのまま栄でデートしたんだろ？ティアスに聞いた」

「何、出かけてた用事つて、ティアスと会つてたって」「アーッ、

そう言つたオレを、新島が田をむいて見ていた。

「……ああ、そう言つこと？違つて、彼女と部屋にいたら、ティアスから電話かかつてきたから、駅まで迎えに行つたんだ。その時聞いた。留守電も聞いたろ？」

「さつき聞いた」

「何、『丁寧に電源切つてたわけ？』

「お前、今日は『風邪で休み』つて親が連絡いれ

親？」「こらちの親は休んだことすら知らなかつたみたいだけど……誰が連絡したんだ？」

「彼女が連絡いれてくれました」

「そりやお前の女つて、一体何者？！」

「……佐伯佳奈子」

「マジっすか！」「

「そうだ、昨日確かにいた！ティアスの後ろでキーボード弾いてた！ライブ中に騒がれてた！確かに彼女くらいの女なら、マンションの一つや二つ持つてるだろうし、音楽関係にも顔が利く！昨日のライブも彼女がティアスを引つ張つてきたと考えたら、判らないでもない。」

「でも……」

「中学生くらいの娘がいるって、雑誌で書いてるの見たことがある……」

「……」

「よく知ってるな。ああ、そっか。クラシックの雑誌読むんだっけ、お前」

「いや、そんな普通にしなくても、」

「だって、何もおかしくない」

「うちの親父より年上だつての！」

「いいじゃん、東京タワーみたいで」

「まあ……美人だしな。それで言わなかつたわけね、彼女のこと。てか、なんでオレにその話をするわけ？確かに怪しかつたけど、黙つとけばいいじゃん」

「別に、このままティアスとお前がつき合つ出したら、その内絶対ばれるからや。先に言つとこいつと思つて」

そう言つて、彼は一気にビールを飲み干す。

「……なんで黙つてんの？」

「誰と誰がつき合つて？」

「だから、沢田とティアス。わざわざ『』のない女のために学校抜けられないだろ？しかも、白神と顔あわせたくないで、わざわざオレんちに逃げ込んだんだろ？泉だと、白神に連絡しそうだし。そんなに悪い遣わなくて良いんじやない？別に白神とティアスだつてつき合つてるわけじゃないし。お前と一緒にいる時間の方がよっぽど長いし」

「何それ、オレとティアスつて、つき合つてるってコト？」

「いや、別に何もないし」

「うん。聞いた。迎えに来てもいいし、そのまま一緒に遊びに行つただけだつて」

「まあ……成り行き?」

「あ、そう。成り行きね。佐藤さんのレッスン振つてまで」

「いや、今日はレッスンは休みで……」

「なるほど、計画的か。昨日、ティアスが泊まつたときになんかあつたかな……。アイツも沢田に対してエライ好意的になつてたし」「え、そりなのー?」

「ううしてそりやつて、あからさまに引いた目でオレを見るかなー?」

「沢田つて……なんか、泉の言つてたことつて、的を射てるわけね「なに?」

「いや、判んないなら別に良いんだけど。要するに、沢田はあれだろ?白神がティアスのこと狙つてゐるの知つてゐるのに、ティアスのことつちやおうとしてるから、白神に会わせる顔がない、と。だから、わざわざ言つたけど、そんなことねえにする必要は……」

「ないの?なんで?」

「ないだろ。だって、つき合つてゐるわけじゃねえんだし。確かに、氣まずいかもしれんけど、彼女が選んだんだからつて話だし。何をそんなに白神のこと怖がつてゐるかな?」

「誰が、誰を怖がつてゐるつて?
誰が、誰をとつかけおつて?
誰が、誰をとつかけおつて?」

「オレは別に、ティアスのことなんか、好きとか嫌いとかつき合つうとか考えたこともない。大体、あの女はつっこないだ知り合つたばかりだぞ?」

「つき合つままでに時間は掛けるかもしれんけど、好きになるのに時

間は関係ないだろ？ さうでなくとも、お前ら、充分濃いつて

「でも、オレは……」

「はいはい、佐藤さんね。判りやすいよな」

えっと……、新島にもばれてるわけね。てか、オレってそんなに判りやすい？

「オレは……別に御浜のことなんか怖がつてないぞ？ アイツの何が怖いって言うんだ」

「その態度のどこが怖がつてないんだ？」

おっさんの顔をしながら、新島はため息をついた。
空き缶を一つ持つて部屋を出ていき、じばらくしてから布団を持って帰ってきた。

「布団、じばらく使ってなかつたけど、これで良い？」

「……ああ……？？」

さつきの話はこれで終わり？

結局新島が何を言いたかったか、よく判らなかつたぞ？

オレが御浜を怖がつてるだの、オレとティアスがつき合つとかつき合わないとか……。

新島はオレの存在がいなかのようだ、フツーにしていた。部屋着に着替えて、布団に入る。オレもそれに倣つた。

もう1時近かつた。外は雪が降つていて。

カーテンを閉めたら、音がしないことに違和感が生まれた。

「観覧車の写真、見せてもらつた」

「……うん

恥ずかしいな、何見せてんだよ、あの女は。
オレにも送つてもらつたけど、一緒に写つたヤツ。

「あんまり、振り回せなごでくれよな、ティアスのこと。オレ、保護者だから」

電気を消しながら、新島は責めるわけでもなく呟つた。

「……振り回されたのはオレだつづーの
「あ、そ。自覚してるなら良いけど。オレから白神には言わないよ。
ティアスにそいつは言つたな、とは言えないけど」

オレの表情は、新島には見えないはずだった。
でも、まるで彼にはオレの表情が見えてるみたいだった。

「御浜だけじゃなく……真にも言つた。頼むから
「なんで？」

「真は、例えそれがどんな状況でも、御浜の味方だ」
「なにそれ。あの、泉が？ アイツ、執着とか、真剣味とか、無縁な
感じじやん？」

「そうでもない。極端だから。その代わり、オレも彼女のこと誰にも
も言わない」
「そうしてくれると助かるよ」

眠れるはずもなかつた。

酷く、心が重かった。

冬休みに入つて、愛里は用事でも出来たのか、オレの冬休みが明けるまでレッスンは無しだと伝えてきた。しかもメールで。相変わらずだ。代わりに大量に課題を出されたけど。

でも、正直、助かつた。

これで、指が動かなくとも、つまらなさをやうにピアノ弾いてても、オレに何か言つてくる者はいないはずだ。御浜とティアス以外は。

愛里に言われるよりは、良い。オレの心に深く突き刺さつたりはしないから。

「……沢田、お前、ちゃんと寝た？」

「多少……」

起き抜けに布団の上で、眉間にしわ寄せながらメールチェックしてたオレを、怪訝そうな顔で見ていた。

「大丈夫かよ……」

携帯を触つていたら、ティアスからメールが来た。

『昨日はありがとうございました。楽しかったよ。また一緒に出かけようね（＊^_^＊）今日はちゃんと学校行ってね』

「沢田……顔、にやけてる……一ホントに大丈夫か？」

「「」やけてた？！」

「うん。ただでさえお前、愛想悪いんだから、急にこやけると怖いよ。モテなくなるよ？」

「モテてるか？」

「あんだけ声かけられいやじゅうぶんだ。お前、顔が恵まれてるんだっての。口も愛想も悪いけど。……何でかな？」

もつねいつの、どいつも良いつて。中学のときに懲りたから。

「中身お子さまのくせに、何でそんな人生悟りきった爺の顔してんだろうね、お前」

「どういう意味だ！」

「良いから、メールに集中すれば？誰から？」

「……いや」

すいません。布団も片づけずにメール打つて……。

しかし、そんなににやけながらメール見てた？失礼な。

確かに、ちょっと浮かれてるけど……。

でも、この浮かれてると、オレの心が重たいのは別問題なんだよな。

新島の両親と、談笑しながら朝食をとり、新島と学校に向かつた。昨日、雪が降つてたとは思えないほど、外はいい天気だった。バスから見える景色がいつもと違つていて、妙に気持ちが高ぶつていた。

「ティアスつて、今日はなにしてんの？」

「さあ、家でおとなしくしてんじやない？賢木先生がいなくて怒つてたし」

「ふーん、そつか……」

新島がオレのことを不審な目で見てる。

「いや、別に特に何も……！ほんとこ」「別に違うなら違うで良いけど。……あ、泉」

もしかして、真つていつもこのバス？路線違うから知らなかつたけど、いつも同じバスだつたらしい。

「なんでテツちゃん一緒に？で、新島昨日休みだつたし、テツちゃん抜けてたし」

「昨日、たまたま会つたから、話聞くついでに家に泊めたんだよ。ちなみにオレはサボり。……泉くん、昨日の古典のノートを……」「あはは、高いよ。それよりテツちゃん、ビニをふらふらしてたんだよ。御浜が心配してたつづーの」

新島のフリは、最高だつたと思います。当たり障りないつづーか。

「あのなあ。御浜はオレの保護者か？お前は御浜の保護者か？」

「うーん……。テツちゃんの保護者かどうかはともかく、御浜の保護者はやつても良いかな？で、なにしてたの？」

「お前だつて、時々ふらつといなくなるじゃねえか」

「テツちゃんはそう言つこと無いでしょ？最近言動が怪しいけど。愛里ちゃんはどうしたよ？」

「休み明けまでレッスンなしだつて。レッスンない方が課題がきつい……」

真は苦笑いをすると、オレの横に無理矢理座らうと入つてきた。二人がけの座席に、二人で座つてゐつづーの！あげく、この巨体でオレの膝の上にのしかかる。

「御浜がさ、昼くらいからテツちゃんともティアちゃんとも連絡が取れなくなつたつって、心配してたんだよね。テツちゃん、オレのメール見た?」

「いや、夜中に見た。電源きれてるのに気付かなかつたし」

「あつそ。御浜にフォローいた?」

「だから保護者かよ。親父よりうるせえな」

隣で新島が苦笑いをしていた。

昨夜、真と御浜の話をしたけれど、理解してもらえた、と思ったい。

それにしても、オレより新島の行動の方が怪しいんだから、そつちつこめばいいのに……興味ないつてコトかな?

「良いから、重いから退け。膝に乗るな」

「やだー。オレ、体力無いしー。終業式なんだからさぼればよかつた。テツちゃん、今日の午後は……」

「自主練習

「あつそ。つまんない。良いバイトの話があるんだけど」「バイト?」

金はあつて困るもんじゃないぞ?

「そ、知り合いの代理店の人が、安く使えるモデルが欲しいって言つてんの。事務所経由すると高いし、動けなくとも良いつつてだから。友達でいない?つて」

「そういうのかよ……。お前、よくそつ言つ話持つてくるよね。顔広いつつーか。オレ、勘弁して、そう言つの。無理。御浜は?顔良いし。近所のおばさん達に大人気よ?」

「うーん……ちょっと違つかな、イメージと。まあ、放課後まで考えといて。……新島、女のモデルも頼まれてんだけど……」

「……ティアス自身はともかく……。いや、まあ聞いとくわ」

「？微妙なお返事。まあ、他にも声かけるから良いけど」

「そう言つて、真が膝から降りた。もつバスは学校の前に着いていた。

「なあ、昨日の英語のノートって、どうなった？」

「ん？」「バーあるよ。何、英語なんか捨てたって言つてたのに

「いや、やうんとわ……」

昨日、ティアスが教えてくれるつて言つてたのを思いだした。

「あー受験ね。昨日、進路相談表を配られたから、机の中につっこんどいた。年明けに出せつてさ」

バスを降りながら、オレと新島の顔を交互に指さした。

「テツちゃんは音大でしょ？大変だよな、学校はフォローしてくんないから」

「……いや、判んないけど。そついや、お前がどこ行きたいとかつて聞いたこと無かつたな」

「コイツこそ、南さんを追つて芸大！とか言いそうだけど。

校門を抜け、校舎へ向かいながら、真は珍しく少し考えていた。

「うーん。市立大の情報科学部とか、良いかなって。大学は行けつて言われたんだよ、おじさん達に」

……そっか、コイツ、時々忘れそうになるけど、両親いないんだ
つけ……。

もしかして、すぐ考えてたかな、進路のこと。
行きたかったとしても、確かに、言いにくいやな。

「新島は？」

「オレ、関東行くよ。ビリでも良いから、6大学。理系でね」

「……みんな考えてる。御浜はそのまま持ち上がりで大学部に行
くだらうし……。

教室着いたら、怖いけど相原とかにも聞いてみよっかな。

そう言えば、ティアスはどうするんだらう。来年度、普通に芸大
受けるって言つてた。何か目的があつて、わざわざベルギーから来
てるはずだし……。

オレだけか？オレだけなのか？こんななんなの！？

07

会えない時間つて言つのは、どうしても妄想過多になつてしまつ。

毎回そつなんだ。

愛里は学校が休みになると、どこかへ出て行つてしまつ。オレには行き先を告げず、突然。別に、そんな仲じやないけど、一応……
オレの先生なんだから、連絡くらいよこしても罰は当たらないと思
う。

1Jの間は……たしか、秋の3連休のころだったかな。ちゅうどく

の時期に教授がいなかつたからと言つて、1週間くらいフランスに行つていたらしい。帰つてきたとき、その話をやつと聞けた。

今回もそつだ。この間、新島の家に泊まつたときにも来たメール以来、いつさい連絡無し。電話はつながらない。かといつて、愛里の実家にそれを聞くのもどうだらう。

彼女は今ごろどこでどうしているのだらう、なんて、考える。

無駄な行為と知りつつ、オレはそれを繰り返す。あまりに非生産的だ。

「……この、大量の課題が悪いと、オレは思つんだ

「何が悪いの？」

「いや、とにかくだ、何もかも

「要するに、うまく進まないって口上でしよう? ピアノも良いけど、冬休みつて宿題とかでないの? テツの高校」

ピアノの前で、愛里の残していつた課題を前にぼやくオレに、何故かうちのリビングでだらだら過ごしつつ、こんできたのはミハマだつた。

「あるに決まつてんだろ? お前んとこはないのか

「あるよ。内申書に響くからね。やつてるよ、それなりに」

人んちのピアノの横でソファに座りながらジャンプを読んでもるやつの台詞か、それが?

「オレだつて、やつてるわい。……それなりに」

英語以外だけど。

「……何かクリスマスっぽいモノ弾いて」

「何だ、ぽいものつて」

「だつて、思いつかないし！町中で流れてたつて、曲名まで判んな
いつて？！」

「映こつれど、なよ、お」

そう言いながら、練習に飽きていたオレは、棚から楽譜を探す。確か昔、母が使っていた楽譜の中にあつた気がする。

探しでいる最中、呼び鈴が鳴った。

「御浜、出でこな
..... テツんちじやん」

ぼやきながら、彼は玄関に向かつた。
戻つてくるときには真を連れてきていた。

「なんだよ。お前の密じゃねえか！」

「よく判つてゐじやない、テツちゃん。ハマんちに行つたら、こ
こだつて言つから。あ、……何かクリスマスっぽいモノ弾いてよ
ピアノを指せし、指定す。みすみす。どこつもコイシも、隠こつてのま
れかい！」

「なんだ？誰の携帯が鳴ってる？」

オレの言葉に、眞と御浜が首を振る。……オレか。ソファの上の携帯を取り、着信相手を見て、思わず御浜の顔を見てしまった。

携帯片手に、御浜達から距離をとつて、コビングを弄る。

「……なんだよ」

『なんだよって、随分よね。どうしてそんなにいつも喧嘩腰なの?』

ティアスも、愛里と一緒に突然なんだ。
まるで彼女のように、オレを振り回す。

「いや、喧嘩腰……ではな」

『だとしたら、自分を知らなすぎるわね』

『マイシは……ホントに、ああ言えませひの言ひ。

でも、電話に出てしまひ自分が悲しい。なんでだろひ。

「だから、なんの用だよ?」

『冬休みじゃないの?』

『冬休みだけ?』

『御浜に一緒に出かけないかって誘われたんだけど、一緒にいるの

?』

……すみません、質問の意図が全く持つて判らない。

思わず、リビングの扉を見つめる。何だか怖くなつてしまひ、少し
ずつ、リビングから距離をとる。

「一緒にいるけど……。一人で出かければいいじゃねえか

『御浜が、みんなで出かけようって言つたの』

『ますます持つて意味がわからねえ!』

『いるんならいいよ。それだけ』

電話切つやがつた……。御浜も意味わからんねえけど、マイシも意

味がわからんねえ。

……また呼び鈴鳴つてゐるし。仕方がないので、今度はオレが出る。玄関にいたのは、ティアスと新島だった。

「どうから電話かけたんだよ」

「そー」「

御浜んちの前の方を指さすティアス。

「へー。そう言えば、沢田んちつて初めて来たかも。お坊ちゃんか、お前は。でけえ家だな」

「グランンドピアノあんのよ、この家」

「クラシックやるヤツは、大抵金持つてるつて言つけどなあ……」

人んちの玄関で、人んちを值踏みしないでくれ。

「なんで新島まで来てんだよ？クリスマスなら、彼女といればいいじゃん。こんなガキといなくとも」

「ガキとはなによ！失礼ね！」

「まあ、仕事だし」

……そりやそうか。思わず納得。

それにしたつて、電話の意味が判らん。

「なんで電話なんか……」

人が質問してんのに、一人揃つて勝手に上がつてゐるし。

「まだ入れとも、良いとも言つてませんが」

「まあまあ。呼んだのは、白神だしな」「何で家なのかな……」

「我が物顔か？御浜！？意味が判らん。

「テツちゃん、ただいま。御浜さん、まだいる？……お密さん？ティアス？」

帰ってきた柚乃が、玄関に上がっていたティアスの姿を見つけて挨拶をする。なんかどんどん人が増えていくな。

「テツちゃんの友達？」

「新島つて会つたことなかつたつけ？ティアスの保護者だよ

「間違つてねえけどな」

柚乃は新島に簡単に挨拶をすると、ティアスと一緒にリビングに向かっていった。その後を、オレと新島はゆっくりついていく。

「お前の妹、予想はしてたけど、むっちゃくちゃ可愛くない？！明らかにお前と同じ顔の遺伝子が入つているのだけが気に入らんけど」「……兄妹なんだから当たり前だろうが。てか、そんなに似てる？オレら。自分たちじや全然わからんねえけど。親父ともそっくりって言われるけど……」

「本人達はそんなもんだって。端から見たら、よく似てるよ。あんなに可愛いのになあ……」

「オレを見るな、オレを

「しかも嫌そりに！－！」

「てか、何でオレに電話なんかするんだよ、あの女は。思わず御浜

達から逃げ切らやつたじゃないか

「たち？」

「いや、真がいるんだよ」

「あつそ。てか、何で逃げてんのか、その方がわからんねえし
「電話の方がわからんねえって。どうせ来るんなら、電話する必要な
いし。オレが呼んだ訳じやないし」

新島は不審そうな顔でオレを見つめながら、わざとらしく皿を伏
せ、大きく溜息をつきやがつた。

失礼なヤツだ。意味が判らん。

「そんなの、考えなくたつて判るじゃん。大した理由なんかないし。
だつて、メールはしてんだろう？」

「……えつと」

「何でそこでエロ本見つかった中学生みたいな態度になるかな……」

「わざわざ隠さないし」

「メールは隠すのに……」

「だつて、さつきの明らかにおかしいし」

「おかしくないし、何でこだわんのかの方がオレにはわからんねえや。
電話来たなら、『オレに電話がしたかったんだな』って納得して喜
んどけばば？」

喜んじけばって言われても……。

「いちいち理由なんか考えてたら、疲れるだけだつて」

「いや……気になるだろ？」

「お前、映画とか考えてみるタイプだよな？」

「あんまり見ない」

「あつそ。理由考えるより、これからどうみよつかなつて考える方
が楽しくない？」

そう言つて、新島は笑う。

「……新島つて、そうやって彼女とつき合つたんだ」
「せうやつて、つき合つてるんだよ」

彼はオレの言葉を訂正してから、リビングに入つていった。

どうしてそんなに良いように考えられるのか、不安がないほど安定しているからなのか。

理由は判らないままだけど、オレは無性に新島の状況がつらやましくなつた。

彼は決して、陽の当たる恋をしているわけではないの。

08

「あれ?なんか人数多いな……。ま、いつか、多い方が楽しいよね、きっと」

ソファに座つたままリビングに集まつた人数を見渡し、満足そうにそう言つたのは御浜だった。

隣でシンが、いつもの嘘臭い笑顔を浮かべながら相づちをうつ。オレは、話に入る気などもちろんなく、一人を少し離れた場所から見守つていた。

「動くのめんどくせうただけだねえ。どつか行くつもり?」

「……考えてなかつた」

「あ、やつぱり？」

……人んちのリビングに多人数集めたかと思つたら、何も考へてなかつたのか、こいつら。

おおかた、ティアスを呼びつける口実つて所だな。結局、また新島連れてきちゃつてるけど。

「紗良さんも連れてくればよかつたのに」

「今日ねえ、バイトなんだつて。その後、研究室の人たちと飲み会だつて。寂しいよねえ」

「そういや、御浜つていつの間に南さんとか仲良くなつてんだろ。何気なにすごい。オレだつて、ほとんど面識ないのに。」

「そういうや、秀一さんは？ あの人、大抵この家にいるのに」「そんなにしようちゅうはいないよ。それに、年末年始は忙しつて言つてたし」

「」のメンツの中に秀一がいたら大変だらうよ。あいつ、自分の独壇場以外は、ほとんど喋れないし、若い力にあのおっさんが勝てるとは思えん。

「テツちゃん、なんか目つき悪いねえ」

「いつものことだつて。ほら、あの人ああ見えて人見知りだし、人が多いところ苦手だしね」

「つるせえよ！ 聞こえるように悪口盡つくなつてのー！ お前らはー！

「うわ、睨んだよー！ ひどー！」

「絶対、『つるせえよー』とか思つてるね、あれ」

……お前はオレの心が読めるのか？御浜！

「ティアス、きてくれたんだね、嬉しいよ」

御浜達にティアスが近付くと、彼は屈託のない笑顔で彼女を受け入れる。その笑顔に、彼女は笑顔で返す。

まあ、この場面で、あんな可愛らしい」と言つちやうのが御浜だよな。

「忙しかった？」

「ううん」

彼女は少しだけ照れていた。まるで、一緒に出かけたあの時のように。

クリスマスイブに、気に入った女呼びつけて、多人数とはいえてかけようつてのは……御浜にしては、良い傾向かな。こんなコト、あいつには今までなかつたし。

その相手がティアスじゃなければ……。

いや、別にティアスでも良いじゃん。オレとティアスなんか、何でもないし。新島が変なこと言つから。

そりや、じつそり一緒に出かけてるし、メールもしてる。電話だって、別に初めてじゃない。

でも、べつに何でもないじゃん、オレ達は。

彼女は、オレの方をちらりと見ると、微かに微笑む。思わず、オレもじつそり笑顔を送つたりする。だけど、その行為に、オレの心臓は高鳴ると同時に、締め付けられる。

だつて、御浜が見てる。

友達が好きな女とつき合つなんて面倒なこと、オレはしたくない。これは別に、御浜を怖がつて言つたのは違つと思つ。だから、こないだはつづかり一緒に出かけちゃつたりしたけれど、もうしない。

……連絡はとり続けてしまつかもしれないけど。

「ど」「行くの？」

「名駅とかは？ イルミネーション綺麗らしいよ。」

「えー、御浜、こう言つときは、もっと人の少ないと」「ぐくー。今日なんか、あり得ないくらい人がいるよ？」

「じゃあ、どこ行こうか」

「……要するに、決まってないのね」

ティアスの突つ込みに、3人で笑い合つ。

なんか、一緒にいるところをあんまり見てなかつたからその様子にまだ違和感を感じるけど、いつの間にかそれなりに仲良くなつてたんだな。そのわりには、まだ保護者付きか。でも、つき合つなら、さつさとつきあえよ。めんどくせご。

「沢田、何でそんな遠巻きに見てんの？」

「……別に」

「眉間に皺寄つてるし」

「ほつとけ、いつものことだ」

新島はこう言つとき、特に機嫌を悪くするでもなく、苦笑いをする。なんか、妙に落ち着いてて、大人っぽい。

正直、羨んでるんだろうな、オレは。こんな新島のことを。

「そりいや、お前、ホントに良いの？ ティアスと一緒にいて」「なんで？ 別に、いつものことだし。オレ達、仲良いんだよ、こう見えても」

「いや、何がこう見えてなのか。充分すぎるほど仲良いつて。そうじやなくて、こんな保護者まがいのこととして振り回されてて、それで良いのかってこと」

「楽しめばいいんだって。オレは、ティアスのこと気に入ってるし」「気に入ってる、ねえ」

「いいじゃん、顔は可愛いんだし」

「……他は？」

「まあ、いろいろかな」

誤魔化したな。

「また、眉間に皺寄ってる。言いたいことがあれば、素直に言つた方がいいこともあるよ？ 人生長いんだし」

何でかな。やつぱりあいつらの方を見ると、嫌な顔になるな。別に、どうだつて良いのに。

「出かけますよー」

「重たい、乗るな！」

「いでえつて！、泉！」

こそそしてたのが気に入らなかつたのか、真がオレと新島の間に割つて入り、無理矢理オレ達二人と肩を組んでのしかかつてきた。体でかいんだから重いつつーのー

「オレ達、一緒に行く意味あんのか？」

御浜には聞こえないうち、真にそう聞いたのだが、ローリーは一切顔色を変えなかつた。

「一緒に行かなきゃいけないくらい、初々しい関係なわけよ、そこのど」「判つてる?」

「しらねえよ」

あからざめに嫌悪感を示してしまつた、何て思った瞬間、地面が軽く揺れる。そんなに大きな揺れではなかつたけれど、体が浮くよくな、妙な感覚が残つた。

「最近、いつも小ねこ地震多いよねえ」

「そうか?」

「ほり、夜中とか……。テッちやんて、あれだよな、鈍い?」

「お前が神経質なだけじゃねえのか?」

……つまく話がそらせたよつて、何よつ。

ピアノの前では、ティアスと御浜が笑い合つてゐる。それで良じんじやない?何だか楽しそうだし。

そう思ふのと、元気になに鮮明に、彼女と出かけたときのことを思つてゐるんだから。

なんでこのクソ寒いのと、オレ達は動物園にいるんでしようが?

「テツちゃん……思いつきり不愉快な疑問がありますって顔、しないのー！」

「オレのその不愉快な疑問が判つてるなら、答えをくれ、答えを！」

吐く息が白いつつーのに、どうしてこんな所にいるのか。

騒ぎながら園内を歩く御浜達の後ろから少し離れて、オレと真がゆっくり後を追う。

園内にある遊園地に向かうエスカレーターに乗った。

「まあ、もう過ぎてたしねえ。オレ達、車もないから、足ないしや」

「近場ですませたつてわけか。でも、なにものクソ寒いのに、わざわざ動物園？」

しかもこの動物園、壁もないし、微妙に山の上にあるから、冬は寒いし夏は暑い。

「いや、動物園じゃなくて、あのタワーとか、観覧車とか、ちつといコースターとか、いろいろあるじゃない、遊べるもの」

「お前だつて、普段こんな所来ないだろ？」

「そつでもないよ。ここ安いし、こうこうの好きな女の子、いるよ

「お前が言つと信憑性があるな」

「統計とつてますか？」

マフラーに顔を埋めながら嫌味を言つたんだが、当然といった顔で返された。一体何人と「おつきあ」してきてるんだか。

「まあ、金ないし、町中ふらつとか、カラオケかってとこじゃない？」

「ボウリングとかでも良いじゃねえか。室内だし、町外に出るなら市に出てもの市に出ても同じだる？」

「……先に言つてよ、それ。ボウリングで良いじゃん。大人数で楽しそうだし。健全そうだし。……でも、テツちゃんちからだと乗り換えとかめんどくさいや」

そう言つながら、眞もまたマフラーに顔を埋め、肩をすくめる。

「女の子つてや、あんなミニスカートで寒くないのかな？」
「寒いだろうよ。中身、相當着込んでるぞ、柚乃なんか」
「まあ、なに着てても、外見が可愛ければ良いんだけど、あんまり酷いとがっかりするかな」
「酷いって、どれくらい？」

「うーん」

透視でもする氣か？その辺つさせ。

「テツちゃんてさ、ティアちゃんどじつなの？」
「何が？意味が判らん、その質問の。つーか、その呼び方」
「なの」
「良いんだよ、オレはこいつのや。なんかさ、このヤバい配車しあつたりして、やらしい感じ」
「してないって、別に」
「新島とはホントになんもないみたいだし」
「だから、新島とも、オレともなって」

そう言つたじやねえか。全く、何を探りにきてんだ、コイツは。

「……御浜が、何か言つてるわけ？お前」
「いや。あんな感じよ、こつも。今日だつて、『せつかくだからみ

んなで出かけようか』なんて可愛いこと言つから、つっかり来ちゃつたわけよ』

「可愛い、ねえ?』

「幼いとか、初々しいとか言つつけど』

「ああ、そうですか』

完全に楽しんでやがるな、コイツ。

「観覧車、3人ずつで乗る?』

いつの間にか観覧車の前に来ていた。少し距離のあるオレ達に御浜が大声で声をかける。

……いや、3人ずつって、どんな組で分かれると…?』

柚乃は御浜と乗りたがるだろうし、御浜はティアスと乗りたがるだろうし……。かといって、そんなバランスの悪い組合せは逆にどうよ?ってかんじだし。ティアスがどうでるか判らんけど、いつものように保護者よろしく新島と一緒に乗るかも知れないし……。

「あー、オレ、テッちゃんと話してるから、4人で乗れば?乗れるでしょ?』

「……男2人で観覧車? 気持ち悪!?』

「まあまあ、たまには良いじゃない。女の子となんて、いつでも乗れるでしょ?』

「……いつでも?』

ティアスがオレ達を指さし、嫌そうな顔をした。

真は、そんな彼女の言葉を無視して、ほぼ強引にオレを引っ張つて、御浜達を追い抜き、観覧車のゴンドラの中に押し込めた。

御浜達4人は、その様子を呆気にとられたように見ていた。

「……いつでも、は乗れませんけど」

「なに、ティアちゃんと乗りたかった？」

「なんで？」

「ないだ一緒に乗つたし。

「愛里ちゃんとはじうなったの、美女教師はー？」

「じうむじうもあるが、別に」

思ひだせんなよ、ちくしょい。

「……不機嫌？」

いつもの笑顔のまま、向かいから顔を覗き込む真が、余計に不愉快だった。

「つぬせえな」

「そういうや、休み中つてレッスンとかしないの？」

「御浜みたいなこと聞くなよ。愛里がどこかに旅立つてるから、レッスンはなし。自主練習！」

「それで機嫌悪いの？ホントに愛里ちゃんのこと好きだよねえ」

「この男は……一体何が言いたい。こんな密室で。
なんか……蒸すな……。」

「なんか、不満そうだね。ティちゃんの顔が赤いのは、とつあえず
置いといて」

「つつきーいちいじけぬなー」

余計恥ずかしいつづりのー

「オレなりに御浜にも柚乃ちやんにもティアちやんにも気を遣つたつもりだけど」

「まあ、角は立たないけどよ、あの組合せは。違和感もあんまないし」

御浜達は4人でゴンドラに乗り込んでいた。上から見下ろした限りでは、御浜の隣に座る新島が苦笑いを浮かべているのが見えた。

「新島が不幸だな」

「仕方ないんじゃない? 保護者なんだし」

「そうだな。借りもあるらしいし、わざわざ返をせとけばいいか」

なんかくだらない会話ばかりしてゐる気がするが……しかし色気がねえな。男2人で観覧車つて……。

「テツちゃん、そんな嫌そうな顔して人のこと見ないでよ。何でそう常に喧嘩腰?」

「元々こうじう顔なの…つせえな!」

「喧嘩腰じゃない人は、うつせえな、何て怒鳴んねえつづの。なんだろね、常に心に何かやましいことがあるから喧嘩腰なのかな?」

「……そんなことはないと思うが」

「テツちゃんて、難しいよねえ。なんか子供みたいだからさ」

「誰が子供だ」

ちくしょう、早く下につかねえかな。

「こないだは、こんなコト思いもしなかつた。

隣に座る彼女と、ホントは何を話して良いか判らなかつた。必死だつた。でも、あつといつ間にゴンドラが下について、それが何だ

か寂しかった。

あの時の状況に動搖してたオレに対し、あまりに普通に彼女はかわした。だから悔しくて彼女をわざとからかう。オレにだって、それくらいの余裕はあるんだ。

別に、好きじゃないから、なんだって出来る。

何だつて出来るはずなのに、どうしてこんなに引っかかるてるんだろう。

「ティアちゃんのこと、見過ぎだよ」

「別に、あの女見てるわけじゃないねえし」

「そう、だつたらいいけどね」

本当にただ、あの女見てるだけなら、そんなに簡単なことはないのに。いや、簡単ではないけれど。少なくとも、オレの中では楽になる。御浜のことは気に掛かるけど。

だつて、こんなにも愛里の存在が、痛い。

彼女はオレに対し、いい顔など見せやしないのに。それどころか、オレを簡単に突き落とすくせに。

本当は、もう、何年も前から、彼女のことなんか忘れたかったのに。

「何だよもう、黙るなよ。いつだつて、男2人で観覧車は初めてで緊張をだね……」

「つるさい、黙れ」

「ひど！ボケを拾う気すらないのかよ！あんまりまじめな顔しないでくれる？オレがいじめてるみたいじゃん」

「つーか、今のボケ？つまんねえ」

「鬼か！テツちゃん冷たすぎ！てか、顔怖いって」

彼女に相手にされないから、彼女に裏切られ続けているから、オレがこんなに寂しくて苦しいままだから。
だから他に逃げ道を探しているのか？

オレにとつてティアスつて、もしかして逃げ道なのかな？
だから、自分でもよく判らないまま、引っかかっているのかな。

「つーか、いきなり遊園地か。まあ、人数もいるし、保護者付きとはいえ、よく会ってるみたいだし。まあ、こんなモンかな」

観覧車から降りた後も、何故かオレと真は、4人を離れたところから追うように歩く羽目になる。

真なりに、御浜に気を使つてゐるのか、微妙な修羅場に巻き込まれたくないだけなのか、どっちだ。

「急に何だ。意味が判らん」

「いや、距離感がどうかなあつてぞ」

「距離感？」

「マイツの言つことは、よく判らん。

「いや、こきなりがついたら、女の子は退くかなあつて思つて

……いきなり2人で観覧車に乗つたり、腰撫でたりしましたが……。

それつて、がつついてる?

「経験上?」

「経験上」

しかも言い切つたし。

「まあ、適切なんじゃねえの？ そう直つ意味では、

「テツちゃんからそんな台詞が出るとは思わなかつたけど」「何で？ 出るだろ、それくらい」

「いや、テツちゃんて、ティアちゃんに『氣』があるのかと、オレ、わりと本氣で思つてたのね」

「意味がわからんねえ」

「オレもだけど。愛里ちゃんに『氣』があるのにね」

「……愛里の話はするな」

ダメだ。どうして表情に出ちゃうんだ。

「御浜がかわいそだからや」

「御浜、本氣かな」

「どうだろね。まだ判んないよ。2週間？ 3週間くらいだつける？」

「そんなもんだな」

そんな短い期間で、人間の何が判断できるといつのか。

「あー、でも、いるよね。クラス替えしたとたん、3日くらいでつきあい始めて、1週間くらいで別れちゃう奴」

「そう言うの、つき合いつつてカウントして良いのか？」

「本人達がそう思つて、やることやりついでりや、そななるんじやね？」

「自分のことか？ 真」

「オレはそんな、即決即断は出来ないつて」

笑い飛ばすが、やつてそうな氣がするな。それとも、つき合いつつてカウントしてないか。……後者かな？

どっちにしろ、めんどくせえ。オレは『めんだな』

1人の女のことを考えるのだけ大変なのに、そんなのがめまぐるしく変わつたら、疲れてしまつ。

「オレ、やつぱ戻ろうかな……」

携帯を開くと、メールが入っていた。相手は、愛里。どうせ大した用じやない。彼女から連絡があるときは、レッスンでオレが遅れたときか……オヤジのこと。

「何？こんな時にメールとか見てんなよ？」
「重てえから寄つかかんな」

でけえ団体で、オレの肩を寄せ、乗つかつてきた。もしや逃げられないよ？

「……寂しいねえ。何、このメール」

メールには『鉄城ど』にいるか知つてる？』とただ一言。オレが知るかよ。大学じやねえのか。……あ、もう休みだつて昨日言つてたな。出勤するらしいけど。

大体、愛里は海外に行つてるんじやねえのか。

「いつものことだよ」

「こないだ言つてた」と、ホントなんだ。なんか、愛里ちゃんも振り回されてる感があるけど」

「振り回されてるつづーか、相手にされてないつづーか」

「へえ……。テッちゃんこわーい……」

そう言こながら距離をとる。

「こ」のメールのために戻るの？
「やう言つわけじやないけど」

思わず、御浜とティアスに目がいつてしまつた。

その様を、真にはしつかり見られたが、知らないフリ。

「だって、こんな来たつて、オレにやつしやつてへー。しかねえつつの」

.....なんかレジについて、こんなメール見てると、おかしくなりそうだ。

「ふうん。返信するの？」

「え？」

סימן

「へえ……。どうだよ、テツちゃんて下

ドMて！！

「河東先生」

「根拠つて言つた。認めてんのかお前は！」

—認めてるか!?

語めてる感じのところの力のため帰ってきた仕方に

違うって。
ただ、寂しいだけ。

…… そ う な ん だ。 な ん で か 知 ら な い け ど、 寂 し い ん だ。 ず つ と 寂

じくで苦じくで仕方なかがた

- 沢田くん

「うわー！」

「……うわ、って。この人、失礼よね? いつものことだけ?」

田の前に立っていたのはティアスだった。笑いながらオレを指さし、真に同意を求めていた。

「どうしたの? 具合でも悪い?」

「別に?」

「なんか、あれだよね。ほつとけない顔してる」

何つーことを! そう言つこと、さらつと言つつか、この女は?思わず隣の真の顔を見てしまったが、何故かちょっと照れていた。

「……何で照れてんだよ」

「いやあ……ねえ」

「何よ、2人とも」

彼女はむつとしてみせる。ホントによく表情の変わる女だ。黙つてると、綺麗なんだけど。

……違うな。そう言つことじや、ないな。
引っかかるんだけど、……なんて言つたらいいか。

「何? 私の顔、なんかおかしい? じつと見て」

今度は彼女が照れていた。

「別に」

わざと、オレは笑つてやつた。嘲るよつ。

「ホントに失礼よね、沢田くんて。いこ、真。何で2人だけ、こん

なに離れてんのよ

「あはは。」「めん」「めん。男同士で内緒話なんだわ」

「なにそれ。気持ち悪くない?」

「あ、やっぱ? オレもそう思うんだけど、ほら、テツちゃんて根暗でひきこもりで人見知りじゃんね。だからあわせてやつたわけよ」

「真だつて、人見知りじやない」

彼女は少しだけまじめな顔でそう言った。

よく見てるな。

それがオレの、正直な感想だった。

このへラへラした男が、いかに人見知りで、人を選んで接しているかなんて、理解するのは難しいだろうに。

オレだつて、御浜に言われて気付いたぐらいだ。言われてみれば、思い当たるフシがある、その程度だつた。それ以後は、気をつけて真を見て、つき合つていれば、よくよく判ることだつたのだけれど。

「オレはそうでもないよ。テツちゃんみたく、友達少くないし」

「友達の数は関係ないでしょ? 良いけれどね」

彼女は笑顔で、前を歩く御浜達の方へ行こうと指さした。

「すぐ追いつくから、もどんなよ。根暗は根暗同士、話してるんで。ついでに、そろそろ腹減らない? って、聞いといて」

「自分で言えばいいのに」

彼女は、あつさりと引いた。走つて御浜達の元へ向かう。

「よく話してんの? あの女と」

「そうでもないよ。彼女の行動範囲は限られてるからさ。偶然会つたり、御浜と一緒にいるときに一緒にいたり。そんなもんかな。話もしやすいしね」

「そうなんだ」

全然、知らなかつた。話をしてるつのは聞いてたけど。ティアスのメールにもあつたし。

「意外と、距離あるね、2人」

「何が?」

「だから、テツちゃんとティアちゃん。あの子、テツちゃんの顔みないし、沢田くん、なんて呼んで、よそよそしい感じ。基本、フランクな子なのにな、彼女」

「あつそう。オレ、そういうの苦手だな。いきなり馴れ馴れしいの」

「そりなんだ、ドミのくせに」

「それ、関係あんのか?」

「いや、気の強い女に虐げられてんのが好きなのかと……」

「あるか!?」

何でそつなる。愛里の「ひとは、別に虐げられてるわけじゃねえつて。

……似たようなものかも知れないけど。

どうしても溜息をいぼさるをえなかつた。それでもオレは、携帯をとりだし、オヤジに電話をかける。

「テツちゃん。人といふ時はだねえ……」

「イツ、細かいことに五月蠅いな。

「あ、オヤジ? 今日、何してんの?」

『何つて、今日は出勤だと言つたるうが。休みは29日……いやあれ? 何日からだつ?』

オヤジの電話の向こうからば、たくさんの男性が騒いでる声が聞こえる。その中から『30日です』と答える声がいくつか聞こえた。一体何が行われてるんだ、この職場は。

『何か用か? 用なら戻るが……』

「あ、いや。大したことじやないんだ。今日の夜は家にいるのかな、と思つて」

『そりが。悪い、連絡しようと思つてたんだが、忘れてた。ついさつき、東京出張が決まって、戻りは明日の朝だな、早くて。明朝、直帰して良いか?』

思わず返事してしまったが、電話の向こうの研究室の誰かに話しかけたらしい。遠くから『3時にミーティング入つます』の声がかかる。

『戻れたら、明日の朝に戻るよ

「忙しそうだな。相変わらず」

『それでもなじれ。年末だから、こんなモンだらつ。それより、ティアスは? お前、仲良いんだら?』

「は?」

思わず大声を上げたオレに、真が目を丸くして見つめていた。

『なんだ、この間、家に泊めてただろう』

「いや、それは、たままで……。事情は説明したじやねえか。関係ねえし。別に、そんな。つーか、何だよ、突然。何か関係あんのかよ！」

『何でそんなに喧嘩腰なんだ、お前は。いや、連絡とつてゐるなら、オレの携帯に連絡するように伝えておいてくれ』

……意味が判らん。何でオヤジに？

「テツちゃん、どうしたの？急に立ち止まって。電話すんのは良いから、とつあえず歩いてよ。変だよ、こんな所で」

真にせつ言われ、辺りを見渡したら、周りは家族連れやらカップルが仲良さそうに歩きながらフードコートに向かっていた。この中で立ち止まつてたら、さすがに変かも……。

何食わぬ顔して、オレは再び真の横を歩き始めた。

「何で？」

『……「音無が連絡をよこしてきた」そつ伝えればいい。賢木のヤツは、海外に出てつて、彼女に連絡することすら忘れてるみたいだから』

「音無……？つて、オヤジの友達の」

確か、プロのジャズピアニストだ。子供のころ、何度か会つたことがあるぞ。でも、オヤジの友達つて、（オヤジ含め）勝手な人が多い印象があるんだけど。

『そうだ。ふらふらしてて、ちつとも連絡がつかん。どうしようも

ない』

「オヤジだって忙しそうにしてるから、結構お互い様な気がするけど」

『音無にもそう言われたよ。じゃあ、頼んだから』

『ううと、電話を切つてしまつた。

「……って、近つ！？お前、人の電話聞いてんなよ！」

いつの間にか、横を普通に歩いていたはずの真が、オレの携帯の声を聞くよつに、頭を寄せていた。距離近いつつ、気持ち悪い。

「趣味悪いな
「ジャズピアニストの音無つて、音無悠佳ハルカ？あの、日本より海外の方で売れているといつ……」

つーか、日本ではほぼ無名に近いんだが。よく知つてるな、コイツ。

「いや、実際の活動は日本がメインで、ほとんど日本にいるらしさ」
けど。日本語しか喋れないらしいし。よく知つてるな、お前

「うん。紗良がそう言つ的好きだからさ」

「ふうん。実際は、子供みたいなおっさんだけだ。子供過ぎて、日本だといろいろ問題起こしてて、関係者に嫌われてて売れにくい、みたいなことをオヤジが言つてたけど、良くわからねえし」
「てか、テツちゃんのお父さん、そんな人と知り合いなわけ?すくない?」

……すごいのか?いや、聞いたことないから判らないし。何か、オヤジの知り合いつて言つだけで、素通りしてたな。ジャンルも違

うし。

「どうだろ。でも、家の母親の大学の後輩らしいし。……すごいんじゃない？」

「テツちゃんのお母さんで、音大出なんだ。だからあんなでかいピアノが」

「言つたじやねえか」

「いや、お嬢さんなら、嫁入り道具に買つてもうつてもおかしくないかと」

「何かお前、発言がおっさん臭い」

「酷！テツちゃんて鬼！ドMのくせに！」

だからそれ、関係ねえって。

「ふうん。沢田つてドMなんだ。そんな気はしてたけど。そんな話してんなら、わざわざと会流しろよ。オレ、疲れちやつたよ」

若干不愉快そうな顔をしながら、話に混ざってきたのは新島だった。いつの間にか、先を歩く御浜達に随分近付いていた。

「ティアスが、様子を伺いに来てたろ？」

「来てたけど」

「そん時に来ればいいのに。泉も、オレをあんな微妙な空気の中に放り込むな」

「口をどがらせながら、真を責めた。真もまた、ヘラヘラしながらそれに答えた。

「いや、だつて、判りきつてるじゃない。大丈夫だつて、相手は御

浜だから

「うーん……白神が、天然なのか、判つてゐるのか、判らんな。女の戦いは熾烈だよ。いや、戦つてゐるわけじゃねえか。柚乃ちゃんが怖くなつたり、オレを睨んだりするくらいか。ティアス自身を嫌つてゐるわけじゃねえみたいだけど、白神がなあ……」

やれやれ、といつた顔で頭を搔く。

「ティアスも判つてんだかどうだかって感じだけど

「あんなにあからさまなのに……」

思わず、真と2人で顔を見合させた。

「いや、気付いてるけど。どうなんだろうな。悪い気はしてないみたいだけど

そう言つて、何故か新島はオレの方を見た。

「オレに関係があるか?」

「関係してると思えば、そうなんじゃない?」

「うう……真も新島も、好き勝手言いやがつて。

「座るつよ」

大声でオレ達を手招きする御浜。思わず真もオレも苦笑いしてしまう。

「つるせえよ。恥ずかしいから大声出すんじゃねえ」
「せつさとこないから」

呼ばれたのに、オレは彼の元に駆けよることを躊躇つた。
真が動いたのに、オレは動けなかつた。
それは多分、彼のせいぢやない。
もちろん、彼の隣にいる彼女のせいでもない。
自分でも判らないけれど、どうしてこんなに、気にしてるんだろ
う。

「沢田つて、ホントに判つてないのか？」

「……何が？」

新島がオレの背中を軽く叩き、一緒に来るよつに促した。

「ティアスのこと、『状況判つてんだか』なんて言えるんかねえ？
「だから、何だ。言いたいことあるならまつつきり言えよ。つーか、
言いてえんだろ？」

だつて新島は、言いたくないことは口にせしない。

「オレは、お前らが気にするから、お前ら一人で出かけたり連絡と
つてることとか口にしないけど」

そう言つながら、彼は御浜を見た。
でも……お前らつて……。

「そんくらこには、お前のことティアスも見てる」

「聞きたいやうな、聞きたくないやうな」

「オレは、彼女の味方だよ」

彼のその潔さが、まっすぐさが、真正直さが、今のオレには辛か
つた。

01

『オレは、お前らが気にするから……』

確かにオレの前にいるこの男は、そう言った。
そんなにストレートにそんなこと言われても……しかもこの状況
で。もつと違う状況なら、判りやすくても良かつたかも知れないけれど。

「……えっと、オレ、用事思い出し……
逃げんなって」

新島は、がしつ、と音がしそうなほど、力強くオレの首根っこを
掴んだ。

「それはいくらなんだつてずるじだろ? オレ、そういうのどうかと
思うし」

「いや、どうかとつて言われても……。オレにはオレの事情がある
よ。お前はそう考えるかもしれないけど、同じような状況になつたら
……」

「逃げたつて、なにも解決しないつて。どつちかつと、状況は
どんどん自分の意志とは関係ない方へ向かう。一応言つておくよ、
経験上」

経験上、経験上つて……新島も真も、大人ぶつちやつて、むかつくな、おい。

そんなにオレの行為はお子さまか?

「意外とさ、沢田つて壁にぶつかつていったことないんだな。壁があつても、避けてきたっぽいんだ。そんな風に見えないからさ、意外だな」

「……待てよ。その言い方は……」

「あ、悪い。失言だつた」

「失言だつたの騒ぎじゃねえと思つたけど」

「だから、意外つつたじゃん。そんな風に見えないつて」「それが余分だつたの！」

だから、図星刺されてつから、さうに腹がたつんだつて！

つーか、図星つて判る自分も不愉快だ！

ちくしょう……オレ、絶対今、相当嫌な顔してる。

「灯路、なにしてんのよ？」

しかも、よりにもよつてこんな時に首を突っ込んでくるか？ティ
アスは。

「行くわよ？」

「お前、何でそんなに偉そうなんだよ」

文句を言つながらも、新島は嫌な顔をしてなかつた。

新島の背を押しながら、肩越しに彼女はオレの顔を見つめた。

『そんくら』には、お前のことティアスも見てる』

『うしたらいい？

ホントに新島の言つとおりなのか？！

だとしたら、……だとしたら、今までの彼女の行動に簡単に理由

が付けてしまつ。彼女からのメールも、あの日の行動も。今日のこの行為ですら。

どうしたらいい？

新島はそう言つけれど、彼女はそう思つてゐるかも知れないけど、彼女とあんなに楽しそうに話す、御浜はどうなる？

……よりもよつて、御浜は一人で座つてオレを待つていた。

周りの席にはカップルやら家族連れやらばかりで、連中の姿は見えなかつた。

「他の連中はどうしたんだよ？」

「何か、座つててつて言われて。テツのこと待つてるように言われたから。並んでるよ」

御浜の指さす先には、話しながら売店に並ぶ新島達の姿があつた。
……真と柚乃がいねえけど。

「座れば？ 今日、何か変だよ？ もしかして調子悪かつた？」
「寒いから疲れただけだ」

……なんでだ？ 今朝まで普通に話をしてたのに、なんで今は顔を見る」とすら出来ないんだ？

……に座ればいい？ なるべく視界に入らないようにしたいんだけど……。

仕方なく、円形のテーブルを囲む椅子から、御浜の向かいも隣も避け、一つ分椅子を挟んで座る。

「ふうん。テツって結構、判りやすいからさ」

「お前ほどじゃないぞ。大体、オレがこいつの苦手だつて、知つてるじやん、お前」

「オレもそんなに得意じゃないよ?」

「……企画したのお前だし……」

「いや、最初はグループで攻めた方がいいって、真が……」

入れ知恵してんじゃねえか、あの男は!いかにも御浜が考えたみたいに言いやがって。なに考えてんだ。

「真はオレの味方だけ?」

「だけ?」

?突然、何なんだ?思わず御浜の顔を見てしまったが、いつも通りだつた。

「だけど、テツの味方じやないんだよね、残念ながら。いや、普段はテツの味方でもあるんだけど。オレとテツなら、オレを選ぶんだな、これが」

「お前、結構す」ことを、さうと言つてんだ?……?」

力抜けるなあ、もう……。事実だけど、判つてるけど、判りきつてるけど。だからこそオレは新島に釘を差したんだし。

「あいつの好き嫌いがはつきりしてるのは充分判つてるって。だからいつたい何なんだよ」

「うん。オレも何なんだろうって思つてる」

「聞いたのはオレなんだけど」

「真がそつと言つた態度に出てるのだけは、判るんだよ。何でだと思つ?」

「何ででしょう……。

真つ正面から見るの、やめてもらえませんか。

御浜は、ホントは何でも知つてゐる。何もかもお見通し。

そう言つといふのがあるんだよ。

なのこ、どうしてその言つ問い合わせを、オレにしてくるかな？
お前、本題はどうじまで、『何もかも』知つてゐる？

「さあ、オレにはよく判らないけど。何か勘違いしてんじゃねえ？」

「勘違い？」

「誤解とか？」

余計なことを言つてしまつた気がする。

「誤解ね……何を誤解してんのか、オレにはよく判らないけど」

ほら。
御浜は、しつかり突つ込んでくる。オレの今の台詞は、完全に失言だ。

「そんなんに、一体何を氣にしてるの？ テツは」

「……別に、何も？」

「そり。気にしてるわけじゃないなら良いけど。テツは、自分が思つてゐるよつといろんなことを氣にしそうだし、空回りするから」

「……お前には、お見通しつて？」

「さあ、どうだろ。そう思つてゐるなら、そつなんじゃない？」

「何？」一人して

いつの間にか、真がオレと御浜の間に座つていた。

「何でもない」

「何でも無くないでしょ？ 釘でも刺された？ つーか、刺した？」

ストレートに、当たり前のように、でも茶化しながら、真はオレ

と御浜を交互に指さした。

「刺されではいないみたいだけど……刺したつもりだよ」

「お、怖いね、相変わらず」

真はその御浜の台詞に大喜びするが、オレは背筋が凍る思いだつた。

『つき合つてゐるわけじゃねえんだし。確かに、気まずいかもしけんけど。何をそんなに白神のこと怖がつてゐるかな?』

怖がつてないし、怖がる理由はない。ただ、気を使つてゐるだけ。オレは彼と同じ士俵に立ちたくない。ただそれだけ。彼のことなんか、どうだつて良い。

02

「柚乃はどうしたんだよ? あいつらと一緒にいられないみたいだけど?」

オレは話を変えるつもりで、売店に並ぶティアス達を指さしながら、真に聞いた。

「ああ? 電話鳴つてたから。どこかにいるんじゃない? すぐ戻つてくれでしょ?」

「ああ、そう」

目的を果たし、ほつとした途端、オレの携帯が鳴り響く。相手は……愛里だった。どうして?

「……テツちゃん、どこ行くの?」

眞の声を無視して、オレは彼らから距離をとつ、電話に出た。

「どうしたんだよ」

『『テツ、今どこにいるの? 港にすぐ来れる?』』

「……港? 港のどこだよ?」

『『観覧車のあるところ。今日、花火やるのよ。でも、迎えに来て』』

「……迎えにきて……意味わからねえし」

『『良いから来てよ。すぐね』』

電話切りやがった。あのわがまま女。迎えにつけ……お前を送り迎えしてる連中見たく、オレには足がないだろうが。高校生だぞ? ! 判つてんのか?

「テツちゃん、何? またお父さん? それとも愛里ちゃん?」

眞のその台詞に、一瞬、御浜がオレを見たが、すぐにいつも通りの表情に戻った。

「……愛里」

オヤジだとつたら、せつと御浜は嫌な顔をする。その理由はよく判らないけれど。愛里だとつても、あまりいい顔はしないけど。

「オレ、帰るわ」

「つーか、なに言つてんの、テツちゃん! ちよ……御浜も何とか言つてよ」

「え? うーんと、寒いから氣をつけて

「何それ！？意味判らないし！…」

「うう言ひやツツだつて、御浜は。
重荷にも、抑制力にも、推進力にもならないし、なんうとはしない。」

しないけれど、釘はきちんと刺すし、何かあつたら隣にいる。
オレにとつて、必要な存在だつて、痛いほど判つてゐる。こうこう
何氣ない時にこそ、それを痛感する。
だからこそ、オレが彼の邪魔にはなりたくない。

『何をそんなに白神のこと怖がつてゐるかな？』

だけど何で？何で、あの新島の言葉が、頭を離れない？

「沢田くん、どこに行くの？」

新島と一緒に売店の列に並んでいたはずのティアスが、オレを追
いかけてきた。

「……なんだよ」

「なんだよ、じゃないわよ。…………どこに行くのかと思つて」

少しだけはにかんだように、オレの機嫌を伺つうな聞き方をする。

その彼女の様子に、再び新島の言葉を思い出す。
そうだと思えば思つほど、どうして良いか判らない。

「別に……用があるから、帰るだけ」

「そう。寂しいね」

「え？」

直球！直球過ぎるよ。しかもちよつと可愛こし。ナツリヒトリ、
するじよな。

ちくしょ、悪い氣はしないし。
オレは別に、御浜のこと以外は気にしてないけど……でも、嫌い
じやない。多分、それだけ。

「冗談よ」

「あ、セ。そういつこと言わなくともいいんじゃねえか？」

「お互い様。私、こんなに酷くないけどな」

「酷い？お前、本人を田の前にして酷いつてなあ……。つーか、何
でお前の話になるんだ」

「だつてトージが、君と私が似てる、なんてこと言つんだもん。失
礼よね。私、こんなにぶしつなじやないし、偉そうじやないし、口
も悪くないし」

「やつくつそのまま返してやるよ」

……あれ？ ことは、やつぱ似てるのか？

「強がつてゐくせに、弱つちことじもやつくつ、なんて言つてた
「オレは違つたゞ、お前はそうかもね」

彼女のメールも、電話も、回数を重ねねば重ねるほど、それを感
じていた。

言葉が足らない彼女の心が、少しずつオレにも見えてくる。
そんな感覚を覚えていた。

だから、何度もやめようと思つてた。

これ以上、深みにはまる前こ、やめたかった。

彼女の歌を聴いて以来。

彼女がオレの家に泊まって以来。

彼女と一緒に出かけて以来。

彼女と連絡を取るようになつて以来。

ずっと、思つてた。

思つてたのに、やめられなかつた。

いつの、なんて言つんだっけ？

「冗談でしょ？ それは、君だよ？ 自覚してる？」

「失礼だよ、お前。オレは弱つちくなんかないって」

「弱いつて言つのは語弊があるかも知れないけど……なんて言つか、何か、常に怖がつて言つつか」

「怖がつてる？ 誰が、何を？」

「判なんいけど…… そう見えるよ。何か、自分みたいで、判るんだ」

メールでも電話でも、そんなことは言わなかつたくせに。

「つるせえよ、お前。オレは急いでんだ。もつ行く」

「うう。寒いし、人も多いから…… 気をつけてね」

そう言つてくれたティアスの顔を、オレは見ることが出来なかつた。

どうして彼女はそうなんだろう。

まるで御浜のようなことをさらつと言つ。

なのに、まるで愛里のよう振る舞つときもある。

でも、何より、彼女はオレに似ている。

だからだ。だからこんなに、彼女のことが引っかかるんだ。

オレは別に、それ以上の意味で気にしてゐるわけじゃない。

御浜も怖くない、彼女のことも気にしてない。あれは新島の勘違いだ。

だつてオレは、こんなに急いで愛里の元へ向かおつとつてゐる。まだオレは、悲しいくらい、オレに振り向かないあの女を思つてゐる。

03

愛里に言われるまま、港にある遊園地に来たのが良いが、入れず、入口で彼女を待つ羽目になつた。

ここに来るまでに、結構時間がかかつてしまつたせいか、空はすっかりオレンジがかつてゐた。

「あ、テツ！遅い！！もつ、何で入つてこないのよ？」

「知らねえよ。何か、花火やるから入場整理券がいるとか言われて……だれ？」

オレに駆け寄る愛里の後ろから、1人の男が追いかけてくる。何か、愛里の好きそうな顔ですけど?何か、てかてかの黒いジャケツを着てますけど?

「ああ、気にしないで」

彼を見もしないで、そつ言い放つと、オレに体を預けながら、オレの右手を両手でがつちつと組んだ。

「じゃあね、この人と約束あるから。ばいばい」

追いかけてきた髪のセットに一時間くらいかけてそつた男に手を振りながら、彼女はますますオレにすり寄つてくる。
あんまり接近されると……ちょっとどうぞさせじますナビ。
愛里からは、甘い匂いと一緒に……

「……酒くせえよー愛里ーーー！」

「良いじやない。良いから、行きましょ？」

腕を組んだまま、オレを駅の方へ誘導する。

「オレ來たばかりだし、あの人は……」

「待てよ、愛里！なんだよその男はーまだガキじやねえか、どう見たつて」

……不愉快な、老け顔つて言われるのもそれはそれで不愉快だけ
ど、ガキつて言つのもどつかと思つぞ。何だ、この敵意むき出しの
男はーー！

「彼氏」

そういうながら、彼女はオレの頬にすり寄つてきた。顔と頭が火
照つて、判断力が鈍る……。

「何だよ。じゃあ、オレはなんだつたんだよ
「別に？誘われたからつき合つただけ。クリスマスだもの、夜は彼
と過ごすの、ね？」

甘い言葉と甘い表情。思わずその気になつてしまつとこりだつた
が、彼女の脅すような目つきに、少しだけ正気を取り戻した自分。

よ……要するにだ。つき合つてこんな所に来てみたモノの、愛里はこの男が単純に気に入らなかつたんだ。でも、それだけならさつきみたいにはつきりと「言えればいいだけの問題な気がするけど……」。

「ふざけんな！男がいるなんて、一言も言つてなかつたじゃねえか！」

掴みかかろうとした、てかてがジャケット男の手を逃れ、愛里はさつとオレの後ろに隠れた。代わりにオレは胸ぐらを捕まる。

「……暴力反対……」

疲れる男だな……。どうしてよりもよつて、こういうダメな男を引っかけるんだよ。オヤジだけ追つかけてるつーの。（それはそれでいやだけど）

何か、もう、どうして良いかわからんねえなあ。胃が痛くなつてきた。

「このガキ！てめえの女に、オレがいくら使つたか判つてんのか？」
「うわー、最低ね。あんた、別れ際に女に慰謝料と使つたお金を請求するタイプでしょ？」

まあ、確かに最低だが、オレの後ろでそれを言つなよ。

「しかも、思い通りにならないと暴力で相手を屈服させよつとするタイプ。どうしようもないわね」

お前……途中でそれに気が付いて、オレを呼びつけたな？つーか、この状況で煽るな、そう言うバカな男を。

「どな、 いのクソがわー。女の女に思ひ知りせりや……」

あ。思わず、脣にローキック食らひせりやった。声を詰まらせて蹲つていた。

「じ……地味に卑怯なコトしやがつて……」

「……別に卑怯じやないつて」

「 もう、 そう言つときは『オレの女に手を出すんじやねえー』とか 声高に宣言するものでしょ？ ホント、 根が暗いわね、 あんたは。 行くわよ？」

「助けてもうつといて、 根が暗いとか言つが、 お前はー？」

オレの反論を無視して、 腕を組んだまま彼女は走り出す。途中、 ヒールで走ることになった彼女を庇うよう、 彼女を支え、 抱きかかえながら走る。少しだけ……いや、 少しどころじやなく、 意識もしてゐるし、 ト心もあつた。

だつて、 何かこう言つのつて…… いの後、 恋とか生まれるつまへ なし崩し的に、 つまく行かないか？ オレと愛里で。

「あー、 久しごとに走つたわ。 どうしようもないわね、 あの男」

公園のベンチに2人で座つた途端、 彼女は深呼吸と共に悪態をついた。

しかも、 足をぶらぶらさせながら、 オレに何かを要求する。

「 テツ、 靴を脱がせて。 痛いのよ」

おこおこ…… それは何だか口くて良いけど、 どうなんだ。 でも、 言つとおりにしてしまつ自分が悲しい。 だつてこんなもの

す」こ、下から瞼めるよつた角度で見上げられるなんて。

「はやべ」

オレは黙つて頷くしかない。彼女の足下に跪いて、両手で靴を脱がせる。

ちらりと、彼女を見上げる。スカートから見える足もぎりぎりだし、けだるそうな彼女の表情が、オレの心をさらに嗚咽らせる。

「ついでだから、足を揉んでよ。あの男、人をこんな所に連れだして、この格好で歩かせるんだもん。バカじやないの？足、痛くなつちやつたじやないの」

その男についてつたのはお前だろ？何でこいつ、軽いつづーか、何というか。

でも、素直に揉んでしまう。オレ、マジっ気あるんかな？ホントに。

「ついて行かなきやいいじやん。バカだつて判つてんなら

「あら、スペックは良いのよ？ああ見えても

「……ださいし。何、あのてかてかジャケット」

「そうなのよね。今日会つてみたら、あれだつたのよね。この間はもうちょっとマシだつたんだけど。あれでも、N大の理学部、お父さんが建築会社を経営してるの」

「それ、今は金持つてるかも知れないけど、親の後は継げねえしてか、オヤジの大学だし！」

「鉄城の大学とか、そんのは関係ないでしょ？まあ、確かにあの大学に行つたときに会つたんだけど」

やつぱり。

ホントに、オヤジも、愛里もウソがうまこんだ。それやつて、2人でこそこそ会つたりしてるんだ。

でも、ホントの所、どうなんだい。

「どうしたの？ テツ？ 暗い顔して」

「いや……」

「やう言えば、テツって、こんな口ひよく迎えに来れたわよね。世の中こんなに浮かれてる口はないわよ~せつかく自由な身分なんだから、今のうちに楽しんでおかなくちゃ損よ?」

「自由な身分?」

「働いてちゃ、こんな平日の方方に、遊びになんて行けないわよ。いくらイブだからって」

ああ、やう。それで学生の男を相手にしてたつてことか?

「別に。暇だつたから」

「そう。よかつた。でも、もつたひないわね、ホントに彼女もいなあんだ。いい男に育つてきたのに」

彼女はオレの頬を撫でる。その手の冷たさに、やつぱりオレは誤解しそうになる。いや、もう、とつてて誤解してるのかも知れない。どうしてオレが呼ばれたんだろう。どうしてオレは、こんな所で、彼女に跪いているのか?

彼女は、オレのこと、少しでも思つてくれてるから?

誤解するだけの条件が揃つて。期待し過ぎちゃダメだと判つてるので、オレはどうしても期待してしまつ。自分の弱さに負けそうになる。

「あのや、愛里」

「あ、……鉄城！」

彼女は笑顔で顔を上げ、ヒールも履かず、痛いと言っていた足で立ち上がり、公園を素足で走った。その先には、オヤジがいた。コートに身を包み、明らかに彼女を捜していたといった顔で、公園の中に入つてくる。

「何でテツが？……テツ？」

オヤジの声を最後まで聞くことなく、オレは走っていた。逃げるつもりなんか無かつたのに、必要もないのに、ただ走つてた。

04

最低だ。オレってヤツは、何でまたしてもこんな所にいるのか。つーか、彷徨つていいのか！！

気付いたら、地元の地下鉄の駅前を、またしても、……またしても、うろついていた。無駄にコンビニに入つて雑誌を読んだりしながら、空が暗くなつていいくのを眺めていた。いいかげん、する事もなくコンビニを出る。この間彷徨つていたことのことを思えば、制服じゃないだけマジだろ。う。

しかし……オレってヤツは、どうしようもないな。何かいやなことがある度に、こうやって行くあてもなく、しかも自宅の近所をふらふらと彷徨うのか？いくら家に帰りたくないとはいえ。人と話をしたくないとはいえ。

もう、寂しいんだか、苦しいんだか、よく判らなくなつてきた。ただ、心が重い。

「沢田くん、1人?」

オレは、何故か、彼女が歌っていた、このクラブの前に来ていた。彼女がいると知っていたわけでもないし、来るつもりもなかったのに。

「何してるんだよ。出かけてただろうが、お前は」

「夜は用があるから帰るつて言つたでしょ? 沢田くんここで、途中でいきなり帰つたくせに、どうしたのよ? 御浜が心配してたよ?」

「この間の夜と同じように、ステージ用の衣装に身を包み、濃い化粧をしたティアスが、クラブの入口でオレに声をかけた。用つて言うのは、ここで歌う」とらしい。

「だーかーらー! あいつはオレの保護者かつつのー! あいつの方が、よっぽど危ういくせに。お前、今日は1人なの? こないだはいただろ? 佐伯佳奈子」

新島と彼女の話は、ティアスからも電話で聞いていた。ちゃんと会つて、しかも2人きりで話すのは久しぶりだけど、彼女との間に壁は感じなかつた。

「うん。今日もいるけど、中で準備してる。そういうんや時間ある?」

「え? まあ、夜は」

むしろ暇ですが。帰りたくないし。

「だったら、おいでよ。灯路もいるし」

「え、いや、まあ……」

彼女はオレの手を取り、引つ張つた。乾燥した彼女の手は、思つてた以上に気持ちよかつた。御浜の顔を思い出さなかつたわけじゃないけれど、黙つて彼女の手を握り返し、後ろについて扉をくぐつた。

愛里に逆撫でられた心を、少しだけ撫でられたよつた、そんな感じだつた。

多分、誰でもよかつたのかも知れない。彼女が作った穴を埋めてくれるなら。

「終わつたら、灯路と一緒に待つてね。部屋においでよ」

「うん。……て！？」

笑顔で言つた彼女に、思わず笑顔で返してしまつたが。何げにとんでもない発言してませんか、大胆だな。

「もちろん、部屋にはみんなで、ですよ？ちょっと期待するよつたこと言つたからつて、エライ態度が豹変してますな？」

後ろから、新島がわざとらしく肩を叩く。彼は一人で壁際に立つていた。

「豹変なんかしとらん」

「そう？にせかぢやつて、変質者っぽかつたけど？満更でもないんじゃん、やつぱ」

「無いつて、オレには……」

愛里が……いるつて言つのは語弊があるな。大体、あの女、オレのことを振り回したあげく、足まで揉ませといつて、よりもよつて、

オヤジと約束してたつついのが……へむ。

たまたまだよ。たまたま、オレの田の前に現れたのがティアスだつた。それだけ。どうしてここに来てしまったのかは、オレにも判らないけれど。

「何だよ、にやけたり、暗くなったり、忙しいヤツだな。どこ行つてたか知らないけど、ティアスもああ言つてゐから、待つててやれよ？」

「2人きりでもないくせに。大体、みんなつて、誰よ」

「だから、オレと、ティアスと、彼女

「カモフラージュ要員か、オレは！」

「（）明答。よくできました」

彼は悪びれない笑顔を見せる。要するに、新島と、その彼女である女優、佐伯佳奈子が一緒にいるのを誤魔化すための、賑やかし、というわけだ。確かに、年齢だけなら親子くらい離れてるし、彼女はいろいろめんどくさそうな芸能人だし、氣を使つてるんだろうけど。

「何だよ、そのつもりかよ。自分のために人を振り回すんじゃねえよ」

そんなのは、愛里だけでたくさんだ。

「それをどう捉えるかは、お前しだいなんじゃね？無理強いはしないけど」

「結局、どうなんだよ」

「何が？」

「何がって、お前が」

ティアスが、オレに氣があるようなことを言つたくせに。

「どうだろ。言つたのはオレだけ、ティアスはお前に何も言つてないし。気にしてるんなら確かめてみれば？そんな人生に疲れた顔してないで」

「疲れてないつつの」

「途中でさつさと帰つたお前を気にしてたのは確かだよ？着信履歴、残つてない？」

そう言われて、オレは港を出て以来初めて、携帯を手に取つた。鳴つてるのは知つてたけど、見たくもなかつた。

新島の言つたとおり、ティアスから着信があつた。18時3分。このくらいの時間だと、もう御浜達とは別れて、この店で準備を始めていることだろう。携帯に残る彼女の名前を見ただけで、心が随分軽くなつてているのを感じた。

「意外と判りやすいのな、沢田つて。顔赤いし」

「うるせえな。赤くねえって！」

「いいけど

彼は特に氣を悪くしたような顔もせず、笑顔を浮かべていた。真と違つて、新島は普段、常に笑顔を浮かべてるようなタイプじゃないから、ホントに機嫌がいいのか、この程度のこととは気にならない程度に寛大なのか。

あとは、御浜から1件、オヤジから2件。多分、オレが港から地下鉄にくるくらいの時間だつた。

御浜は判る。ああいうとき、彼は心配している。その態度を見せるときと見せないとき、きちんと使い分けるのが、彼の優しさであり気遣いだ。十分承知してゐる。でも、こうしてティアスの傍にいることになつた今は、ちょっとだけ後ろめたい。

オヤジは……。

「沢田、始まるぞ？ 今日はこの一曲だけだから」

「……ああ」

オレは相当暗い顔をしていたのだろう。新島はあえてそれを避けるように、ぎこちない笑顔でステージを指差した。その動きとともに、ホール全体の照明が落ちた。

ステージには、ピアノを浴びるティアス。その後ろにはスポットを避けるようにピアノを弾く佐伯佳奈子。この間のようなバンド形式ではなかつたせいか、佐伯佳奈子は余計に目立つていた。しかも、間の悪いことに、このクラブという場に似合わないスローテンポのクラシック。まだ、以前のようなロックなら良かつたかもしれない。

ティアスか、佐伯佳奈子か、どちらの意図かはわからないけれど、勝負したかったのかもしれないけれど、選曲も相まって、ホールではティアスの後ろで弾く「女優」の話題で持ちきりだつた。

聞こえてくる、心無い声を新島がどんな思いで聴いていたかは判らなかつたけれど、彼が不愉快そうな顔をしているのが暗闇の中でも確認できた。でもオレは、逆に安心して、ティアスの歌を聴くことが出来た。

彼女の歌は十分すぎるほど、オレを惹きつけていた。それを、はつきりと自覚する。一瞬だけど、愛里のことを忘れられる程度には力を持つていた。だけど、この状況で歌うのは、彼女が可哀想にも思えた。

オレだけが、彼女を見て、彼女の歌を聴いてるような錯覚すら覚えたから。

「ありがとうございました」

ざわめきのなか、一人は袖に引っ込んだ。

「沢田、出ようか。外で待ち合わせてるからさ」

「そうだな」

不愉快そうな顔で、彼はそういうと、オレの顔を見ることなく、外へ向かつた。

「カナさんはティアスを推して行きたいんだよ。少しずつバックを減らして、彼女が目立つように、彼女が好きなように出来るよ！」

なのに」

オレに話しかけたのか、それとも独り言なのか。判断に困るほど小さな声で、彼は呟いた。オレは妙に安心して歌を聞いてしまって、いたけれど、彼女だけを見てしまっていたけれど、それは、彼や彼の大好きな女の意図とは、ずいぶん離れたところにあったようだ。

「カナさんが……」

普段の新島からは想像できないような、そんな真剣な面持ちで、彼は呟く。少しだけ、その様が切なかつた。

オレはこんな風に、誰かのために思えるんだろうか。悲しめるんだろうか。

例えば、愛里のために。

「おいでよ」と彼女が言うので、卑怯だと思いながら黙つたまま、

彼女の後についていった。そこで、オレは初めて佐伯佳奈子と話をした。

雑誌やテレビでしか知らない人間と話をするのは、何だかくすぐつた氣分だった。御浜ぐらいにはこのことを話してやろうと思つたけど、ティアスのことを話すのが面倒で、やめようなんて考えながら、彼女の話を聞いていた。

帰りのタクシーの運転手に、オレ達のことを「教え子達なの」なんて、当たり障りのない話をしている彼女を、新島が複雑な表情で黙つて見ているのを田の辺当たりにしてしまった。

『理由考えるより、これがひじょうかなつて考える方が楽しくない?』

『……新島つて、そりやつて彼女とつき合つたんだ』

『そりやつて、つき合つてゐるんだよ』

「この状況で、こんな扱われ方で、どうじょうつかな?なんて考えられるんだろうか。

重いな……。

重く、しかし当たり障りのない会話をしながら、10分ほどでタクシーは止まつた。オレが思つていたより、ずっと彼女たちの家は近かつた。駅から近いのに喧噪からは離れていて、N市内でもいくつかある、高級住宅街に分類される場所だった。すぐ傍にある女子大も有名なお嬢様学校だ。（どんな女が通つてるかなんて知らないけど）

「……誰のつひ、金があるつて?」

オートロックキーを開け、ホテルのロビーと見まじうばかりのHントラスを抜けたとき、思わずそう、新島に文句を付けてしまつ

た。

「だつて、ここはカナさんの買ったマンションだし。でも、さすがにグランデピアノは置いてないぞ？」

だつて、このやたら広い共有スペースは一体なんだ？ 部屋はどんだけ広いんだよ。

「それは、別宅だからだろうが」

ヒトのことをお坊ちゃんだの何だの言つたくせに。オレんちなんか、大したこと無いじゃないか。

普段、ティアスはこんな所に1人でいるつてこと？ 彼女は、オレんちに来てどう思つたんだろ？ 思わず、佐伯さんと2人で先に歩いていくティアスを、オレは睨み付けるように見つめていた。

「ティアスんちは、フツーだよ。どつちがつうと。親いないから遺産と義兄ちゃんの稼ぎだけで食つてるし。あそこんちの義兄ちゃんは、生活に困らない以上に何とかしようとするヒトじゃないし」

「……いや、別に……」

「顔に書いてあるぞ？ 別に、自分で稼いでるわけじゃないんだから、そんなこと気にしてどうするんだよ。お前んち、充分だつて」

「だから、気にしてねえつて」

小声で言い訳して、彼女たちを追いかける。彼女には聞かれたくなかつた。やたら広いエレベーターで4人、沈黙が流れる。

そう言えば、愛里の家もマンションだけど、でかいんだよな。まあ、でもそれは、母さんの実家だから、気にはしてなかつたんだけど。オヤジと一緒に挨拶に行くと、やたら『困つてない？』なんて聞かれるんだよな。

子供のこりのことは覚えてないけど、もしかしたら、昔の方が酷かつたのかも知れない。オヤジがこんなに出世する前の話なわけだから。伯母さんこしたら、単純に甥や姪が心配なだけなんだらうけど。

愛里の言葉が、彼女の考え方が、オレの中に染み付いて、オレを振り回しているのを自覚させられる。自覚してると、判つてるのに、振り回され続ける自分が滑稽で笑つてしまつ。それでもやめられないんだから、オレは相当重症だ。

「あ、そういうえば、何も買ってなかつた」

カードキーを差し込みながらティアスが思い出したように佐伯さんに声をかける。

「何もつて？」

「お茶すら出せないけど」

「先々週來た時も、そんなこと言つてなかつた？ちゃんと暮らしてる？？」

「……一応。ご飯は食べてます」

どうやつて食べてんだか。生活力皆無だな。珈琲一杯満足にいられなかつたし。

「灯路、ティアちゃんのこと、もう少しあつとかまつてあげてよ」「えー。これ以上かよ。ただでさえ、保護者かよ、つて言われてんのに」

そう言いながら、オレの腕を引つ張り、佐伯さんこオレのことを指し示す。隣のティアスが、少しだけ不愉快そうな顔をした。

「大体こいつ、不器用すぎるんだって」

「そこまで酷くないわよ。今日はたまたま！ちょっと買い物に行かなかつたら、朝、食べるものが無かつただけだもん」

「バイトしてるわけでもないのに、行かなかつたつて状況があるか！」

「もう、煩いわね。そんなこと、ここで言わないでよ！いいから、なにか買つてくるから、先に入つてて」

むつとした顔でエレベーターに戻ろうとするティアスを、新島が引き止める。

「いいって。もう遅いから、オレが行く。カナさん達と待つてろ」

「灯路！」

「ティアちゃん、いいから入りましょ。沢田くんも、つき合わせちやつて悪いわね。お家はいいの？」

何と言つが、生活感の無い人だつた。笑顔が作り物みたいに綺麗で、少しだけ戸惑つた。一人に言われ、部屋に入る。

「いえ、もともと、今夜はうちに帰る予定ではなかつたので。大丈夫です」

「そうなの？」

あ、急に「同級生のお母さん」みたいな顔しやがつたな。

「……実は、今夜は父の客が来るので、せつかくなので気を使つて、友人宅に泊まりに行くと言つて出てきてたのですが、その友人と連絡が取れなくなつてしまつたところに、彼女たちに声をかけられたのですから」

「そう」

『ついでに、東京出張が決まって、戻りは明日の朝だな、早くて。明朝、直帰して良いか?』

そう言つてたはずのオヤジが、愛里を迎えて現れた。

『彼』は東京に行かず、地元にいる。彼女も。

『彼』と彼女が一緒にいるにしろ、彼は家に戻つてくるだろ?。

「……すぐに、連絡が取れると思いますから。うち、放任主義なんですよ。父子家庭ですし、父は今、大学が忙しいみたいで。それより、新島の方方が大変じゃないですか?」

彼女は、黙つて微笑むだけだった。

持ち主同様、まるで雑誌に載つてゐるような生活感のない、30畳くらゐはありそうなリビングに通され、ソファに腰かけた。

「ティアちゃん、もう1ヶ月くらゐこの部屋にいるわよね。ずいぶん綺麗にしてるじゃない」

「使ってないから」

佐伯さんに答えながら、ティアスはオレと一人分の間を空けて、同じソファに座つた。

微妙な距離感に、彼女の方を向くことが出来なかつた。

「どうして?」

「だって、寝室だけで十分じゃない。あと、キッチン」「キッチンも、あんまり使つてる感じがしないけど」「そこは突つ込まないでよ」

チラシと、彼女が隣に座るオレを見たのが判つた。
もしかして、オレに対してかつこつけてること?『眞に』して
つてこと?

「お前に生活感がないのは知つてゐるよ」

「失礼ね。ちゃんと暮らしてゐるわよ」

「リビングとか使ってないの?」

「だつて、広すぎて落ち着かないじゃない。ピアノを弾くへりこよ」

彼女の台詞に、思わず顔が綻ぶ。指差した先に、アップライイトピアノがあつた。彼女がグランドピアノの話をした理由も判つた気がした。茶化してゐるわけではなく、『眞に』やましかつたんだ。

「飲み物も食べ物もあるじゃない。ほら。沢田くん、エリカへ。」

佐伯さんは、これまたやたら広いアイランドキッチンに入り、業務用並にでかい冷蔵庫を開け、缶ビールを出した。指さした先には、乾きモノが並ぶ。

「あのねえ。私も沢田くんも未成年なの。大体、私は飲めないし。カナは、ここに来るたびにそんなモノばつかり買つてきて」

「あ、オレはいただきます」

「こんな日は、飲まなきややつとれん。立ち上がり、キッチンへ向かい、佐伯さんからビールを受け取る。

ティアスのこの態度に、浮かれてる自分がいるのも自覚している。だつて、最初の印象が悪かつたから『眞付かない振りをしてたけど、やっぱり彼女は好みのタイプだし(愛里と似てる、と思つ程度には)メールも電話も、苦になるほどに『眞に』か樂しこし。

もしかしながら、オレはこの女のことが、けつこつ好きなのかも

知らない。

でも、そう思つと、余計に辛くなる。彼女のことを、御浜が好きだし、オレはどうしても、あの酷い女を心の中から捨てることが出来ないし、ティアスをその代わりにしているような気がしてならない。

ティアスとのやりとりで、自尊心を守つているよつな。でもそれは、ティアスにも、御浜にも失礼な気がするし。

「ねえティアちゃん。沢田くんつて、いつもこんな感じ?」「え?」

佐伯さんの思わぬ言葉に、思わずティアスと返事がかぶつてしまつた。

「……ちがうよ」

「そりよねえ。聞いてた話と違つ感じ」

缶ビール片手にオレに人の悪そうな笑顔を見せた。

しかし、かなりいい年のはずなんだが、感じさせんなん……。中学生の娘がいるはずなんだが。思わず誤解しそうなくらい、表情が工口イし。

「ねえ、そこにピアノがあるから、何か弾いてよ? ティアちゃんから聞いてるの。弾けるんでしょ?」

「……いま?」

佐伯佳奈子の前で?!

『冗談だろ？！また、指が動かなかつたらどうするんだよ…』

……とはさすがに言えない。

仮に、佐伯佳奈子だけだつたら、プロ相手だし、なんか遠い人なわけだし、『悩み相談』みたいな感じで、逆に楽だつたかも知れない。『こんなことつてあるんですか？』みたいな感じで……。

しかし彼女はプロであつて、別にカウンセラーというわけではないから、困るかもしないけど。

いや、それ以前に、時々弾けなくなる」ととか、ティアスに知られたくないし。そもそも、彼女の前では弾けなかつたことがないから、彼女はそのことすら知らないし。知つたとしたら……なんていうだろう。心配してくれるだろうか。いや、彼女はそれを御浜に話すかもしれないし。

絶対言えないし……。でも、弾けなかつたらどうするんだよ。そもそも、オレはこんなプロの前で弾ける様な腕じゃないし！

「別に採点しようつてわけじゃないの。だからそんなに難くならないで。ティアちゃんが、君のピアノが好きだつて言うから、聴いてみたかったのよ」

「カナ！』

少しだけ照れた表情で、彼女は叫ぶ。オレのこと、そんな風に話してゐるんだな、って思うとなんだかとても嬉しかった。

「ホントに、何でそんなに自信なぞ氣なの？話してみたときほんとそんな風には見えなかつたのに」

「……カナ。もう、人の話を聞いてよ…」

わりと、似たもの同士?」の一人。マイペースだな。

「もう、夜中だから……やめと?」、ね? カナ? ?

「大丈夫でしょ? ちゃんと防音設備のあるとこ選んでるんだから。私が何で食つてると思つてんの? 商売道具よ?」

「男と会つための隠れ家の癖に……」

「いいじゃない。たまには役に立つんだから。ね?」

ね? って、オレに同意を求められても困りますが。さすが別宅、そして儲けてるだけはある。

「適当に買つてきたけど……? お前ら、何やつてんの?」

ピアノを眺めながら微妙な空氣の中にいたオレたちに突つ込んだのは外に出ていた新島だった。正直、助かつた……のか?

「カナ、座つたら?」

「そうね。そうするわ」

エロく、人の悪い笑みを彼女は浮かべる。何か言いたそうに彼女を下から上まで舐めるように見つめた。

「なんか、そういうとこも可愛いわ、ティアちゃん」

「何でカナさん、そんなにティアスのこと好きかなあ?」

リビングのローテーブルの上に、コンビニの袋を広げ、並べながら彼は彼女に突つ込む。よく見たら、佐伯さんとオレが飲んでいるビールと同じものを、彼は買つてきていた。

「だつて、かわいいじゃない」

「度が過ぎるんだよ」

そして、ティアスにはミネラルウォーターを買つてきていた。恐らく、いつもこいつしてゐるんだろう。彼らの中の、妙な連帯感のようなモノを感じて、オレは少しだけ退いてしまつた。

それを判つてゐのかどうか、ティアスが一歩だけ、オレに近付いた。ソファに並んで座るオレ達を、新島がちらつと眺めたのが、妙に恥ずかしかつた。

「ティアちゃんの後ろで、沢田くんがピアノを弾いたら、絵になると思わない？ 2人とも綺麗で」

ビール片手の酔つぱらいのくせに、いや、それだからこそ、佐伯さんはゆつくりと新島の後ろに歩み寄り、座り込んでいる彼の背中を、屈んで撫でた。触れるかどうかと言つていうのせりげなさだつたけど。

「沢田と？ まあ、コイツ、顔だけは良いからな」

「そんなこと無いわよ。ティアちゃんが誉めるんだもの。聞いてみたら、良いかも」

もしかして、やう言つつもりで、オレにピアノを弾かせようとしてたのかな、この人。

「……誉めてたつけ？」
「誉めてません」

意地悪くティアスに聞いてみたけど、案の定、彼女は照れた表情をしてそっぽを向いてしまつた。その様子が妙に可愛い。

彼女は、オレには誉め言葉を聞かせてない。ただし、否定もないのも、いまは判つてる。彼女はあの時、まるでオレの心を見透かしたよつこ『楽しくしてあげる』と言つただけなのだから。

「見栄えは、合格点。あの、年齢相応の汚れてない色気が良いじゃない？」

「わからん。……それって、顔が老けててエロイつてこと？」

「もう、そういうとこ、子供よね。とつあえず、見栄え上、ティアちゃんと並んでたら、かなり目を惹くと思わない？つて言つてんのよ」

そう言つ話は、本人の目の前でしない方がいいと思うけど。気にしてないな？

「ステージではね、ティアちゃんの綺麗さを出ししたいわけよ。普段はこんなに可愛いのに、がらりと変わるとこが魅力よね」

隣で、ティアスが照れて俯いていた。しかし、佐伯さんつて、ホントにティアスのこと好きだな。でも、ステージ上の彼女は、確かに綺麗だけだ。

嫌いじゃない。

「でも、それなら白神の方が似合つてるかもね。ステージに2人で並んでたら、作り物みたいで、綺麗つて言葉にはぴつたりだ。沢田は……」

「言いたいことがあるなら、はつきり言え、はつきりと。でも、まあ、その意見にはおおむね賛成だけだ」

「誰？友達？」

また、彼女は新島を撫でる。今度は、右の耳を左手で。そしてや

つぱり、触れるかどつかの距離で。髪を弄ぶよつな手つきで、彼から手を離していく。口口aina、しかし。隣にティアスが座つてるとと相まって、見てる「」たちが、妙な気分になつてくる。新島は何食わぬ顔してゐるけど。

それにしても、ティアスは、オレのことは佐伯さんに話してたくせに、御浜のことは話してないつてこと？

「御浜のことよ。沢田くんのお隣さん。ほら、この人」

……へえ。御浜に関しては、写メとかあるんですか。へえ……。しかも、話したことがあるっぽい口振りだし。余計な期待したじゃねえか。

ティアスは佐伯さんの元に移動し、自分の携帯を見せた。

「……息を飲むくらい綺麗な子ね。中身も外見も。今どきこんな子いるのね。モデルか何か？」

「いや、王子様系一般人」

「なに、その分類？」

新島の適当発言について、佐伯さんがオレに聞いた。

「いや、まあ。間違つてないと思います。近所のおばさまがたにも、見かけ込みで『息子にしたいくらい良い子』と大人気なので」

「御浜は、良い子だと思うよ？」

「そう？ ティアちゃんまでそう言つなら、そつかもね。でも、確かに、お似合ひつて感じ。ティアちゃんもこの子も、汚れてない感じがして」

ええと。オレは汚れてるつてことでしょうか。汚れてない色氣は、ピュアさに完敗 つてことでしょうか？だから、何でそう言つ他人

の評価を人前でするのか、この人達は――

「……でも、私は沢田くんのピアノが好きだけだ」

ちらつとオレを見た後、目をそらし、俯きながら彼女はそう言った。もしかしたら、オレが不機嫌な顔をしていたのに気付いたのかも知れない。

携帯を閉じ、黙つたまま、オレの隣に戻ってきた。期待が確信に変わつていぐ。

ダメだつて。もう、完全に彼女のことを見ることが出来ない。ダメだつて。彼女の横にいちゃいけない。逃げなくちや。

オレは、この女のことが好きになんてならない。好みだけど、嫌いじゃないけど。それだけだつて。

でも、どこに逃げればいい？家には帰りたくないし、寄りつきたくもないから御浜の家も秀一の家もダメだ。新島は……ここにいるし。

「す……すみません、ちょっと、電話が……」

上擦つてしまつた声を隠すよつに、急いで携帯片手に席を立ち、奥に向かつて廊下を進む。

広いけど、部屋数自体は少なく、寝室が一つと、ゲストルームらしき部屋があるだけだつた。まあ、男と会うためつづーか、その男は新島なわけだけど、隠れ家に使つてたんならこんなモンかとも思つた。

それより、電話。携帯のメモリを出しながら、他に泊めてくれそうなヤツを探す。でも、こんな時間だし、難しいかも。もういつの間にか11時だ。そろそろ地下鉄もなくなる。ここ、確か終電の最

終駅だし。

「あ、相原？ お前、今夜さ……」

『悪い。いま、ちょっと無理。クリスマスに女に振られ……』

聞かなかつたことにしよう。そんな不幸な現場（オレも似たよくな目に遭つたから）に居合わせた男と一晩過ごして、傷を嘗めあいたくはない。とりあえず、愚痴をこぼす相原の声を遠ざけるよう携帯を耳から離しつつ、他に誰かいなか考へることにした。したけど……オレ、友達少ねえなあ……。眞の家とか無理だし。

「沢田くん。何してゐるの？ 携帯かけてるんじゃないの？」

つけっぱなしの携帯を腕を伸ばして自分から離す姿は、確かに奇妙だつたかも。不思議そうな顔を見せるティアスの気持ちもわからんでもない。

『え？ 沢田、もしかして女といふの……酷……裏切り者……』

相原が電話の向こうで何が叫んでいたが、思わず電話を切つてしまつた。

「いや、まあ……その。何だよ？」

「もしかして、今日、帰りたくないんじゃないの？ 沢田先生のお客さんだなんて言つて。沢田先生、そんなこと一言も言つてなかつたよ？」

そう言えば動物園を出てから、オヤジの伝言を思い出して、ティアスに親父へ連絡するようにメール入れといたんだつけ。連絡したんだな……。

「泊まるといふ、探してた?」ないだ、灯路の家に泊まつた話も聞いたけど?」

「別に、なんでもいいだらうが。……新島の家に泊めてもらおうかな?」

「灯路は、カナを送りに出てつたよ?」

「は? なんで?」

「さつき、急に仕事の電話が入つて、タクシーで事務所に戻るつて送るつて……どこまで? ここの外?」

「ううん。ついてつた」

首を横に振り、あつさつさつと言つた。

「だから、帰りたくないなつこに泊まつてけば? 以前、泊めてもらつた借りもあるし」

ダメだつて。お前からも逃げたいのに。

「嫌いじゃない」、それだけだつたはずなのに。愛里がいるから、御浜がいるから、好きになつたら面倒くさいから……。必死で押されていたのに、隠してたのに。電話もメールも、彼女と過ごす時間も、それ以上のことを考えないようにしてついたのに。判つていたから、見ないフリをしてついたのに。

期待が確信に変わつて、確信がオレ自身の心を刺激して、押さえつけていたモノを、全て壊す。

「……ホントに、良いのか?」

「うん。別に、良いけど」

ダメだつて言つことによく判つてる。だけど、もうどうしようも

なかつた。

御浜に申し訳ないと思いながら、彼に嫉妬していた自分が、何を言つても仕方がなかつた。

12時半。地下鉄の終電が無くなつたころだ。市内でもはづれの方には深夜バスなんかないし、今日はタクシーでここに来てるから、他に交通手段はない。歩いて帰れない距離じゃないけど、こんな寒い日に、外に出すような女じゃない……はず。

そんな理由を付けなくとも、彼女は自分からオレに「ここに泊まればいい」と言つてくれた。それだけで、充分すぎるくらいオレに期待を持たせた。

持たせたのに、もう1時間以上、さつきと同じようにソファに並んで座り、微妙な距離を保つたまま、たわいのない話を続けていた。オレだけが、過ぎ去つていく時間と、この微妙な距離を必死で気にしてた。

「どうしたの？」

彼女は、妙なところで鋭い。

「何か、さつきから変だよ？」

変だよ、と言つべせに、それを聞くことを躊躇つ。オレのことを上目遣いで見つめ、一瞬目をそらした後、申し訳なさそうな顔で再びオレを見上げ

「……帰りたくないみたいだし。今日、お昼も何だかおかしかったし。何かあつた？」

「何で？ 何もないし？」

「やつちやんと会つて話すの、久しぶりだからかな？電話ではよく話してゐるけど」

久しぶりつてほひ、久しぶりでもないと思つけど。彼女の感覚では、久しぶりつてことか？それくらいオレに会いたかつたつてコトかな？ここまで言つたらやつぱり、自惚れか？

「そういや、オヤジと連絡とつたんだ？言われたとおり伝えただけだけど、音無さんになんか用があつたのか？」

「うん」

「うん。と言つたきり彼女は何も言わない。それ以上突つ込むなつてことか？」

余計なこと聞いたかな。会話がとぎれてしまつた。違う話を振るのもおかしいし……。

「寝るとき、奥の寝室使つて。私、ソファで寝るから
「え？ いいつて。オレがこいつで寝るから。たゞがにそこまでは…
…」

沈黙に耐えられなかつたのは、彼女も一緒だつたようだ。急にそわそわした様子で立ち上がり、説明を始め、寝室に向かつた。

「何だよ？」

「布団、持つてくるから、待つてて」

「いいつて。それくらい、オレがするつて。泊めてもいいのこ

何だらう。彼女も「泊まればいい」と言つたくせに、妙に意識してないか？それとも、今はオレが意識してゐるから？

逃げるよつに寝室に向かつて廊下を歩く彼女を、焦る心を隠しながら

がら追いかける。

「……そもそも、客用の布団なんかあるのか？隠れ家のくせに」「予備の毛布があるから、私がそれをソファで使うわよ」

「暖房つけてても、寒いだろ？」「

「一晩くらい、大丈夫よ」

「別に良いじゃん、ベッドで一緒に寝れば」

軽いジャブのつもりだったんだけど、予想以上の反応だった。寝室の扉の前で急に彼女は立ち止まり、振り返ると、睨み付けるような、でも誘うような、そんな目つきでオレを見つめる。びっくりするくらい顔を真っ赤にして。

「すげえね。顔、真っ赤。むっちゃ熱いし」

彼女の頬に触れたオレの手を、彼女は真っ赤な顔のまま、振り払つた。ちょっと、ショックだろ、それは。

「……冗談だろ？」

「そう言つの、冗談つて言わないのー。」

「言つって」

「今までそんなこと言わなかつたしー。」

あれ？ ホントに怒つた？ オレの「」と、好きなんじゃないのかな。

「ホント、ただの冗談だつて！」

逃げるよう寝室に入るティアスを追いかける。自分でもかつこ悪いって判るくらい、必死で彼女を追いかけていた。だけど、寝室に入れてもらえず、無情にも中から扉を閉められた。

しばらく待つていたら、むつとした顔で（でも赤いままで）、毛布を抱えて寝室から出だした。

「怒ってる？」

「怒つてないよ、別に。……〔冗談だつて判つてるから、むかついただけ」

「何だそれ、どういう意味だよ。本気だつたら良かつたつてこと？」

「持つって」

彼女から毛布を奪い、抱えてリビングに向かう。膨らみすぎた期待を、必死にうち消すように。

あんまり良いことじゃないのは判つてるはずなのに。もつ、ビリ

しうつもないのはオレだけで、状況は何も変わってないのに。
変わつてないけど、彼女の行動が、言葉が、オレの期待をますます膨らませる。ダメだと判つっていても、受け入れられたい欲求の方がずっと大きい。

「まあ、一緒に寝るのは冗談にしても。寝るまでは同じ部屋にいても良いんじゃない？」

愛里に軽口を叩くよつて。愛里にばれないように、自身の心を誤魔化すよつて。彼女への好意を示す言葉、それが本音だと判らないよつて。

「……簡単にやつて出来ちゃうんだね。彼女いるくせに

「彼女？」

「佐藤さん」

その名前に、一瞬身震いをした。その様子を彼女はおそらく冷静に見ていたのだろう。冷ややかな眼差しで一瞥した後、オレから毛布を奪い、一人でリビングに向かつた。オレは気を取り直し、急いで追いかける。

「愛里は、ピアノを教えてくれてるだけだって。言わなかつたつけ？従姉妹だからさ……」

「でも、好きでしょ？彼女のこと。知つてゐるよ。彼女の名前が出ると、顔色変わるし、電話で喋つても止まつちゃうの。佐藤さんの話を出すと、絶対に誤魔化すし」

……やっぱオレって、そんなに判りやすいのかな？ティアスまで、そんなこと言つうか？

オレがむつとしたまま黙つているのを知つてか知らずか、黙つて背を向けたまま、ソファに毛布をおいていた。

その微妙に重い空気を、彼女の携帯の着信音が壊した。

「出れば、電話。誰？」
「……御浜」

あからさまにむつとした声で電話に出るよつ促したオレに、彼女もまたむつとした顔で電話の主の名を明かした。またしても、オレの反応が判りやすかつたからか、彼女はオレから少しだけ距離をとつた。

だつて、この状況はまずいだろ？！御浜はティアスのことが好きで……。つーか、もしかして毎日電話してゐる？あいつ。オレも似たようなもんだから、何も言えないけど。

「こま？」めんね。友達きてるから。うん。そつなんだ。うん、連

絡あつたら知らせると。またね」

友達だつて。誤魔化したよ、この女。いや、オレに氣を使つてくれたのか？判らないけど、でも、助かつた。

それにしても結局、誰に氣を使つたんだ？御浜？オレ？それとも、自分の保身のため？

「沢田くんと連絡とれないつて、心配してた。でも、様子がおかしいから氣になるけどね、なんて言つてたけど。おうちには連絡した？柚乃も同じこと言つてたみたいだし」

「そういうや、してない。つーか、あいつはオレの保護者かつての溜息をついて見せたら、彼女はやつと笑顔を見せた。でも、オレは別のことが気になつてた。

「やつやつてしょっちゅう、連絡とつてるんだな。会つてすぐのときから、かなりメールしてたみたいだし」

さすがに、会つてすぐ次の日に、情報交換もして、名前で呼び捨て合つてたのにはびっくりしたけど。

「うん。御浜は良い子だし。仲良くなれると思つよ。沢田くんみたいに意地悪じゃないし」

『意外と、距離あるね、テツちゃんとティアちゃん。あの子、テツちゃんの顔みないし、沢田くん、なんて呼んで、よれよそしい感じ』

あれ？やつぱり、オレの自惚れなのか？ずつと、こんな距離感だったのに、そう言わると気になつてくる。御浜も、真ですか、いつの間にかこの女と仲良くなつてたのに、オレは一人、近づき過ぎ

ちやいけないって勝手に思いこみながら、彼女から一番遠くないか？
今のオレと彼女の物理的な距離はこんなに近いのに。精神的にも
近い気がしていたけど、もしかしたら、こんなコトは彼女にとって
当たり前なのかも知れない。

そんなこと、今さら言われても困る。

決して、彼女だけを見ているわけではないにしても、オレは、強く彼女に惹かれてる。まずいつて判つてるのに（もしかしたら判つてるからこそ）自覚したが最後、歯止めが利かない。

「……座れば？まだ、眠くないだろ？」

「そんな不機嫌な顔で言われても」

むつとしているのか、照れてるのか、わからないな。それでも彼女は、オレの様子を伺いながら、ソファに座ったオレの隣に並んで座る。

「あと、御浜とか真みみたいに、オレのことも名前で呼んでみれば？」
「え？」

また、真っ赤になつてオレを見つめていた。何だよ、何でそんな可愛い態度なんだよ。もしかして恥ずかしくて、そう言つたみたい
しい呼び方つてことか？

「なんか、ティアスにそつやつて呼ばれるの、不自然だし」

悔しいし。

「……テツ？」

おそるおそるオレの名を呼んだ彼女との間は、さつきと同じように1人分空いていた。その距離を詰めることなく、オレは彼女の頬に手を伸ばし、顔を引き寄せ軽いキスをする。

少しだけじゃ足らない。ここまで来たら、オレはもつと、彼女との距離を縮めたい。そう思つていただけなのに。

彼女はオレの頬を思いつきりひつぱたいた。

8

「いてえな……ちょっとキスしただけだろ？」

「ちよつとあ？！何よそれ。ちよつとでそんな真似できるわけ？」

立ち上がり、オレのことを真正面から睨み付け、頭ごなしに怒鳴りつけた。

「なに怒つてんだよ……」

理由なんて、一つか。彼女は単純に嫌だつたんだ。そう、あつさりと認められるほど、オレは冷静だつた。座つたまま、彼女を眺める。

違うな。冷静つていうか……体が震えて、鼓動が治まらないで、立ち上がりなかつた。追い込まれすぎて、腹をくくつた。そんな精神状態だ。

「だから、名前で呼べって」「沢田くんなんか、佐藤さんの」とびつかのへせへー向よー」「

きょとんとした顔で、彼女はオレを見つめる。一瞬、照れたように顔を伏せる彼女に、オレは必死で冷静なフリをして畳み掛ける。

「愛里のことなんか関係ないし」

「ウソばっかり。ホントは、今日だって佐藤さんに会いに行つてたんでしょ？ 真が言つてたもの」

「それはホントだけど、端に出汁に使われただけだ。大体、今日だってオヤジが迎えに来てたんだから。オレはその代わり。愛里はずっと、うちの親父しか見てねえよ」

「そう言つと、彼女は黙つてしまつた。申し訳なさそうに、オレを見ながら。

「大体、お前なんかに覚悟もなしで手を出したら、いろいろ面倒じやねえか。仮に、オレが愛里と何かあったとしても面倒だし、何もないけど、やっぱ面倒だと思つてるし。オヤジとか、賢木先生とか、新島とか」

「やうやつてあげてはみたけれど、一番「面倒なもの」の名前を口にすることは出来なかつた。

「面倒だし、未だに、どうしようか考へてる自分がいるけど、どうしようもないのも知つてる。

「だから、お前が嫌がつてんのは判つたけど。そんな風に怒られるいわれはない」

「でも……」

「だから、その辺は察しろつて。あと、喧嘩になるなつづーの。嫌ならもつしない。オレの勘違いだし」

勘違いだつたんだつて判つても、もう遅い。なんか、勢いに任せて、襲うような真似するんじゃなかつた。いろんな意味で取り返しがつかない。

彼女との間の距離も、御浜との関係も。そして何より、自分の心が。

「こんなにはつきりと、御浜と彼女が仲良くなつてることを嫌な自分を、自覚するとは思わなかつたぞ。

「顔、赤い。熱いし。お互い様だわ」

「お前がオレに触るのはイイのかよ」

彼女の右手が、オレの頬に触れる。オレは座つたまま、顔を伏せた。彼女の顔が見られなくなつてた。自分の顔が熱くなつてくるのがみつともなくて。

「沢田くんみたいに、下心がないから良いのよ」

「だから、名前で呼べって」

オレの頬に触れたまま、屈んでオレを見つめるティアスを、意を決して真正面から捉えた。伏せていたオレと目が合つたのに驚いたのか、今度は彼女がオレから皿をそらした。逃げる彼女の右手を、掴む。

「……テツヒトくん。離して」

「さつきみたいに、呼べばいいのに?」

「……テツ?」

今度は彼女の体を引き寄せ、腰を撫でながら何度もキスをする。抵抗しないのを良いこと、そのままラグの上に、優しく彼女を押し倒す。

「別に、嫌だつたわけじゃなくて……。でも、これは……」

嫌だつたわけじゃない。彼女がそう言つたのを聞いて、少しだけオレは安心する。今さら勘違いつて言われても、やつぱり困る。

「まだつてこと?」

「何でそんなに偉そうなの? テツつて」

真つ赤な顔してるくせに、憎まれ口はたたけるんだな、この女。必死な感じが、今は可愛く見えてしまつけど。

「Jの状況でそんな」と言える、お前もね

もう一度キスをして、彼女の首筋に顔を埋める。オレの行為に、彼女は抵抗しなかった。

Jの先に行くかどうか迷つていたとき、玄関が開く音が聞こえた。

「ティアス? まだ起きてるのか?」

新島の声! 佐伯さん送つてつたんじゃねえのか! てか、送つたついでに外でヤツてんじゃねえのか!

オレが彼女からJにJと動くより先に、彼女は急いでオレの腕から逃げ、起きあがつた。

「なんだよ沢田。まだいたのかよ。何してんだ。もしかして、取り込み中だつた?」

リビングに入ってきた新島は、微妙な距離を保ちながら、床に座るオレ達2人を見て、当然のようにそう突つ込んだ。彼の見解とし

ては、そう言つて展開になつてしかるべき、と思つてゐるかも知れないと。けど。

「そう言つて冗談、やめてよ」

「今夜、泊まるところがないからソファと毛布を借りたんだよ」

「そうそう。それより、灯路はカナを送りに行つたんじゃないの？」

さすがに、一人して必死に否定してんのは怪しかつたかな……。
ソファがあるのに一人して床に座つてゐるんじや、何かあつたように
しか見えないだろう。もちろん新島は、不審そうにオレ達を見てい
た。

「忙しいのに、最後までついてつてどうすんだよ。途中、タクシー
で追い返された。泊まるつて言つて家を出てきてるから、帰るわけ
にも行かなくて戻つてきたんだよ。ここに泊まつてこうと思つて」
「泊まつてく？！何だそれ。いつもそんなコトしてゐるのか？」

「だつて、普段はここにティアスしかいねえのに。しかも、今日だ
つて、ティアスだけしかいないつもりで帰つてきたんだる、コイツ
は。危険、危険！！」

「……そんな食いつかれても。ティアスとなんか、何もないし。大
体コイツ、オレとカナさんが2人でいる時は気を使って2人きりに
しようとするとくせに、オレ一人だと女王様なみに偉そんなんだもん
「だつて、あんまり会えなくて寂しそうだし」
「寂しそうとか言つな！」

照れてるし。

しかし、オレにあれだけのことを言つた新島とその彼女の様子
を見てたけど、意外と普通だつたな。もつとドラマチックなのを期

待してたのに。

「それより、沢田がここで寝るなり、オレはどこで寝たら良いんだ。つーか、放浪癖でもあんのか？お前

照れ隠しのよつこ、オレに悪態をつぐ。オレの目が見られないほど照れてるくせに、なんてヤツだ。

「放浪癖とか言つな！」

「何で帰らねえの？」

「たまには家に帰りたくない日もあるだらうが

「わりと頻繁な気もするけど」

そう小声で言つ、新島の意図は判らないでもなかつたけど。オレが逃げていることを、その相手を彼が明確に理解していなくても、その行為自体を、彼はよしとしていい。

「ま、いいや。なんかオレ、タイミングの悪いときに戻ってきたみたいだし。邪魔しないで引っ込んでるわ。おやすみ

「え？ ちょっと、灯路！？」

彼はオレ達の顔を見ずに、ティアスの叫びも無視して寝室に向かつた。しかし、彼女もまた、それを強く引き留めはしなかつた。

いや、2人でこんなとこに残されましても。すぐそこに新島がいるつて判つた状態で、これ以上、何も出来ないだろうよ……。

「なんか……ものすつ」ぐ誤解してない？灯路つてば……

「……当たらずとも、遠からず」

彼が寝室に入つて、扉を閉める音が聞こえたと同時に、彼女を抱

き寄せ、キスをする。何度もキスしながら、抱き寄せる手に力を込める。彼女は赤くなつて下を向いていたけれど、今度は頑なに押し倒されることに抵抗していた。

「この状況で、なに考えてんのよ」

「いや、まあ、そうだけど。ここに一緒にいるなら、してもしなくても、同じじみたと思われる気がす……」

彼女は床に転がるクツシヨンでオレを思いつきり殴つた。何だろう、ものすげー、へーむ……。

「ケータイ、鳴つてん」

「何だよ……」

突然、彼女がきょろきょろとじだす。オレと距離をとるためにか、急いで立ち上がり、辺りをうひうひく。

「これ、テツの?」

「あ。あれ? いつの間に落とした?」

ポケットを探りながら、彼女に近づく。彼女は真っ直ぐに手を伸ばし、出来る限りオレと距離をとるようこじて、携帯を手渡してくれた。へこむだらうが、その態度……。

「あ……」

はつきりと、着信者の名前が出ていた。御浜だった。彼女も確實に見てるはずだ。

「出ないの?」

「どうじよ。どうしたら……

「テツ、最近よくふりふりしてたから、御浜が様子がおかしくって、心配してたよ。出れば？」

心配してたとか、してないとか、なに話してんだお前らは。オレの知らない話を、どひちの口から聞くのもホントはいやなんだつてば、オレはーそんなこと、自覚させんな。考えないようにしてたのにー！

「睨まないでよ……怖いなあ」

ぎづぎづ手を伸ばせば届く所に立っていた彼女の腕を掴み、力任せに引っ張り、引き寄せた。

「……痛いってー！」

ケータイは、まだ鳴り続けていた。

「あああああ騒ぐな！五月蠅い！新島が出てくるだひー！」

「痛いって言つただけじゃない！さつとと出なきこよ、電話ー！」

「五月蠅い、五月蠅い！お前だつて、御浜とこそこち話してるくせにー！」

「何それ、今は関係ないじゃないー！何でかこの御浜が出てくるのがのんべいで出なきこよー！」

「電話かかってきたのはテツでしょー！」

「お前の所にもさつきかかってきただらうがー！」

自分でも、何でこんなこと言つてるのか。冷めてる自分と、頭に血が上つてじりじりょうもない自分が、心の中で同居してるので気持ち悪かった。吐き気すら催しかねないくらい。だけビ、とめられない。一体オレはなにうしたいんだ？

「なんで……」

真っ赤な顔して、上田遣いでオレを睨み付ける。

「もう、意味判らない。ああいうこと出来るくせに。何で怒られなくちゃいけないの？」

……やべ、コイツ、泣きそうだ。ど……どつしたら…? つーか、何で? ティアスだって、オレに怒鳴りつけにきたくせに!

彼女は顔を伏せ、オレから目を逸らし、体を震わせていた。この状態で、沈黙が続くのは、正直きつい。彼女はオレの顔すら見ないように。オレも、彼女の表情を見せてもらえないのに。

09

息が詰まるような沈黙に耐えられるはずもなかつた。身を震わせる彼女を気に掛けないわけもなかつた。

握っていた携帯の音もやみ、ますます沈黙は重くなる。

マナー モードにしてガラスのテーブルの上に置いた。その音に、

彼女が一瞬反応したが、やはりこちらは見ずに顔を伏せていた。

「……もしかして、泣いてる?」

彼女の肩を掴み、揺さぶるが、頑なに顔を見せようとしない。声も出さず、ただ首を横に振る。

「ティアス?」

「……てない」

「泣いてるし。何でだよ」

「怒るから。……こんな、ケンカみたいなことかしたくないのに」

「オレもだ」

「テツはいつも喧嘩腰のくせに

「元気だ

失礼な。誰が喧嘩腰だ。真つ赤になつて俯いてるから、可愛いと

もあるかと思えば、言いたい放題言いやがつて。

両肩を掴んだまま、無理矢理下から覗き込むようにしてキスをする。

泣いていたからか、あきらめたからか、彼女はその行為にも、その後の行為にも抵抗しなかつた。

彼女をソファに座らせ、抱きしめたままセーターをめぐりあげ、背中に直に触れた。

「……ケータイ」

再び、携帯が鳴り響く。とは言つても今度は振動で、ガラスがカタカタと鳴っていたのだが。思つた以上に五月蠅かつたが、相手を確認するのも、止めに行くのもやめた。

御浜のこと、忘れたわけでも気にしてないわけでもないけれど。でも、目の前の彼女に手が届くのに、我慢できなかつた。

必死でうち消そうとして、考えないようにしていたこともあつた。

御浜のことを口に出すことで、否定していく。

愛里のこと、頭から離れないけれど、目の前の女のこととはやつぱり別だ。

自分でも、ずるくて臆病で、どうしようもないと思つ。そのくせ、いつもやつて、美味しいといふだけ掠め取るよつた真似をするんだ。

オレはいつもやつだ。

判つてゐるけど、ずることとは思つけど、申し訳ないとは思つけど。

一度認めてしまつたら自分でも驚くほど、何者もオレを押さえら

れなかつた。

彼女以外は。

「テツ！」

また殴つた！この女！何でこいつ暴力的なんだ！しかもひねつてるとよ！パンチいてえつて！

「嫌なら口で言え！ほんほん殴るな！」

「嫌とか、嫌じゃないとか、そうじゃないでしちゃが！なんでそう、順序を守らないのよ！」

「順序なんか知るか！嫌なのか、嫌じゃないのか！？」

何でそこで黙るんだ。

そう思つけどやつぱり、涙を浮かべたまま、真正面からオレを睨み付ける彼女の目を、オレは見ることが出来ない。

「……テツこそ、どうこうつむりで」

判りきつたことを聞くか？この女は！この状況で、このめんどくさい女相手に、いいかげんなこと出来るかつての！リスクが大きすぎるつて！何度も言わせんだ！

つて、言えてないけど。言えてか？！オレの口から？オレから！もう、彼女とこうして怒鳴り合いを始めてから何度もだらつ。再び、携帯の振動がテーブルをがたがたと揺らす。でも、こいで出るのは、いくら何でも無いだろう。

これ以上、彼女を怒らせるのも、泣かせるのもオレは嫌だ。どうしていいか判らないけど、言葉は出でこないけど。

黙つたまま、オレは彼女に手を伸ばした。彼女はやつぱり逆らわなかつた。簡単にオレの手の中に收まり、オレはこの手に力を込め

る。

しばらくの間……どれくらいかは判らなかつたけれど、抱き合つたままその場に一人で立つていた。彼女から手を離し、再び彼女の肩を抱き寄せ、ソファに座つた。一度だけキスをして、身を寄せ合つたまま、毛布にくるまつて目を閉じた。

多分、オレは逃げた。彼女に、自分のことを口にするしかから。だからこれ以上何もしない。その代わり、口にしない。もう戻れないのは判つてたつもりだったけど、まだ何とかなるんじゃないかつて思つてた。淡い期待つてヤツだ。

するいかも知れないけど、彼女だつて何も言わないくせに、暗がりの中、こうしてオレの隣で目を閉じてる。お互い様だと思いたい。

彼女はどうか知らないけれど、オレは結局一睡も出来ないまま、朝を迎えた。オレが毛布を抜け出し、顔を洗いに立ち上がると、彼女も毛布から出て、台所に向かつた。お互いにずっと黙つていたから判らないけれど、彼女も寝ていなかつたのかも知れない。

「朝ご飯、シリアルしかないけど」

台所に戻ると、彼女は棚を漁りながら、やつと口を開いた。色気のあるような無いような、微妙な台詞だ。

「お前がまともな食生活を送つてないのはよく判つてる。期待はしてない」

「何それ。よくそういうことが言えるわね」

怒るかと思つてたけど、顔が笑つてた。昨夜のことなど無かつたかのように彼女は振る舞つ。だから、オレはどうしていいか判らない。これ以上手を伸ばしていいのか悪いのか。

『嫌とか、嫌じゃないとか、そういうないでしようが！なんでもう、順序を守らないのよー。』

順序を守ればいいって風に聞こえるな。拡大解釈すると。難しいところだ。

欲張りなのか？オレは。あんなことを言つたくせに、オレの隣で、オレの手の中でおとなしくしてゐるくせに、こうやつて彼女が何もなかつた振りをしていることが、オレにさらなる期待をさせる。

もしかして、彼女に手を伸ばしても、何もなくさなくていいんじやないかつて。何もかもうまく行くんじゃないかつて。御浜のことも、愛里のことも、彼女やオレに絡む全てのこと。

強くいれば、強い振りをしていれば、強く居続けられる。

「ティアス」

「何？」

食器棚らしき場所から（そもそも食器自体、コップ以外ほとんど無かつたのだが）シリアルボウルを探していた彼女は振り返り、驚いた顔をオレの目の前で見せた。

「……びっくりした」

後ろに立っていたオレに向かつて、彼女はそう咳くけれど、微笑んでいた。オレは黙つて彼女にキスをする。

「びっくりした」

今度は照れくさそうに笑つていた。

「何だよ、早くない？お前！」

新島の声に、思わず彼女と離れるが、もしかしたらしつかり見られていたかも知れない。コイツなら、何食わぬ顔していそうで怖い。

「いつも通りよ」

「ウソつけ。何で見栄を張るかな？」

彼は苦笑いしながらキッチンを伺うが、何故か一向に廊下からこちらに入つて来ようとしない。

「……何だよ？」

「まあまあ、沢田」

オレを小さく手招きする。思わずティアスと顔を見合わせてしまうが、とりあえず彼の元へ向かうと、寝室に誘導される。

入った途端、黙つて寝室の扉を閉められた。何だ、この展開は。気持ちが悪い。

「だから、何だよ？」

もしかして、昨夜何があつたかとか聞いつとしてる？どんな過保護だ。

「あのせ、ティアスのことなら、別に……」

「悪い！オレの勘違い！それ！」

いきなり、目の前で手を合わせ、謝られてしまった。

「……は？いや、勘違い一つーか、だから、別に何も無かったとい

うか、その……

無かつたと言つたら、ウソになるけど。

「いや、無いなら、良かった。いや、オレ昨夜、お前に電話したけど出なかつたからさ。てっきり行くとここまで行つやつてんのかと。ティアスもうつかり流されたりしてんのかと思つて」

「……流される？あの女が？」

あれは、場の雰囲気に流されてただけってこと？

「まあ、そう言つてゐもあるだる。誰にだつて。あいつ、気は強いけど、そう言つては確かにあら」

「ああ、そつ」

としか言えないだろうが、そんなこと言われても。

「何が勘違いなのか、話が見えないんですけど？」

「いや、だから、ホント悪い。何か、ティアスの彼氏がこっち来てるらしきって、連絡あつてわ。面倒なことになる前に教えておいつと思つただけで」

「ちよつと待て、聞いてない！」

思わず、新島の胸ぐらを掴み怒鳴ってしまった。けれど、思い直して彼から手を離し、謝った。

彼氏？この女に。あの態度で。いくらなんだつてずるくないか？

「何で、ちょっと怖い顔なのよ」

オレの考えてることが伝わったのか、不満そうな顔で文句を付けてきた。ティアスの隣で珈琲を飲む新島は、苦笑いをするばかりだ。コイツじゃ、どうじつもりであんなことを告げたのか。タイミングが悪すぎる。

まあ、今さらこの気もしないでもないけど。

「元々こうう顔だよ。うるせえな」

腹立たしいことこの上ないが、口元で罵るような仲じゃ無いつーのが一番痛いな。

ちくしょう。男がいるくせに、あの態度か。期待したじゃねえか。どんな男だ。彼女がこっちに来たから追っかけてきたのか？逃げられてんじゃねえのか、その男は。

「そういやさ、ティアス。昨夜、孝多から連絡あつたんだけど。お前、連絡先教えてないの？携帯渡してから随分経ってるだろうが。何かいろいろ困ってるみたいだつたぞ」

そいつか？コウタつてヤツが男か？

睨み付けてしまったオレの視線に気付いたのか、ティアスも新島も、ちょっと引いた表情を見せた。いいからお前らは反省しろ。オレを振り回しやがつて。

「いやよ。孝多に連絡したら、兄さんにも伝わるじゃない。意味がないわよ。あの人、真面目すぎて間抜けなところがあるから、絶対何かしでかすと思うのよね」

「その件に関しては、全く否定しないけどよ。大体、時差も考えず

に真夜中に電話してきて、それを突っ込んだら平謝りするよつた男
だからな

「うわ……孝多つぽい」

田の前で知らない、しかもティアスの彼氏つぽい男の話をされる
のは相當不愉快なんですけど。新島のヤツ、謝ったから良いと思つ
てるな。もう遅い、とっくにフラグ立つてるんだよ。
それを、新島に言つのはいやだけど。でも言わなくとも、とっく
にバレてるモンだと思つてたけど。

「……あ、『めん。孝多つてね、灯路の昔からの友達でね……』

ティアスがオレの不愉快な表情に気付いたというか、どうすれば
いいか気付いたらしく、説明を始めた。それに乗つかるというか、
フォローするように新島が続けて説明を始める。

「オレの幼馴染みつてヤツ。お前と白神みたいな感じでお隣さんだ
つたんだけど、親が転勤族で中学上がる前に引っ越しちまつたんだ
な。で、たまたま転勤先がコイツのいたベルギーの学校の側で……
みたいな、なあ？」

「ご丁寧な説明ありがとよ」

「……ティアスじゃなくても怖いぞ、お前」

誰のせいだ。

あれ?しかし、話のつじつまが合わないな。新島と共通の知り合
いなら、しかも出会いのきっかけがコイツなら、つき合つてたこと
を知らないわけがないだろうよ。別れたと思ってて、あんな思わせ
ぶりなことをいろいろ言つてたのか?

「孝多のヤツは、相変わらず何を言つてるんだか、いまいちよく判らなかつたんだが」「頭はいいんだけど、バカよね」

「身も蓋もないな。で、その何を言つてるか判らん孝多の言葉を拾い上げた情報によるとだな、なにやら重要な話があるからティアスに連絡とつてくれつて」

「ふうん」

何でもない顔をしとるな、この女は。もしかして、こういう話をするつもりだつたから、新島は先にオレに情報を教えてくれたのか？男が来て重要な話ついたら。

「重要？」

「うん。だから一回ひつちに来るつて。いつかは知らんけど。何かのついでだからとか言つてたな」

「灯路の理解力がないんじゃないの？何、その適当な話の扱い方」

全くだな。とりあえず、しばらく黙つて様子を伺つていよう。珈琲でも飲みながら。

新島がちらつと、オレに視線をくれる。それつて、どんな気遣い？

「で、なんだつたかな。蓮野……何つたかな」

多分、そのハスヤつてヤツなんだ。新島が言つていたのは。ティアスの表情が、「コウタ」つて奴の話の時とはまるで違つていた。新島も、ちらちらとオレの方ばかり見てゐるし。

「蓮野遼平でしょ？」

「そうそう。そいつ。そいつのこととどつとか」

「死んだんじやない？だから孝多のヤツ、知らせに来たのよ」

「……は？」

言葉が出なかつた。新島も知らなかつたんだろう。固まつた表情のまま、オレと彼女を交互に見つめた。

何だ、状況が判らん。

おそらく察するに、新島の言つ「ティアスの彼氏」つて言つのは、その「ハスヤリヨウヘイ」つて男なんだろう。それは彼女のあからさまな態度の変化でも明らかだ。だけど、「彼氏」という割には、彼の死を告げに来たであろう男が来るためにあつせりしているし、そもそもそんな状況の男がいながら、置いてきたつてことだらうか。

「ティアス……お前、案外冷たいな

オレも思つたことを、新島は簡単に口にした。そう言つたかったけれど、オレの立場でそれを彼女に言つのは憚られだし、何より、言いたくなかった。

「え？」

「だつて、孝多の話じや、その蓮野つて男と……」

「雨に唄えば」の着信音が鳴り響く。ティアスが無言で新島のポケットを揺らし、彼は渋々携帯をとつた。

「もしもしし~孝多かよ。時差考えろつづーのーつて、朝だからいいけど

「『彼氏』つて聞いた」

「うわ、待て沢田……いやいや、こいつのこと

あつせつ、オレがそう口にしたことで慌てたのは他でもない電話

中の新島だつた。オレは無視して、真正面から彼女を見つめた。
よく考えたら、別に他意のない話じゃないか。彼女を責める資格
はないけど、聞くくらいならいいんじゃねえの?と思つただけだ。

「彼氏じゃないよ?別に」

「わざわざ死んだことを知らせるために来るような相手なの?」

「端から見たら、もう見えてたのかも知れないけど」

もう言つて、つき合つてゐたと聞いてび。ああでも、言つ
たくないそんなこと。

彼女は少しだけ怒つてゐるような顔を見せた。その様子が、余計に
オレを苛立たせているとも知らずに。

「何で、『死んだ』つて判るのに?」

「あの人、病氣だつたの。まだ29で若かつたんだけど、ずっと療
養してたのよ。長くないつて言われてたから」

「何でそんなにあつさつ言えるんだ? そつ言つて」と
「だつて、そう約束したの、ヨコハミ

なんじやそりやー約束したからつてこと? こんな意味にとれる
ぞ? それ!

ホントはすゞ悲しいけど、彼と約束したからそつ振る舞つてる
のか。

口約束程度で簡単に彼の死を突き放せるほど、じつでも良いつて
ことなのか。

じつちでもいやだ。

「……わかつた。ティアス、喧嘩腰の所、悪いけど」

「喧嘩腰じゃないわよ。テツが、私のこと責めるんだもん」

「別に責めてないだろ？が。ちょっと冷たくないか？って思つただけだ」

違う。冷たいとか冷たくないとか、本当は多少ビリでもいいんだ。少しだけショックではあったけど。そんなことより、その「リョウ」なんて呼ぶ仲の男と、今でも続いているのかどうかって話だ。死んだのかも知れないけど。それはそれで、彼女の心にいるのかどうかって方が大事なんだ。

そう考えるオレは、どうしようもなく冷たかった。彼女を冷たいとか冷たくないとか、言つ資格なんてホントはなかつた。同じように、彼女を挟めば嫉妬の対象として見てしまう御浜には、そんなことは絶対思わないはずなのに、自分と関わつていない人間に対しては何でこんなに残酷な気持ちでいられるのか。

御浜との関係も、ティアスとの関係も、どうも手に入れたいと願うくせに。どっちともうまくやつていきたいと願うくせに。そのために、ずるく天秤のバランスをとろうと、昨夜決めてしまったくせに。見ず知らずの蓮野つて男には、彼女の心から消え去つて欲しいと願つてゐる。

「待て待て。お前ら、普通に痴話喧嘩してゐるじゃねえか。なんなんだ一体」

「痴話喧嘩つて！そんなんじゃないわよ」

オレに同意を求めるな、へこむわ！

思わず彼女から目を逸らしたら、彼女は怪訝そうな顔をしていた。

「それより、孝多がもうセントレアついてるつて。あと一時間くら

いでこっちに着くつてよ」

「何それ、昨日の電話つて……」

「トランジットで降りた空港からしてたつて

いやだ。昨夜の葛藤は何だつたんだ。愛里のことも、御浜のこと
も、彼女との関係も、何も解決しないまま、何も決められないまま、
余計な荷物ばかりが増えていく。

ティアスのことを好きだと想つ気持ちと、愛里に執着し続ける思
い。

彼女を自分のものにしたいという欲望と、御浜に対する遠慮と彼
との関係の維持を望む心。

未だにそれは拭い切れていないけれど、どちらをとるかなんて選
べないけれど、それでも、彼女に一步踏み出そうとしていたところ
なのに。

『びつくりした』

彼女も、オレのことを受け入れてくれそうだったのに。なんだこ
の展開。彼氏じゃないって言われたって、それ以上に面倒だろうが。

「テツ、どこに行くの？」

立ち上がり、玄関に向かうオレを彼女が追いかけてきた。何故か、
新島は一緒じゃなかつたけど。

「……帰る」

別に帰りたくないんだけど。むしろ、オヤジとは顔もあわせた
くないし。御浜にも会わせる顔がないし。

「待つて、一緒に来て」

「なんで？！」

「ホントにリョウが死んだんなら……」

初めて、彼女は少しだけ悲しい顔をして見せた。それが、オレには辛い。

「死んだんじゃない？」って言つたのはお前だろ？」「でも、もしかしたら違う話かも。だけど、ホントにそうだったら

俯く彼女の思いが、さすがに伝わった。

「テツに、……いて欲しいよ

「新島でいいだろ？」「

俯いたまま、彼女は首を横に振つた。

またオレは、彼女に期待してしまつ。新島が玄関の方に来ないとを確認して、彼女の頬に自分の頬をすり寄せた。赤くなつてたのか、彼女の頬が熱くて、思わず笑つてしまつた。

「もう一回、はつきりと言えたら、一緒にいてやるよ

「テツ！」

まさに鬼の形相で、オレを怒鳴りつけた彼女に、軽くキスをすると、驚くほどあつさりおとなしくなつた。その様子が、オレの心を簡単に解きほぐす。ずるいな、とは思うけど。

「ずるいよ。何でそう言つていいとできるの？」

「お前もな。そんな男がいて、何で昨夜の態度かな？だけど」

彼女は再び黙ってしまった。オレ達は多分、いろんな意味でお互い様なんだろ？。

「一人で聞けないって言つなら、仕方ないから一緒にいてやるよ」
お互い様だと思っているのはオレだけで、冷たいのもずるいのも、
本当はオレだけかも知れない。
不安を抱く彼女につけこんで、触れられる部分を全て呑わせるよう
に、力一杯抱きしめた。

ティアスの願いで、新島はオレと彼女を部屋に置いて芹孝多という男を迎えて駅に向かった。オレ達は昨夜と同様、リビングのソファに横に並び身を寄せ合った。

いつもしてるとつき合つてゐるような氣もするんだが、言えないし、言える状況じゃない自分がもどかしかった。

彼女の腰に手をまわし、もう一方の手で頭を撫でる。

「孝多の話がリョウのことだつたら、沢田先生や賢木先生にも伝えて欲しいの」「オヤジに?」

いま、あんまり会いたくないんですけど。つーか、何か外に出るといろいろめんどくさいだから、ティアスの隣にだけいたいんですけど。

さすがに、そう言つわけには行かないけれど。

「うん。沢田先生達と随分仲が良かつたつて言つてたんだけど、病気のことが判つてから、わざと距離をとつてたみたいなのね。音無だけは時々会いに来てたみたいだけ」

音無さんは呼び捨てか。結局、コイツは何しに来たんだろうな、こっちに。オヤジの話しぶりからすると、音無さんに関係してるっぽいけど。連絡があつた、なんて伝えるくらいだし。

今はそんな話を聞ける状況ではないけれど。

「ふうん。その仲のよい友人とも距離をとるような男と、お前は近かつたわけだ」

「だから、何でそう言ひこと……」

「どんな男なの、そいつは」

「いいじゃない、別に」

ふてくされてみせるくせに、彼女はオレに体を預けたままだつた。何か、関係がはつきりしてないけど、これはこれで良いような気もしている。それじゃ納得いかないような、責任が無くて楽なような逃げ道が用意されてるその感覚が、気楽でもあり、不安でもあった。

「聞きたい」

「……御浜……」

聞きたくなかったかも。何でそこで、その名前が出てくるかな。

「御浜みたいな男つてこと？」近所の王子様か。30近いくせに「まあ、病院内ではそんな感じだつたかしら。優しくて、綺麗で、穏やかで、真っ直ぐで」

「表向き、御浜っぽいな」

気にしてない口振りをして見せたけど、思わず彼女の腰に回した手に力が入る。

「でも、ちょっと内に籠もるというか……暗い部分もあつて」

「ああ、そう。そこが嫌いじゃなかつたと」

彼女は黙つてしまつた。せめて何か言つてくれ。肯定のサイン以外の何モノでもないじゃないか。

「要は、元彼っここと？」

「だから、つき合つてもなこつて。やうやうのじやなくて」

やうやうのじやなことやうへせん、やうやうそんなん含んだ言い方
なのか。

「違つよ。テレジが気にするよつな」とじやない」

「ああ、やう」

「だつて、ホントは何も見たくなこんじよ。」

「やうだな」

見透かされてる。少しだけ、ぞつとする感覚を覚えた。オレがい
ろんなモノから逃げてることを、確かに少しずつ伝えはしたけれど、
やうやうに方をされると少しだけ怖い。

「私も、見たくないものはもう見ずにいたいんだ」

「え？」

呼び鈴の音が鳴り響いたので、急いでオレ達は距離をとる。彼女
は立ち上がり、玄関に向かった。

彼女の言葉の意味を、どうとつていいか迷っていたから、無粋だ
とは思つたけれど、少しだけ安心もした。

「沢田。紹介するよ。コイツがさつてた芹孝多。2個上であ
つちの大学に通つてる」

……年上なんだ。

ソフアから立ち上がり、紹介された、どう見ても自分と同じかそ
れより下にしか見えない男に会釈をした。穏やかそうな、悪く言え
ばちょっとほんやりしてそうな、天然ボケっぽい男だつた。よく言

えば無邪気な笑顔が印象的だった。ただ、新島と並んでいても、明らかに新島の方が年上に見えてしまう。

「芹です。よろしく。さつき少し、灯路から話を聞いたので。沢田先生の息子さんだつて。こんな大きな息子さんがいるなんて驚いたけど、沢田先生の話は蓮野さんからよく聞いてたので」

オヤジの話に、オレはどうしても、うまく笑顔が作れなかつた。そんな、オレの知らないこと言われても、正直困る。

彼らの後ろから戻つてきたティアスは、再びオレの隣に立つた。何故かその行為に、オレは妙な緊張感が緩んだような感覚を覚えていた。

「テツは、あんまりそう言つ話は聞いてないと思つよ？ 沢田先生つて、そう言つ話はしなさそうだったもの。元々、リョウのお兄さんと仲良かつたんでしょう？ 賢木先生とか」

ちらりと、オレの様子を伺いながら、彼女は説明をしてくれた。その話の方が、納得できる。オヤジより賢木先生や音無さんが年上だけど、大学の友達と言われたら何とか関わつていてもおかしくない年齢だ。だけど、ハスヤリヨウヘイという男は、ティアスと何かあつたつてことが生々しくぎるぐり、簡単に想像できる程度に若い。

「……灯路」

「何だよ。何でそんなちょっとおどおどした顔なんだよ。気持ち悪いい」

「」の芹って人は、ホントに新島と仲が良いんだろうな。新島は元々、丁寧な男ではないけれど、ここまで他人に対して突つ込んでい

くよひな男でもないから。距離感を適切にとれる男が、久しぶりの男にここまで近付いているのは、何だかほほえましかった。

「沢田くんとティアスって、つき合つてる? もしかして」「……セイ、突つ込んじゃダメなことだから、多分。黙つてろ。つか、口にするな、思つたとしても」

本当だよ。セイに全否定するよりも肯定することも出来ねえぞ、いまのオレには。ティアスに全否定されても、いやだけど。

「孝多は黙つててよ」「でも、蓮野さんは……」「関係ないでしょ? が。もう、孝多はリョウの肩を持ち過ぎよー。一休何しに来たのよー。」

否定も肯定もしなかつたが、彼女が芹さんから余計な言葉を出させないようにしていることは手に取るようにな判つた。彼女が、わざと彼を怒鳴つたことで。

「まあまあ……孝多のことだし、許してやれば? 落ち着けつて、座れよ。立つてるからヒステリックになるんだ。孝多も、何か喋る前にオレに言え」

芹さんもティアスも、新島にかかつたら酷い扱いだな。ホントに年上か? と言つて、この3人の中で、新島が一番年下だつて言つたのが信じられる。

「沢田くん、苦笑いしてるよ」

「するしかねえだろ、そりや! オレだつてするわ!」

頭痛いなあ、もつ……。うつかり笑うことも出来ん。

まるでオレがするように、隣に立つ彼女がオレの背中に触れる。その行動に促され、彼女と一緒にソファに座った。芹さんは、半ば強制的に新島に命じられるようにして床のクッションに座る。その様子を確認してから、新島が革張りのソファのアームに腰掛けた。言い出しにくそうに、ティアスを見つめる芹さんの様子に、彼女は大きく溜息をついた。

「リョウが、死んだんでしょう？」

彼は黙つて頷く。彼女のこと思いやつて、と言つよりは、芹さんが自身が彼の死に對して酷くショックを受けているように見えた。實際、さつきの彼女の話からすると、そうなのかも知れない。

『でも、蓮野さんは……』

だとすると、彼のあの台詞はどういう意味だつたんだろう。オレとティアスがつき合つてたとしたら、ハスヤリヨウヘイがどうだと言つんだ。蓮野がティアスの彼氏って言つ情報が新島の所に届いたのは、確實に芹さん経由だ。だけど、ティアスはあの調子だし、蓮野はもう死んでいる。

死んだ男のことを気にする必要なんか無いはずなのに、いろんな人の思いが絡みついて、唯一確認したいはずのティアスの本音が見えにくい。

彼女の心に、彼の存在がこびりついていなければ、彼の死が彼女の心に余計な影響を与えないければ。オレの知らない男なんてどうだつていいのに。

「いつ？」

「昨日、葬儀が終わつた」

終わってすぐそこへ、いつに来たつてことか。もつと落ち着いてからでもいいだろ。」

こんな冷たいことを考へてるのはオレだけかも知れない。新島もティアスも、彼の言葉を静かに、真剣な面持ちで聞いていた。怖いくらいに。

「お兄さんは……ティアスには知らせなくていいって。蓮野さんも望んでないしつて」

新島が俯いた。彼の元には、何度かティアスの兄から連絡があつたはずだ。オレも聞いてるし。そのことを思つてゐるんだろう。

「それで、これ。あの、預かってて。蓮野さんから。……」めん、オレ、どうしていいか判らなくて」

芹さんが体を浮かせ、ティアスに手紙を差し出した。彼女はそれを受け取ると、少しだけオレの方に体を近付けた。

「あとで読むよ。孝多こはちやんと教えるから」

芹さんはゆつくりと首を横に振つた。

「いいんだ。オレももうつたし。オレはちやんと看取つたから。だけど」

ちらつと、オレを見つめた。その視線が少しだけ怖かつた。悪意は感じられなかつたけれど、彼の何か秘めた思いのよつたモノを感じて。

あの後、芹さんは随分疲れていたらしく、新島と話をしたあと眠つてしまつた。仕方ないといった顔で新島が彼をベッドに運んだ。「時差もあるしな」と苦笑い混じりに言つて。

オレもティアスも、黙つていた。新島のフォローにも、芹さんの無言の圧力にも。

新島はその後、キッチンで電話を掛けていた。最初はどひやら母親に。2回目は話しかから察するに佐伯さんだつた。

込み入つた内容になつてきたのか、彼は携帯を片手にキッチンから客間へと移動していつた。おそらく、リビングにいるオレ達に聞かれたくなかったのだろう。

「責められるの、判つてたんだ」

新島が立ち去つた後、彼女はゆつくりと口を開いた。また少しだけオレに近付き、彼女の右手とオレの左手を重ね合わせた。

「孝多は、リョウに心酔してたの。すこく憧れていたの。だから、孝多の世界は、リョウを中心にはまつてゐるの」

「だから、責められる?」

彼女は黙つて頷いた。明確に言葉にしてはいけないような気がしていた。

要するに蓮野がいながら、オレとつき合つてゐるようなティアスを、死の淵にいた蓮野からティアスを奪つたオレを、彼は責めていた。事実はそうではないにしても。いろんなことが、少しずつずれて、誤解が絡み合つてゐるけれど、それを説明も出来なかつたし、したくなかった。はつきりさせたら、多分オレは彼女の隣にいられない。自身の心と、周囲が許さない。いろんなことをずるいまま、隠しながら、だけど彼女が欲しいのだと。こうして身を寄せ合つていられるこの状況を逃したくない。

「心酔つて、すごいな。体育会系だな。でも、まあ、御浜みたいだ

つて言つてた理由、少しだけ判つた

御浜にもそう言つ、何か人を惹き付けるモノがある。判らないんだけど、大きな力みたいなモノを持つてる。全ての人に伝わらなくとも、数少なくとも、人を心から動かす何かを。

「責められても仕方ないんだ。だつて、応えられないのはどうしようもないし。私が中途半端だから」

応えられないって言うのは……。やっぱ、そう言つ話にはなつてたわけね。彼女は否定したくせに。だけど、応えてはいなつてことか? なのに、応えられないと言いながら、どうして芹さんはあの態度で、ティアスもこの態度なんだ?

「テツ、ピアノ弾いて? 歌うから」

肩越しに、上目遣いでオレを見つめる。

「え? ……いや、その……」

人前で今弾くのは……。だつて、弾けなかつたら困ると言つに。指が動かないかも知れないのに。確かに、こいつの前では動いたけど。正直、自信がない。

「こないだの。子守歌」

「弾くつて言つてないだろうが!」

「良いじやない。誰も聞いてないよ。私だけ」

「は?」

「私だけのために、弾いて?」

もしかして、甘えてる? そんなに可愛い顔されても困るんですけど。

ただ、甘えてはいたけれど、彼女が泣きそうな顔をしているのも判つた。真つ直ぐ顔を見たことで。

甘える程度に、彼女は辛いってことくらい、知つてゐ。気付きたくはなかつたけど。

今この状況で、不謹慎かも知れないとは思つたけれど。けど、オレは彼女に軽くキスをしてから立ち上がり、彼女の手を引いて、リビングの隅に置いてあるアップライトピアノに向かつた。

「ちょっと待て、指ならししてから」

横に立つ彼女にそう告げると、素直に頷いた。

多分、大丈夫。弾けるはず。

ゆつくりと練習曲を奏でる。思っていたよりすんなり指は動いた。いつも通りだつた。

逆に、何で1人になると弾けなくなるんだろう。

「テツ、何か必死だね」

この女は……まだ「けづけ」と「ひづけ」とを。

ちくしょう、判つてゐよ。図星刺されてるから、腹が立つてことくらい。

「別に?」

「あんまり、楽しそうじゃない。せつかく、綺麗なのに」

「……綺麗?」

「うん、テツのピアノ、綺麗よ。もつたいない」

誉めといて、けなすか? でも、佐伯さんとの話から、コイツがオレのピアノを誉めてたのはホントっぽいしな。

「好きよ」

「は?」

突然、何を言つかこの女は! オレが言えないで黙つてたことを簡単に! てか、告られてるし、これつて。

思わず、指も止まるつて。

「テツのピアノ」

「……ああ、そう」

うん。いや、そう言つオチ? 判つてたけど。1人でおたおたしてみつともない。まあ、実際好きとか嫌いとか言われても、それはそれで困るけど。嬉しいって言つのとは別にして。

「だから、もつたいないよ。そんなにつまらなやつに弾くの。つまらなく聞こえるから」

「お前が、楽しくしてくれるんだり? その実力、今こそ見せてもらおうじゃないの?」

彼女はやつと笑つた。オレのピアノに合わせて、歌い始める。

オレは勝手に弾いているだけだけど、彼女は合わせてくれていた。合わせてくれていたはずの彼女の音に、今度はオレも引き上げられる。

音の重なりが、体の芯に響く。その感覚が異常なほど気持ちよかつた。

オレだけかも知れないと、ちらつと彼女を見たら、彼女は泣いていた。歌いながら。

夕方「」り、仕方なく家に戻つたら御浜と秀一がキッチンに居座っていた。この家の人間は一体何をしてるんだと突つ込みたかつたが、それに加担してるのはオレなのでやめておいた。

「オヤジと柚乃は？お前ら、いつから居座つてる？しかも秀一がいるのに、飯もねえのか」

「冷蔵庫に入つてますよ。先輩はさつきちらつと顔を出して、私は留守を任していきました。あそこの研究室、今は相当忙しきらいですからね。その後、御浜が来たんですよ。柚乃はさつき出かけました。友達と約束があるとかで」

「家にはいなかつたんだ。どうしても秀一の言葉に返事が出来ず、黙つて椅子に座ると、見かねて補足してくれた。

「心配はしましたけど、何も言つてませんでしたよ？ただ、誰の家に泊まるかくらいは言つた方がいいかも知れませんね」

「新島の家だよ」

「オレ、結構連絡したのにな

責めるわけでもなく、せやへとつてひへやへとつて御浜。

「お前はオレの保護者か。たまたま出られなかつただけだよ。オヤジよりお前が心配してどうする。別に、て、電話に出ないのなんかいつものことじやねえか

「そりだね。たまたま、ちよつと心配だつただけで」

「なんだそれ

「何となくだよ。理由とか、よく判んないし」

どこまでオレのことを疑つてゐるのか、感づいてゐるのか。どう思つてゐるのか、掴みきれなかつた。ただ、妙な威圧感は持つてゐるんだ、

「イツは。

ただそれ以上に、彼に對して後ろ暗い気持ちでいたくないんだけれど。

『孝多は、リョウに心酔してたの。すく憧れていたの。だから、孝多の世界は、リョウを中心になまわつてゐるの』

そこまでじやなくとも、オレの世界の中心には御浜がいるような気がしてならない。憧れてるわけでも、心酔してゐるわけでもないけど。だけど、芹さんがオレを見たあの日で、オレはオレ自身を見てゐる。御浜から彼女を奪おうとしている自分自身を。奪うわけでも、奪いたいわけでもないけれど。

「ティアスからも、連絡無かつた?」

「……御浜が心配してゐるって言つてた

どうやつてかわして良いか判らなかつたけど、何もなかつたとい

うのは無理がある氣がした。彼女とは、そう言ひ意味での御浜の話は出来なかつた。

だけど、御浜とティアスつて一体どこまで、どんな話をしてるんだろう。

勝手にしろつて思いながら、裏切りたくないと願いながら、だけど彼女が欲しいと自覚してしまつた今、彼らの間の出来事が気に入る理由も明確になつて、肥大化して、オレを押しつぶしていた。

『刺されではいないみたいだけど……刺したつもりだよ』

本当は、全て知つてゐるのかも知れない、御浜は。だとしても、多分オレは驚かない。心は重くなるだらうけど。

「お前、ハスヤリョウヘイつて、知つてる?」

怖かつたけれど、いま立つてゐる場所を、オレは確認しておきたかつた。彼女と、オレと、御浜。それからこの死んだ男。距離感を。秀一がいるから、御浜と一人だけじゃなかつたから、少し安心していたのもある。これが真だつたら、とてもじやないけどこんな大胆な台詞は出てこない。

「?ティアスから聞いたことある」

やっぱ、そなんだ。予想はしてたけど、辛かつた。彼女がどういつもりか、掴みきれない。もしかしたら、愛里に振り回されてるときより酷いかも知れない。何でオレつてこうこう女ばかり選んでしまうんだろう。やっぱ真の言つ通りドMなのか?

「どんな人か聞いたことある?」

秀一は黙つて煙草を噴かしながら、オレと御浜を交互に眺めていた。御浜は真正面に座るオレを、ただ真つ直ぐに見ていたけど。

「うん。賢木先生と知り合つたのは、その人の仲介らしいよ? いま、日本で佐伯さんがバックアップしてくれてるよ? こ、向こうでは彼がしてくれてたって」

やつぱりな。

そう思うしかなかつた。オレが彼女のことを話題に出さないから。聞きたくなかつたから。聞こうとしても止めてたから、御浜は言わなかつただけで。予想以上に彼は彼女からいろいろな話を聞いていた。予想はしてたけど。その内容は鋭い針のようにオレを突き刺した。いや、知つてるものだとして、口にしなかつただけかも知れないけど。

彼女とオレは連絡を取つていても、オレが怖がつて踏み込んでなかつた。それを思い知らされる。

「御浜のこと、ちょっと似てるつて言つてた」

「この子に似てるんじゃ、相当天然ですね」

「何だよ、秀一は人のこと言えないし。でも、言われたよ? オレを見つると、ちょっと思い出すつて。今は入院してるつて聞いた」

オレが初めて知つたことを、彼はよく知つていた。オレには誤魔化しながら話したくな。

「今朝、芹孝多つて人が来た……らしいんだけど」

一緒にいたとは言えない。それは、言つちやダメだ。

「うん? その人も聞いたことある。向こうにいたんじゃ?」

「蓮野つて人が死んだのを、伝えに来たつて
「そなんだ……。泣いてた？ ティアス？」
「いや」

泣いてたけど。

「きつと泣いてるよ。大事な人だつたみたいだから。……そつか。
大変なときに連絡しちゃつたな」

申し訳なさそうな顔をする御浜は、泣いているであらう彼女を思
う。

なんだかやりきれなかつた。

御浜と彼女の距離も、蓮野と彼女の距離も、オレと彼女の距離な
んかよりずつとずつと近くて。それを、今、御浜に思い知らされて。
オレにだけ誤魔化す彼女に、怒りをぶつけてる自分が惨めだつた。

いろんなことがありすぎて、全然寝てないのに田がさえてしまつていた。だけど体がだるくて、リビングのピアノの前でぼんやりしていた。もう夜中になつて、秀一と御浜は帰つたあとだつたけれど。

秀一に確認したら、オヤジは普通に東京出張に行つていたらしい。それに安心して電話で彼にも確認をした。愛里の前に現れたのは、伯母さんに頼まれたからだということを。

愛里も意外となりふり構わずオヤジを追いかけているんだと思うと、少しおかしかつた。

彼女への思いは、以前と同じように抱いているのに、おかしいなんて思える自分がいることが不思議だつた。執着し続けていることは事実なのに。

「テツちゃん、まだ起きてたの？」

夜が明け始めたころ、柚乃が帰つてきた。リビングの電気がついていることを不審に思つて覗きに来たのだろう。扉を開け、声を掛けってきた。

「……今から寝よつと思つてた。オヤジがいないと思つて、また朝帰りかよ」

「テツちゃんなんて、パパがいても朝帰りじゃない。パパそつくり

「……お前つてさ」

自分の中に、何も見つけられなかつた。いろんなモノ抱えすぎて、

わけが判らなかつた。答えが出なかつたし、出したくなかった。
だけど、他のヤツが何を抱えてるか、気になつた。

「なんで、御浜のこと追つかけてんの? そりやつてふりふら遊びに出かけるかね? 男もいるんだろ、『じりせ』」

「テツちゃん、下世話ー」

「たまにまじめに聞いてんだから、応えりよ」

寝てないオレの田つきが怖かつたのか、柚乃は言葉を詰まらせた。
だけど、扉からコレクシングに入らうとはしなかつた。

「ひしきないよー。やつはいつ」と、見ないフリする人だと思つてた

「つひの妹は、やつぱり手厳しい。そんな風に思つてたわけね。

「まあ、面倒だけど。参考までに」

「何よ、参考つて。何かあつた?」

「別に、良いから」

しつこにな、とほやきながらも、彼女はちょっとだけ怒つたような口調で応えた。

「どうしようもない」とつて、あるでしょ? 御浜さんて、ティアスのこと好きだし。そ�だとは言わないけど。だからつて、簡単にあきらめるのも出来ないし。だけど、それだけだと私、ティアスのこと恨んじやうからさ。の人自身は嫌いじゃないのに。どうしようもないのよ」

「だから遊ぶんだ?」

「暗くなるのがいやなだけ。何もかも、綺麗にその通り、次から次へと切り替えられたら、楽チンだと思つけど、出来ないんだもん、

仕方ないじゃない。そういう強い人、私はむかつくな？誤魔化して
何が悪いの？

「開き直りか？」

「うん。でも、御浜さんなら許してくれる気がする」

それは、やつぱり端から聞いていても、御浜といつ人間に甘えて
いる気がする。でも、彼女はそれで良いじゃないかといつ。

「例えば、オレが同じ口をしていたとしたら？」

「仕方ないんじゃない？」

するい気もするけど、納得できてしまったのは、自分に甘いから
だろう。オレも、彼女も。少しだけ眠るつと思つた。眠つたら、また彼女に連絡しよつ。

愛里がいなかつたのもあつたかもしれない。

結局クリスマスのあの日以来、彼女はいつものようにじこかへ旅
立つたらしい。オヤジが伯母さんからそう聞いていたようだ。冬休
みの間、彼女とは連絡を取ることもないのだろう。現実の彼女を目
にすることとはなかつた。

おそらく、だからなんだらう。自分でも驚くくらい、自分の中で
ティアスとの距離が縮まつていいくのを自覚していた。ただ、あくま
でもオレの中でだけなのだけれど。

オレの中でだけ済ませたくない、自分でも驚くくらい、必死に
彼女と連絡を取つた。いままでも、ほほ毎日連絡だけはとつていた
けれど、なるべく会つようになつた。

お互に言葉にはしなかつた。だけど、縮んでいく距離がオレの

錯覚だとは思えなかつた。彼女が隣にいることに、違和感がなかつた。

ただ御浜の前で、彼女と一緒にいることだけが辛かつた。辛いつて判つてゐるくせに、そのことに困つてゐるくせに、それでも彼女への連絡をやめるどころか増やしていく。そんな自分のことを罵る自分がいるくせに、もつどうしようもない自分がいるのも辛かつた。ティアスもまた、御浜とは距離が近い。彼の距離の取り方なら当然の結果だろう。真がさりげなく、御浜の背中を押しているのも知つてゐる。

だけど、誰かと誰かの関係とか、思惑とか、そんなものより、自分が遙かにぐちやぐちやだつた。

新学期が始まり、休みが違うから帰つてこないと判つてゐるのに、いつものようにいつものスタバの喫煙席で、彼女を待ち続けている自分自身がよく判らなかつた。

「テツ、何してゐるの？ 今日はレッスンなの？」

当たり前のようすにオレの隣に座つたのはティアスだつた。あからさまに驚いた顔を見せてしまつたけど……。

「なによ、嫌そうな顔」

「いや、別にそう言つわけじゃ……」

「佐藤さんとの仲なんて、邪魔しないわよ」

なんだそれ。嫉妬か？ よもや。むつとした顔で立ち去り立つとするティアスの腰を掴み、引き留め、座り直させた。

「何でそつ喧嘩腰だ、お前は。早とちりだし」

「だつて」

「驚いただけだらうが。お前、こんな所に来るなんて珍しいから

体に触れたことになのか、オレの言葉になのか、彼女は照れた顔を見せながら上目遣いでオレを見つめた。

「大学はまだ休みだから、愛里はそれまで帰つてこないし。つーか、連絡すらねえ。無責任だ」

「先生なのにな」

椅子を寄せたら、ステンレスの足が床に引っかかって大きな音が立つた。それが少しだけ恥ずかしかったが、テーブルを見つめながら彼女と膝をつき合わせた。彼女もその行為に微かに笑みを浮かべた。それに少しだけ満たされる。

「ここにいるのは何というか……日課つづーか……。うちにいると、

大抵誰かいて集中できないから」

「ここだつて、佐藤さんが来るのに」

「まあ、待たされるからな、いつも。そのつもりで来てるし」

「何してんの？ 待つてる間」

「大抵、楽譜読んでる」

照れくさそうな顔を見せるくせに、彼女はオレをじつと見つめる。

そのくせ、こちらから見つめ返すと目を逸らす。

もちろん、今日もだつた。見つめたくせに、それに気付いたオレが彼女を見ると、急いで目を逸らす。

「邪魔しちゃつたかな？」

「別に。御浜や真や新島だつて、オレが大抵ここにいるのを知つてるから、たまに来るし……」

「酷い！ 裏切り者！！ 沢田だけは違うって信じてたのに！」

「……相原とか……意味わからんねえし」

オレ達の向かいに、いつの間にか相原が座つて、叫ぶように文句を言つていた。突然責められても、本気で意味が判らん。

「傷心のオレをほつといて、いつの間にかこんなに可愛い彼女が！」

思わず、ティアスを見る。端から見たら可愛い彼女か……。相原が来たつついのに、オレも彼女も距離をとろうともしないし、誤解されてもおかしくない。むしろ、なし崩し的にこのままつき合つて言つのも有りなのでは。いろいろ面倒だけだ。

「彼女？」

「いや、つき合つてんでしょう？ 君ひり？」

「え？ 違いますよ」

あつさつ否定か！ この女！！

「沢田、紹介して！ つき合つてないなら！」

そしてこの男も！ なんだその変わり身。ティアスがオレの女じやないと判つた途端、射程範囲に入れやがつて。わからんでもないけど。今までの相原の傾向からして、ティアスつてど真ん中だしな。しかも、イブにふられたばっからしいし……。不愉快だけど、紹介しないわけにもいかねえか。簡単に否定されてるしな……。

「相原勇十です。沢田のクラスメイトで……」

紹介する必要ねえし。勝手に始めちゃつてるし。アグレッシブだ

な（女子に關してのみ）。

「だつたら、灯路とも一緒つて」と？」

相原が話してんのに、オレに確認をするティアスに、仕方なく頷いてみせる。どういうつもりなんだ、この女は。確かに、オレに同じ口を突つ込まれても、肯定も否定も出来ないし、したくないけど。

「とーじ？ ああ、なに？ 新島も知り合いなの？」

「新島だけじゃなく、真も知ってるし。つーか元々、新島経由で知り合つてんだよ。新島の従姉妹なんだ。ちなみに、こんなナリしてるけど、オレらのイッコ上ね、コイッ」

顔も見ずに、指をさしたら、さすがに怒り出した。

「こんなつて何よ！」

相原の前にも関わらず、彼女は怒鳴り、オレだけを見ている。

「見たまんまだろ？ 童顔つづーか。初めて見たとき、絶対年下だと思つてたし」

「自分は老けてるくせに」

「うるせえな。良いんだよ。オレは年を取つたら若く見えることが、オヤジで実証されてるから」

「判んないわよ？ 案外、年を取つたら、先生とは違う顔になるかも」

「沢田ー紹介してー！」

だだをこねたような顔でオレ達に訴える相原を、さすがに無視できなくて彼女を紹介する。と言つても、名前だけだけど。

「良く来るの？」

行動範囲の調査か。結構突っ込んでくるな、相原は。
そういうや、何でティアスはここに来たんだ？ いることを知らなかつたオレに会いに来たとも思えないし。そもそも、会いに来るなら、先に連絡してくるし。

「ううん。今日はたまたま。下見に来ただけ。でも、これからは来ようかな」

相原を見ながら微笑む彼女は、テーブルの下でこっそり、オレの膝に手を重ねた。

02

「下見つて？」

相原の質問責めは続く。オレが聞かずにするから、実はありがたがつたりするけど。興味なさそうな顔をしながらも、聞くことはきつちり聞いとかんとな。

「今度、ここで歌つの。だから、その下見」

「それ、昼か？」

「ううん。夜だけど。でも、7時くらいかな」

そりや良かつた。こんな所で、そんなチャンスをもらつてるなんて愛里が知つたら、またいちやもんつけかねん。佐伯佳奈子がバツクにいる話や、音無悠佳とも何かありそうな話なんか絶対出来ねえ

な。

まあ、する事もないだろうけど。

「歌う？ 歌手？ アイドルとか？」

「アイドルで……。確かに、顔は相当可愛いけど。でも、それを聞きながら珈琲飲むのはちょっと勘弁かも……。」

「違うよ。ジャズなの。この間、紹介してもらったジャズピアニストの人が、ミニライブをするから、一曲だけゲストで私も出るの」

ジャズか……。音無さんと佐伯さん、どうし経由かな？いや、そもそも音無さんと連絡はとつてるとか？ほとんど話を聞かないけど。間を取り持ってくれるのは賢木先生なのか、それとも投げられっぱなしなのか。オレはオレで、オヤジに聞くことも出来ないけど。

そう言えば、佐伯さんはオレとティアスが一緒に舞台に立つことを推してたな。正直、そんなすごいこと出来るとは思えないけど、ちょっとだけ憧れるかな。簡単に舞台に立つ彼女を見てると。

オレも、なんだかんだ言って、コイツに嫉妬してるのかもしねない。

思わず、オレの膝に乗せられた彼女の手を強く握ってしまった。微かに彼女の顔が歪んだけれど、何食わぬ顔をし続けた。

「ジャズ以外も、何度かライブやつてるよな」

彼女の方を向いてそう言つたら、何故か顔を赤らめ、黙つて頷いた。

「えー何だよ。沢田は見てんのかよ。誘えよな」

「新島に言えよ。オレはたまたまだつづーの」

「今度やるときはオレも呼んで。絶対見に行くから。」
「いややるのもや。どうせ沢田は平日はレッスンとか言つてつまらぬ悪いしゃ。」
「携帯、教えてよ」

軽いなあ……。早いよ、番号聞くの。ティアスも教えちゃつてるし。アグレッシブと言つが何というか。

「陽向さん、依藤さんいらっしゃりますよ」

「あ、ありがとうございます。テツ、私ちょっと行つて来るね」

店長に呼ばれ、立ち上がる。一瞬、オレに手を伸ばしかけたが、やめて店内に入つていつた。

「ヒナタ？ あの子、ティアスじゃないの？」

「陽向は日本での名字だつてよ。何か説明聞いたけど、よく判らん。何つってたかな。パスポートを見せてもらつたんだけど、『陽向ティアスるい』とか何とか書いてあつた気がする。本人がティアスだつつってんだから、それで良くない？」

「ふうん。日本人ってほい顔だと思つたんだけど……」

知らん」

「そなんだ。てっきりつき合ってんのかと」

しつこいな。あんまり突っ込むなよ、面倒なこと。

「そんな風に見えなかつたけど。でも、良いねあの子。オレ、ああいう子、好みだな。佐藤さん見に来たけど、楽しみが増えたかも。

佐藤さんは？

「顔が良ければ何でも良いのか、お前は」

「そう言うわけでもないけど。せっかく身近に好みの顔がいるから。目の保養だよ。沢田だって、クリスマスに女といるような真似してるくせに、硬派ぶつたつて遅いって」

「いなーって。誤解だらうが」

別にぶつてるわけではないんだが……。硬派でも何でもないし。何かオレを誤解してるな、この男は。他のヤツも似たり寄つたりだけど。

いいか。この様子だと、ティアスの顔に興味はあるみたいだけど、それ以上でもないみたいだし。相原は結構判りやすいからな、そう言うとこ。愛里のことも「可愛い」ばかりで、別に何をするわけでもなかつたし。

「ホントに何にもない？男付きは、ちょっとな。あわよくばつて言う妄想の邪魔になるし」

「妄想つて……。何にもないつづーの。本人がそう言つてただろうが。大体。あの女と知り合つたのだって、12月の頭くらいだし。まだ一ヶ月しか経つてない」

そう言つて、そんなに短い時間だつたことに自分でも驚いた。

「ふうん」

相原は、何だか納得のいかない、と言つた顔をしていた。知らない顔して珈琲を飲んで見せたが、中身が既に空っぽだつたことに気付いて、バツが悪かつた。

「そういうや、沢田はこいつで弾いたりしないのか？あの子、知り合いなら、紹介してもらつたりとか……」

「……あんまり、そう言うのは……」

なんと返して良いのか。だけど、どうしても素朴な疑問をぶつけているだけの相原の顔を見ることが出来なかつた。

「でも、クラシックやつてるやつて、発表会とかコンクールとか子供のころから出たりするんじゃねえの？」

「オレは、そんなには……。ピアノはやつてるけど、別にこの道に進むと決めたわけじゃ……」

しじるもじるでしか答えられない、自分がみつともなかつた。こんな大事なことなのに。

「だよなあ。受験も狭き門だつて言つし。佐藤さんの行つてる大学なんて、めっちゃ人数少ないだろ？やつぱ堅実に生きるのが一番だよなあ」

相原の言つことわ、もつともだつた。よく判るけど。

「よし。じゃ、オレもつ行くわ。彼女によるしぐ」

立ち上がり、ホールを羽織りながら笑顔を見せた。

「ホントに愛里の顔見に来ただけか。わざわざこんな所に来ないで、さつさと新しい女でも作ればいいじゃねえか」

「だから今から、畠中主宰のコン 収かいのカラオケでやるからさ、レッスン無いなら沢田も来れば？あの子連れて」

「いや、良い。レッスン無くとも、愛里から課題出でるし」

「そりなんだ。……変なの。あ、陽向さん。オレ帰るけど、またよろしくね」

店内入口に向かう相原と入れ替わりで、ティアスが戻ってきた。

「ティアスで良いよ。またね、相原くん。ライブの時間が決まったら教えるからね」

「手を振りあう」一人を、オレはかなり不愉快な顔をしながら眺めていたに違いない。眉間の皺が跡になつて残りそうだった。

「どうしたの？怖い顔」

「生まれつきだ」

じつと、立つたままの彼女を見つめるオレの視線が照れくさかつたのか、そそくさとオレの隣に座つて視界から逃れようとした。隣に座るなら、直に触れるだけだけれど。

「……お前、今日は暇？」

彼女がしたように、オレも彼女の膝に手を乗せた。

「依藤さんと打ち合わせがあるけど、この後30分くらい」「その後は？」

オレが彼女をじつと見てることに気が付いて、真っ赤になりながら首を横に振った。

どう考へても、オレに気があるように見えるんだけどな。全否定されたけど。

「お前の部屋に行くけど、良い？」

俯いたように、黙つて首を縦に振った。ストレートすぎて、オレ

が恥ずかしい。

「ピアノ……」

「ピアノ?」

俯いたままの彼女の声がよく聞こえず、顔を近付ける。ますます顔を熱くする彼女に、オレもつられる。あくまでつられただと思う。

「ピアノを弾きに来るなら、良いよ?」

「判った」

とは言つたものの、多分オレの顔は相当強張つていただろ。正直、クリスマス以来、彼女の前でピアノを弾いていない。もちろん、御浜の前でも。それどころか、一人だとまた弾けなくなつてしまつていて。何とか、愛里が戻つてくるまでに弾けるようになつておかないといけないのに……。

「何で、ピアノ?」

「いつぞ、ティアスには弾けないことを……。」

「テツのピアノ、聞きたい。こないだ家に来たとき、弾いてくれたの、すごく良かつたから」

言えない。こんな風に言つてくれるのに。

だつたら、御浜に……。

いや、それもない。あいつは心配してくれてるし、微かだけど気付いているからこそ、これ以上心配をかけたくない。それに、今はあまりあいつと突つ込んだ話をしたくない。ティアスのこともある

し。何か彼に責められたら、オレが何もかも悪いような気さえする。彼が責めることはないのだろうけど。

何だろう、こうこうのを八方塞がりとか言つんだろうな。なるようになれとも思えない自分の弱さが情けない。

「テツ！それにティアスも。あれ？今日はレッスン無いって言つてなかつたつけ？」

「何というタイミング。御浜が珍しく、秀一と一緒にラーテを片手にこんな場所に。」

「無いよ。今日はやたら人に会つ日だな。それにしても……その力ツブ、似合わんな、秀一」

御浜と田は会わせられなかつた。隣に座る彼女から、少しづつ距離をとつてしまつていた。

「余計なお世話ですよ。どいつもコイツも、私のこと、幾つだと思つてゐるんでしょうなーこんなでかい息子がいるわけもないのに！」

「……なんか、不機嫌ね、ショウジさん」

隣に座つた御浜に、ティアスが田配せをした。たつたそれだけのことだが、酷く引っかかる。

「いや……今日さ、進路相談があつて。親を呼んでこいつて言つんだけど、うちの父親、いま調子悪いから、秀一に来てもらつたんだ」

私立だからか、御浜の高校はそんなコトしてゐるんだな。うちはなくて良かつた。ホントに良かつた。

「もつ随分年だもんな。最近、会わないけど」

親子と言つよりは、祖父と孫くらい年が離れてるからな。定年間近にやつと出来た子供だつて聞いてるし。そもそも30近い秀一が、御浜の甥だつて言つんだから。調子が悪いつのは聞いてたし、外に出てくる姿をあまり見かけなくなつたけど。

「あ、でも、おじさんや覚さんや佐和さん達も来てくれるし、父さん自体は大丈夫なんだけど……。秀一がね」

「言つに事欠いて、この子の担任と来たら、私のことを父親だなんて言つんですよ！？全く、最近の若い教師ときたら、人を見る目がないませんね」

……長くなりそうだな。ティアスも御浜も苦笑いしてゐる。

「どうせ大卒1年目とかだろ？そんなんから見たら、30も40も一緒だろ？大体、お前は老けて見えるし」

「あなたの発言の方がよっぽど老けています！何ですか、まだ10代だつて言つのに、その人生に疲れ切つたような態度は」

「……えつと……私、打ち合わせあるから……また……」

説教が始まると知つて、逃げたな。まあ、人を待たせる羽目になるから、正しい選択だけど。ずるいな。

「また？」

ぐどぐどと文句を言い続ける秀一を後日に、御浜がオレに疑問をぶつける。その意味を、オレは計り知りうとして、怖くなつてやめた。

「また今度、つてことじゅねえの？何か、ここでライブやるつて、一曲だけ。さつきまで、同じクラスのヤツも一緒にだつたから、営業してた。今日は下見に来たんだと」

そこまで言つて、先手を打ちすぎたかもしれないと反省をした。だって、どうしても彼の顔を見ることが出来ないし、何か彼女に絡んだことを言われるたびに心臓が痛い。御浜はたつた一言言つただけなのに、過剰反応かもしれないけど。

説教を続ける秀一の声の方がはるかに大きいのに、オレは、御浜の息づかいまではつきりと聞こえそうなほど、彼の一拳一動に意識を向けていた。

「やうなんだ。レッスン無いつて言つてたから、つつきり？」

弱気になつちゃいけない。嘘をつくときは、自信を持たないと。そうは思つてゐるけど、強気になりきれない自分がいた。必死に取り繕つていふことがばれないと良いけど。

「あ、いや。昨日ティアスに会つたとき、テツの話がよく出てたから、会いたかったのかな、つて思つて」

搖ゆぶられる。彼の一言に、こんなに簡単に。

昨日、夜まで彼女と連絡が取れなかつたと思つたら、会つてたんだ。

彼にどうしようもなく嫉妬してるのは判つてゐるけど。だけばどうして良いのか、どうしたいのか、オレには判らなかつた。

御浜達は「報告兼ねて、父親に顔を見せる」と言つて、30分ほどで戻つていった。それと入れ替えてティアスが戻ってきたが、さつきまでのように彼女に迫ろうとは思えなかつた。

御浜の態度と思いが、オレに重くのしかかる。

オレの記憶の限りでは、御浜が自分から女に対して動いたことつて無かつたような気がする。それが、あんな風になるもんなんだなつて思うと、少しだけ怖かつた。

彼女は何を考えているのか、オレの隣でオレの表情を、少し強張つた表情で伺つていた。

「そろそろ、うちに来る？ 今日はなにで来てるの？ バス？」

彼女の誘いにもうまく答えられずに、ただ黙つて頷いた。辺りが微かに暗くなつていてことと寒くなつてきたことを、彼女は気にしていた。

「行こつよ」

オレの手を引き、立ち上がらせる。その手をオレも握り返す。彼女の態度が、行動が、期待を膨らませる。あの夜から、それ以前から続く小さなやりとりの積み重ねと共に、何度も無く期待と失望を繰り返したあげく、結局甘い方へ流される。

結局、この女が何を考えてるのかなんて、オレは判っちゃいないのに。御浜のことも蓮野とか言つ男のことも。大体、さつきの相原への態度だつて何だ。

同じコトの繰り返しだ。あの夜もそつだつた。彼女の態度に、彼女の過去に、オレは愛里を思いだし、愛里と比べていた。愛里も、簡単にオレの手を取り、こうして引っ張る。

『 テツ、靴を脱がせて。痛いのよ』

簡単に人に甘えるくせに、彼女はただ真っ直ぐにオヤジだけを見ている。

目の前の、オレの手を引く女だつて、本当は誰を見てるかなんて判らないのに。

「 テツが、来るつて言つたんでしょ？ それとも、一回家に戻る？」

だから、連れてくつてこと？ オレの誘いに乗るつもりはあるつてこと？

「いや、いいよ」

「じゃ、地下鉄に乗ろつか？」

彼女が、店に面している道路の方を指をした。バス停が目の前にあるからここには良く来るけれど、目の前にある市営地下鉄に直結してる駅はあまり使わないから、その存在が未だに不思議だつた。

「タクシーばかり使つてるかと思つた。まともにバスとか乗れないし」

手をつないだまま、一旦店内に戻り、スタバの入つているショッピングセンター内のエスカレーターを使って一階に上がる。一階のレストラン街の奥に、駅に直結する陸橋への入口があつた。ここに来ても、一階の外にあるスタバにばかりいるから、こんな風になつてゐるのも知らなかつた。

「バスは普段使わないからよ。この路線なら大学にもつながつてゐる

し

「そういうや、賢木先生から連絡は来た？」

「全然。いいかげんよね、ホント。大学に行つたら、20日くらいまで冬休みだつて書いてあつた」

彼女は券売機の前で、行き先の駅を指さしながらぼやいていた。そう言えばオレも地下鉄で彼女の部屋まで行くのは初めてだな、なんてことと、20日まで愛里は戻つてこないんだろうなつてことを交互に考えていた。戻つてこないことに対する、少しだけ寂しくもあり、少しだけほつとしていた部分もあつた。

キップを買ううときには、オレからつなぎ直してホームに入る。少し照れたように、だけど微笑む彼女の姿を見て、一瞬だけ愛里のことも、他の全ての煩わしいことも飛んでいったような気がした。

だけど、端から見たらオレ達はどんな風に見えるんだろう、なんて考えたら、再び少しだけ気が重くなつた。誰かに見られたら何て言おう、とか考えてしまつ。特に、相原みたいなヤツに見られたら。

だけど、彼女の手を離せないオレは、やつぱりずるい。

びくびくしながら、彼女の隣に座るオレに、彼女も気付いてる。奢められながらも、誰にも見られないことを願いながら駅に着くまでの時間を、少し上の空で彼女と過ごした。奢めるけれど、責めはしなかつた彼女に感謝しながら。

彼女の部屋の最寄り駅に一人で降りた。ここで、電車の中から彼女を見送つたことはあっても、一緒に降りたのは初めてだつた。東山線がこの駅から地下に入る。なので、一人で手をつないだまま階段を昇り、地上に上がる。

「ちょっとあるけど、良い？」

「ちょっとつてほどのないだろ？オレは平氣だけど。お前、もしかしていつも歩いて来てんの？」

年末にタクシーで向かった感じでは、それなりに距離があつたと思つたけど。夜中に一人で歩かせるのは危ない程度には。

「自転車だよ。カナが『バイク買つてあげる』って言つてくれたんだけど、免許持つてないし。取りに行つていい？」

黙つて頷くと、彼女はオレを自転車置場の方へ引っ張つた。

それにしても佐伯さん……甘やかしすぎだろ、それは。コイツはよつぽど目をかけられてるんだな。佐伯さんのバックアップのおかげで、頻繁にライブにもゲスト出演してるみたいだし。確かに魅力的ではあるけれど、そこまで？そもそも、あんなスゴイ部屋を提供してるものおかしな話だし（元々隠れ家だつたつーのは別として）さすがに生活費に関しては、最近やつとバイトし始めて稼いでるみたいだけど。何か、甘つたれてる印象が拭えないんだよな。

そう言つヤツ、オレは嫌いなはずなのに（人のことは言えないけど）。何で疑問を持ちながらも、その事実に少しだけ目をつぶろうとしているのか。

「なに？」

自転車置き場の入口で、彼女はオレから手を離し、自転車を取りに走つた。聞いておきながら、答えを待たずして走るか？お前は……。

「何つて、何？」

「何か、また怒つてたから」

自転車を引いた。しかし、彼は、いつまでも止まらなかった感じでそう言った。

「別に怒つてない。元々、この、この顔だ。何度も言わせるな」「ふう」と

納得いくでないといった顔で、再びオレの横に並んだ。以前なら口うるさい騎みつこしてきたんだけど、おとなしくもんだ。調子が狂うけど。

「それより自転車。オレが漕いでやるから、お前は後ろに乗れ」

彼女から自転車を奪つて、ひきつけた。指示をする。

「何で、いちいち命令口調なのよ」

不愉快そうに言つながらも、彼女はそれにおとなしく従つ。やはり、調子が狂うけど、良い傾向なかも、とも思つ。

荷台に座り、ペダルを漕ぎ始めるオレの腰に手をまわした。

「テツつて、ちゃんと体を鍛えてるつて聞いた。しかも、田舎流。体育の成績も、いいんでしょう？珍しいよね？」

人の腰を撫でながら、何を言つ出すかと思つたら、興味本位でやつてるのかもしかんが、ちょっとやばいぞ、それ。運転できなくなつたらどうする。

「別に。ふつづく。だれが言つてんだそんなこと」「えー。御浜と秀一ちゃん。あと、真も言つてた」

あいつら、余計なこと言つてんな。もう、オレの知らない所で誰に会つてるとか、考えない方がいいのか？彼女がこういうことをあつさりとオレに言つてことは、気にしてないつてことなのか、オレの扱いがその程度なのか……。わからんな。

「テツの行つてる所つて、あんまり芸術の方には力を入れてないつて聞いたよ？」

「そりだらうな。音楽も美術も、芸術学部だと年に一人が一人出れば良いとこだな。クラスのヤツで『美術はフォローできない』ってはつきり言つてたヤツもいたらしいし。大体、1年で授業自体終わるからな、音楽も美術も」

「何で、今の高校選んだの？」

「音大の受験とか、考えてなかつたし」

「へえ、なんて言いながらオレの背中にもたれる。判らないとか言つてる自分がバカみたいだ。」

「でもピアノ弾いてるし？運動部とかは考えなかつたの？部活は？」
「オレ、あの体育会系の氣質が合わないの。絶対いや。先輩見るたび挨拶とか、あり得ないし。暑苦しい」

「……判る気がする。絶対先輩に噛みつくか、むつとしてそつ」

「どんなイメージだ。失礼な」

運動と勉強が出来ればモテるのは、中学生までだらうが。これでも評判はいいんだけどな（女子にのみ）。……ティアスには言わなければ

いけど。

「公立で、家から通えて、行ける範囲で一番レベルが高かつた。立

派な理由だろ？」

「んー……そりか。何で御浜は同じ高校に行かなかつたのかな？」

「いや、単純に受験戦争が……まあいや」

同じ高校は受けたんだけど、単純に落っこちたんだよな。まあ、ティアスにそうとは言えないか、御浜も真も。秀一辺りはさうりと言つた上に、説教しそうだけど。勉強も運動も出来なかつたんだよな、御浜は。今はどうか知らないけど、中学時代は。中の下つて所か。結構、手伝つたんだけどな。

「テツは一緒に何うとは考えなかつたの？」

「そう言つ話をしてるのかな？御浜とは。いや、真とかもしれないし。一人きりじゃなければ、もつ仕方ないのかも知れないけど。

「いや、でも……私立はな。金かかるし。出来れば避けたかった」

オヤジは「好きにしろ」って言つてたけど、正直、既に一人私立に行つてるしな。それで、また下手に伯母さんに何か言われてもめんどくさいし。子供心にいい気分じゃない。

でもまあ、明確ではないにしても、彼女の存在が、オレにも柚乃にも反抗期らしい反抗期を与えなかつた氣もするし。父子家庭で反抗期だなんて、オレの想像力じゃ、結構悲惨なことしか思いつかない。

「柚乃は私立じゃない」

「あれは、母親が行つてた学校に、幼稚園のこりから通つてるつつ一だけだつて。むしろ伯母さんがそれを全面的に推してたし。愛里も行つてたからって」

また、へえ、なんて氣のない返事をしたけれど、今度は声に妙な威圧感があつて怖かつた。もしかして、愛里の名前を出したからか？

「あ、テツ、そこ曲がって！近道なの」

機嫌が悪くなつたのかと思つたけど、それでもなかつたらしい。道案内した声の明るさに、胸をなで下ろす。

彼女の誘導で、マンションの駐輪場に自転車をしまい、一緒に部屋に向かう。けれど、エレベーターに乗つてからは、彼女はオレの手を取ろうとも、触れようともしなかつた。やっぱり機嫌が悪いのか？

「ただいま」

一いつこいでいるはずの鍵を一つだけ開け、彼女は中に声をかけた。

「お帰りついで……サワダ？！」

中から現れたのは、私服に着替えた新島だった。その後ろには芹さんもついてきていた。

そう言つこと？だからオレを簡単に部屋に入れたのか？つーか、いぐりなんでもこの生活はないだろ。仲良くとも、男一人と同じ部屋……。

「テツはピアノを弾きに来ただけよ。変な顔しないで」

……んなわけないし……。先に上がつてからオレに上がるよう促し、通りすがりにおっさんの顔を見せる新島の胸をこづいた。芹さんの顔は見なかつたけれど。

「お前……、何してんだよ」

新島と、その後ろから無言でついてくる芹さんと3人で、リビングに向かう羽目になってしまった。リビングの壁には新島の制服がかけてあった。

話を聞いたと思つていたティアスは、着替えると言つて、やつと奥の部屋に入ってしまった。

「いや、今日はカナさん来るから。大体、それはこいつちの台詞だろうが。彼女の部屋で彼女と会つて何が悪い？」

確かに。ここはティアスの部屋じゃなくて、佐伯さんの部屋だけだ……。それにしては、何で芹さんまで。そして当たり前のように芹さんは床のクッションに座り、新島がソファに座る。なんだこの力関係。当たり前のように、オレにもソファを勧めてくるけど。

「孝多は……その……。まあ、座れよ。孝多も黙つてないで、な？」

「沢田くんは、結局彼女と……」

「お前は口開けばそれしかないのか。黙つてろー！」

喋れつて言つたの、新島だし。

「あの……」

「未だ何か言つか？」

一瞬、身を震わせたのが判つたが、芹さんはオレを真つ直ぐ見て続けた。

「あの、沢田先生と賢木先生から連絡が来て……。あと、和喜さんからも。話、繋いでもらつて……」

和喜さんて、たしかオヤジと賢木先生の話の中でたまに出てくる

人だ。その人も蓮野遼平とつながってたんだ。

「みなさん忙しそうだつたんですけど、一度ベルギーの方に行つてくれるつて……言つてくださつて。オレにまでわざわざ。ありがとうございます」

「いや。……父も気にかけてたみたいですし」

自分のこと見たく、頭下げちゃつて。確かに「心醉」つて言葉が似合う感じだな。ちょっと疲れる。それにしてもオヤジ達、芹さんにもちゃんと連絡してたんだな。何も言わないから知らなかつた。オレが蓮野のことを報告して、芹さんの連絡先とティアスから預かつてた諸々の連絡先を教えたときは、多少驚いた顔は見せて、そんなことは言つてなかつたのに。そもそも、賢木先生なんか、未だ日本に戻つてきてないし。

「……音無さんは？ 賢木先生ともつながつてゐるなら、あの人とも……」

彼女が入つた扉をちらつと見てから、芹さんに確認する。

「さあ。聞いてないですけど。ティアスも連絡とひつとしたら、出来なくなつたつて怒つてましたし」

「知らない名前がいつぱい出でてくるな。オレにも判るよつて説明しろよ、孝多」

「よく話してるだろ？ 灯路つてバカなのか賢いのか判らないよね」

「……言われたくねえ……」

芹さんのその意見には同意するけど。新島の頃垂れつぶりは尋常じゃなかつた。

それにもしても、この様子だと結局、音無さんとは連絡とれてない

みたいだな。彼女は一体、あの人に何の用があるんだろ。

04

着替えると言つていたはずの彼女だったが、コートとセーターを脱いで、Tシャツで出てきただけだった。

当たり前のようにオレの右手側に当たる、ソファのアームに腰掛けた。

「灯路、力ナは何時頃来るの？」

「さあ？ 今夜来るとは言つてたけど、あれから連絡ないし。移動中じやねえのかな？ 今日は大阪だって言つてたし」

……佐伯さんが来るのは判つたけど、芹さんは何でここにいる？いや、悪い人じやないんだけどさ。ちょっと瞞みつかれてるだけだろ？ オレは、ティアスのことで、妙な疑いを持たれてるだけで。よく考えたら、何でオレばっかりそんな目で見られるんだ？ 他にもいるだろうが。知らないだけなのか？ さつき礼を言つたその口は紡いだまま、またじつとオレを見てるし。

「あ、力ナさんだ。もしもし？」

いつものように雨に唄えばのメロディを奏でる携帯をとり、新島はオレ達から距離をとるためにキツチンに向かつた。できれば、芹さんをコントロールしといて欲しいんですけど。

「テツ、ピアノ弾いてよ。一曲弾いたら、出かけよつか」「出かける？」

彼女がリビングの隅にある例の小さなピアノを指さすが、オレは動く気になれなかつた。

「うん。カナ、もつね駅に着いてると困る。灯路に電話していくつてことは。だから、カナが来る前に出てこいつ？カナが来たときここにいたら、止められちやうか？」

「まあ、あの人らに気を使ひるのは判るけど……それで良いのか？お前、佐伯さんとは？」

お前のプロデューサーでもあるわけだろ？彼女は

「良いの良いの。私に用があるときせ、私にかけてくるから。カナはその辺、ちゃんと線を引いてるよ。灯路と私が一緒にいるのを知つても、みんなで会つても」

「ふうん。一緒にいるなら、つながりやすい方でいい気がするけどな。いつ来るのか聞くくらうなら」

「カナの、灯路への気遣いよ」

……新島のプライドを、そんなことで守つてるとでも？端から見てる分には、彼は振り回されていくようにしか見えないけれど。オレはそんなのは嫌だけ。

嫌だけど、振り回されてるのか、オレも。

「何よ、怖い顔して。睨まないでよ」

ソファから離れようとしないオレの手を引き、立ち上がらせた。お前も愛里も、オレのことを振り回すくせに。振り回されるオレが悪いのか？なんでそういうことを簡単に出来るんだ。芹さんの前で、オレの手を取るなんて。

ちらつと芹さんを確認したけれど、睨まれてはいなかつた。見つ

められてはいたけれど。

「待つてて、楽譜持つてくるから」

彼女は無理矢理オレをピアノの前に座らせとおいて、奥の寝室に戻ってしまった。

「やっぱ、仲良いんですね？」

彼女がいなくなつた途端、芹さんはオレに声をかけた。

「……そつ見えますかね」

背中から視線を感じる……。ものすつゝく見てるよ。保護者か？それとも、蓮野のことを口にしながらも、実はティアスのことを狙つてるんじやねえのか？

「でも……うーん。白神くんといふときは、蓮野さんといふときは、たいだつたから。彼との方が仲良く見えたかな」

ちよつと待て、いつ御浜と会つたんだ、この人！？オレ、かなり頑張つてティアスと会つてたぞ、この2週間。この人単独で御浜と会つてコトは考えにくいやつ……。昨日か？

思わず、芹さんの方を向いてしまつた。オレは相当嫌な顔をしていただらつて、彼は特に気にすることなく笑顔のまま答えた

「そつ言えば、幼馴染みだつて聞いてます。一緒にいた、背の高い

……

「泉 真？」

「あ、そうですそつです。彼がそつとつてました」

真の策略か。気にするなと思つても、気になつてしまつし、気にしてしまう自分も嫌で仕方がない。何でよりによつて、御浜なんだ。だけど、御浜が彼女に興味を持たなかつたら、オレはそもそも彼女を見よつとしていたか？

「あれ？ 灯路つてば、未だ電話してゐる。お待たせ、テツ」

ちつとも戻つてくる気配のない新島を後目に、ティアスがオレの横に戻つてきた。そして、手書きの楽譜をオレに差し出す。

「……これ、お前が書いたの？」

「うん？ カナよ」

初見で弾けつてか？ 知らない曲を。そんなにしつかりやつてないぞ、オレは。オレの後ろに立つティアスを睨み付けたかつた。

ピアノ曲として書かれてはいるけれど、随分テンポも速いし、こ
れつて……。

「ロック？ あれ？ でも、原曲は……」「クラシックだよ。知つてゐるでしょ？」

確かに、原曲は練習曲として弾いたことあるけど。指が動いたり動かなかつたりのこの状況で、初見の、こんなアレンジの曲を弾けと？ この女。しかも佐伯佳奈子の手書き？！

それにもしても……最近は女優業の方が目立つてゐるとは言え、本業はこつちだもんな。ちょっとすごいな。

「ちょっと練習……」「いいよ」

とりあえず、時間稼ぎも兼ねて弾く真似だけでもしよう。今までティアスの前では、指が動かなかつたことはなかつたし。一人だと、弾けないんだよな。

仮に弾けても、練習不足が露呈しそうだな。

心配していたよりはずつと、スムーズに指が動き始めた。ただ、危惧していた通り、練習不足は否めなかつた。愛里が戻つてくるまでに、何とかしないと。課題も出されてるし。

それにしても、何でティアスの前では、御浜の前では、弾けるんだ？

「すうーーー！ 楽譜見ただけで弾けるんですね！」

「テツ、あんまりピアノを弾いてないの？」

案の定、芹さんは誤魔化せても、ティアスは誤魔化せなかつた。しつぽがちぎれんばかりに振つてるのが見えるかのような芹さんに比べて、彼女の態度はちょっと棘があつた。

「いや、普段、あんまり弾かない感じの曲だし」

練習しろつての、自分。出来るなら、いや、しないといけないのに、何でかつつーか。

「「」の間、弾いてくれたとき、良かつたんだけどな」

今は悪いつてか？ しかし、「」の女は歯に衣着せぬつーことを知らんのか？

「お前、オレを楽しくしてやるつったじやん？」

「言つたよ？」

「オレのピアノが綺麗だつて言つたろ？」

「言つた」

「要するに、楽しそうに見えないし、綺麗でもないってことだろ？」
今のオレは、つまらなそつなまま、つてこと。それに今さら失望した、と

彼女はさすがにオレの側から逃げるような真似はしなかつたけれど、その台詞に返事をしようとはしなかつた。多分、オレの声に卑屈さと、多少の怒りが混じつていたから。

きついことを平氣で言つくな、最後の最後で踏み込んで来ないんだな。

「えつと、オレ、何がよく判らないんですけど」

オレとティアスの間に流れる妙な空氣に、芹さんはいつもの口調で、何のてらいもなく割り込んできた。振り向いて彼の顔を見なくとも、いつものように笑顔でと言つことは判つた。

「ティアスは、沢田くんのピアノが好きだつて言つてたから」

どうしてこの女は、オレ以外の前ではそう言つことを言つかな。照れるだろうが。オレの前で言つたときは、この程度の照れではすまなかつたけれど。

「言……言つたけど」

恥ずかしそうに咳き、オレの背中を指でつづいた。今さら何を照れてるのか。

「ティアスが一緒に練習すれば良いんじゃない？練習不足だつて言つなら？」

何言つてんだ、この人ー。オレとティアスが仲の良いことを感じるくせに、その発言に至る意味が判らない！

「ちょ……孝多……テツに迷惑でしょつが。何で簡単にそう言つて言つたのよ。テツには佐藤さんて言う先生がいてね？」

「でも、沢田くんは、責任とれないのに不用意な発言をするなつて、ティアスに怒つてるようになつて聞こえたから」

「いや、芹さん！ オレ、そこまで言つて……」

思わず振り向いて、囁みついてしまつといつだつたが、彼は平然とした顔をしていた。だから、「そこまで言つてない」と、彼の言葉を否定することも出来なかつた。

何だ、この人？ ただのほんわかした兄ちゃんかと思つてたのに……、妙に鋭くて調子が狂う。何だかそう言つといつは、御浜みたいだとも思つたけれど、御浜ならこんな場面で口は出さない。

御浜なら……。いや、今の彼なら、彼女が好きな彼なら、違うかもしれないけど。でも、距離の取り方は確實に御浜の方がうまい気がする。だつて、オレもティアスも、どうして良いか判らない。

「わ……佐藤さんが帰つてくるまでの間でいいですか？」

「おつ」

「一緒に、練習しませんか……？」

何でおじおじしてゐるんだ、この女。しかも、何故か敬語になつてゐるし。

彼の方に体を向け、座つたまま、真つ赤になつて俯いていた顔を見上げた。

「テツに、……いて欲しいよ」

そう呴いた時の彼女と、同じ顔をしていた。

別に普段、頼み事もお願いも命令も簡単にするくせに、何でこんな風に申し訳なさそうな、恥ずかしそうな顔をするんだ？

「え？ 沢田くん、ティアスと一緒に練習すると困るんですか？」

よくわからなくて

「……いや 何で芦さんか読るんで うか 男は 困るとかそういうわけに

あー、もう、この人、調子狂うな。何でこう、ストレートなんだ。

「でも、ティアスが何か、ものすゝじへ申し訳なやうにしてたから。何か理由があるのかと思つて」

やつぱり、申し訳なさそうにしてるよつに見えるんだ。何でだ？

「だつて、テツには佐藤さんがいるし」

『沢田くんなんか、佐藤さんのことばっかのくせにー何よー』

愛里の口と、氣にしてる?もしかして姫姫してる?とか?

『佐藤さんが帰ってきてくるまでの間でいいですから』

違う。愛里のことを気にしきれてる、オレに気遣つてるだけだ。

どんなにティアスにキスをしても、抱きしめても、オレはやつぱり愛里を見ている。彼女はそれを知ってるだけだ。

気にしなくて良い、って。愛里のことなんか関係ない、って。何度言つても、彼女は信用しない。

オレが心からやつぱ言つてないことを、彼女は知ってるかい。オレのせいだ。

05

芹さんがいなかつたら、オレは多分、彼女を抱き寄せてただろう。あれ以来、言葉に困るとそうしてきたから。それで伝わると思った。甘えでもあつた。

だけど今は、俯く彼女からも、真っ直ぐきらきらした目で見つめてくる芹さんからも、逃げられない。

「一人だと……」

弾けないから。指が動かないから。言い訳に思われても、ティアスにはそういう言おうと思つた。

愛里のことを気にしすぎるのも本当だし、ここまで近付いた彼女に対してウソがないのも本当だ。それを判つて欲しいとは言えないし、何を言つてもウソになる気がした。

だからせめて、それ以外のことでは、きちんと答えようと思つた。楽になれるかもしねりって言つ期待がなかつたわけではないけれど。

「あの、テツ、良いの。『めんね。言わないで』

オレの言葉を遮り、頭を下げたのは彼女だった。まるで、オレの台詞を判つていたかのようだ。

「なんで?一緒に練習しよう。」こなら、夜遅くても大丈夫なんだろ?あと、英語も教えてくれるつて言つてたくせに。責任とらせるつて言つたろ?うが」

手くらい握つても良いよな……。芹さんは、さすがに怒り出した
りはしないだろ?から。

震える彼女の手にそつと触れ、軽く握つた。

それにもしても、冗談だつて思はれてるつて判つてるときは、愛里にも歯の浮くようなことを簡単に言えるのに。どうしてこんな子供をあやすような台詞にさえ、オレはこんなに必死なんだ?

「うん」

小さく頷いて、手を握り返してきた。その部分だけ、妙に血の巡りが早いような、そのおかしな感覚に、目の前がくらくらする。この女はずるい。オレは、ただ一人と言い切れないくせに、完全にはまつていた。

彼女も、オレを見てる。このまま抱きしめたかった。芹さんがいなければ。

……勝手に一人の世界に入つてたけど、この人、もしかして怒つてる?恥ずかしいつて言つより、怖いぞ。

「仲直りした。良かつた」

子供みたいに喜んでいた。なに考えてんだ?蓮野のことを口にしつつも、ティアス狙いか?とも思つたけど、何か、違う。つーか判らん!—

「仲直りつづーか……」の恥ずかしい絵ヅラを見て、お前は何も感じないのか」

ティアスに気を取られていて、見てなかつたけれど、いつの間にか新島が戻つてきていて、芹さんの後ろに立つていた。さすがに新島に見られるのはメチャクチャ恥ずかしいんですけど。恥ずかしい絵ヅラとか言つな。

「え? なんで? ティアスも喜んでるみたいだし」

「……よ……喜んでるつて言つか……」

彼女はオレから手を離すと、あり得ないくらい顔を真つ赤にして、そっぽを向いてしまつた。オレもそうしたい気持ちだつたが、コイツがやるのは可愛いけど、オレがするのはどうだ。

「お前、ハスヤリョウヘイがどうとか言つて、沢田に囁みついてたらうつが」

「でも、ティアスが喜んだら、蓮野さんも喜んでたし」

「つき合つてんのかどうか、突つ込んだくせに?」

「だつて、いいかげんだつたら、あんなにティアスのこと大事にしてきた蓮野さんがかわいそうだと思つて」

「判らん。その考えの軸が判らん!」

新島、もつと言ふ。

「大体、沢田もティアスもはつきりしないつづーか。あからさまなくせに。めんどくせえな」

……それ以上喋んな。にらむぞ。

「そんなことより灯路、カナは？」

「あ、そうだ。人のことに構つてる場合じゃなかつた。カナさん、もう名駅に着いたつて言つてたから。」うちで店を予約してあるらしいし」

そう言つて、携帯で時間を確認をした。リビングの片隅においてあつたコートハンガーに向かい、掛けた黒いダッフルコートを羽織つた。

「いつもの所？」
「そうね？」

自分のことでいつぱいだな。あつさり話変えたし。まあ、あんまり会えないみたいだしな。妙に浮かれてる新島が、不愉快でもあり、ほほえましくもあつた。

「だつたら、一人でここに戻つてくるよね？」

「ああ。今日は泊まれるつて。じゃ、オレもつ出るから。続きは勝手にやつといてくれ」

言いたい放題言つて、それか。

しかし、めんどくせえ、か……。当の本人は、充分判つてんだけどさ。

新島を見送つた後、ティアスがまた申し訳なさそうにこっちを見ていた。

「……ピアノ、また今度にしようか？一緒に練習するんでしょ？」

「ああ」

頷いてから、彼らに気を使つて出でていひつと書ひた、彼女の台詞を思い出した。

「コートを持つてくるから、待つてて」

やつと普通に笑顔を見せてくれた。彼女の言葉に再び頷いて、オレも掛けてあつたコートを羽織る。芹さんも同じように、ジャケットを着た。

さつき着替えてくると言つたときより、随分早かつたわりに、彼女はしつかり着替えていた。初めて見るミニスカート姿だった。オレとティアスが並んで歩き、その後ろを芹さんがついてきた。ここに来るときと同じように、彼女を自転車の後ろに乗せ、動き出そうとしても、彼は未だついてきた。

「……えつと……芹さん、どこに今いるか知らないんですけど、戻らなくて良いんですか？」

いつまでもついてきそうな雰囲気の芹さんに、たまらず突っ込んでしまつた。かなり迷つたけれど。一人でいるのが当然、と思われてなかつたらどうしようかと思つて。

いや、当然ではないのだけれど。

「だつて、オレ、今あの部屋に寝かせてもうつてますから。行くところないし。灯路がないときには、灯路のうちに世話になれないで

すしね」

「は？あの部屋つて……」

ティアスと一緒に暮らしてゐること？！

「……たまに、灯路の家に行つてゐるのよね、孝太は。それに、カナ

が結構いきなり来ることもあるから、灯路もしじつちゅうこねー…

…」

荷台に座るうとしていたティアスが、オレから皿をさらしつつ、妙なフォローを入れた。

そんなフォローはいらん…！

「どうしたの、ティアス？」

「……あんたの天然ボケは、罪深いと思つわ」

しかも芹さんは天然か、やつぱり！

「オレのこと、怒つてる？」

「そう見えるなら、そうかもね」

ティアスの溜息と共に、オレの怒りも空回りした。なんというか、調子の狂う人だな。いや、オレが怒る理由なんて、無いはずだけど。別にオレは、ティアスとつき合つてるわけでもないし、この女がどここの誰と一緒に暮らそうが、関係ないわけだし。

関係ないこと無いのは、オレだけで。それが、最悪なくらい不愉快だ。

「あの、テツ？誤解しないで欲しいんだけど。怒らないで」

「誤解？オレが何を？別に怒つてないし」

「思いつきり怒った顔してくるくせに、何でそつな？良いからもう、行きましょ？」

「行きましょ？つて、お前な！」

これって、オレが怒つてる理由を、ティアスは理解してるってこ

とだろ？そのくせ、「良いから」つて、一体何がよいと言つんだ！
お前は良いかもしねないけど、オレはよくない！

「……何よ」

つて、言つてやりたいけど、言えない。みつともないのが判つて。完全に怒りにまかせて怒鳴ることが出来たら、楽な気がするけど。こんな時、妙に冷静な自分が嫌いになる。

「ういう女だつて、判つてるのに。大体、新島だつて普段、コイツとあの部屋に一人きりで泊まつてくことがあるのも知つてるし。でも、やつぱり、新島がするのと、芹さんがするのとは違う！
せめてこにに芹さんがいなかつたら、外じやなかつたら、あの夜のよう、言いたいことを言えるんだろうつか。

「とりあえず、こにに突つ立つてると、他の住人に迷惑では？」

誰のせいだ。他人事みたいに言つ芹さんを、オレ達は睨み付けるが、彼は気付いてるのかどうかといつた態度だつた。

「行こ、テツ？」

「あんな……」

「孝多。私ね、テツと一緒に行きたい所あるから。一人にして欲しいの」

「この女も、言つに事欠いて、一人にして欲しいって！？つーか、コイツ、その台詞が何を意味してるか……。

「あ、じゃあ。オレは適当に時間潰してるから」

え？しかも、そんなあつさり引くの？なんなんだこの人？

「部屋にも、カナと灯路がくるんだから。判ってる？」

彼女の言葉に黙つて頷いて、彼は手を振りながら立ち去つていつた。その、あまりにせつぱりしそうな態度に、呆気にとられてしまつた。

てか、これはこれで、どうよ~ティアスの台詞は嬉しいような恥ずかしいような、妙な感じだけど。芹さんのこのティアスに対する服従つぶりは?...どんな関係だよ?

「なんでそんな変な顔してんの?」

驚いてんだよ。あきれてんだよ。おかしいと思え、この状況を!...自分の言つた台詞の重さと衝撃を!...
そうとは言えないけど。

「変な顔つて言つな。つーか、あの人は犬か?お前がこいつしたいつつたら、あつさり聞くのか?おかしくない?」

「私の言つことを聞いてるわけじゃないよ。それより、行こいつ?」

オレの服の裾をつまんで、引っ張り、自転車に乗るよう促した。彼女たちの妙な関係を、これ以上、「怒りながら」突っ込んでいても仕方ないと想い、言つとおりにした。

夜は長い。彼女の意志が、オレと同じなら、この後ゆつくり聞けばいい。出来ることなら、オレが彼女との関係を握りたい。何かはつきりさせたくないことがあるのは、お互い様だ。

「ホントに行きたい所なんかあるわけ?」

「無いよ?」

「そう。なら良かった」

オレの台詞をどう受け取つてくれたのか、彼女は黙つたまま、オレの腰に回していた手に力を入れ、抱きついた。

彼女を連れて、オレの家とは反対方向の列車に乗つて、栄で降りた。結局また一人で、あの観覧車に乗つていた。

だけど、それからは何もかもシナリオ通りに進みすぎて怖いくらいだった。

観覧車で隣に座る彼女と当たり前のようキスをする。一人で、以前ここに来たときのことを話しながら。

『邪魔されるのは、いやかな。いやじゃない?』

彼女の台詞を思い出しながら、あの時と同じように携帯の電源を手探りで落とした。

『そつ、良かつた。一緒だね、私と』

あの時の「満たされる」様な感覚の根本が、今ならはつひとつ判る。

「雪、降つてきたよ?」

オレが思つたように、彼女もまた『あの時と一緒に』だなんて言つのだ。それが、オレの期待を膨らませる。膨らむと言つより……太くなるとでも言つべきか。破裂しそうだ。

「めずらし。この辺、年に1回でも降ればいい方なのに。雪に慣れてないから、ちょっと降ると、すぐに交通網が麻痺しちまい。電車止まつたりして」

「そりなんだ。そう言えば、じつちに来てから、あの日くらいかな、雪が降つたのつて。あつちにいたときは、雪なんかしようちゅう降つてたから」

「そりが、とだけ返事をして、彼女の手を取つて観覧車を降りた。「あつち」の話は聞きたいと思つ反面、聞くのは怖かつた。だから、どうしても逃げてしまつ。

「家にも戻りたくない、彼女の過去も知りたいけど、積極的には知りたくない。気になるけど、知らないままでいたい。」

「オレは何も動きたくないけれど、このままどうにかなつてしまつたい。そんな都合のいいシナリオつて、あるんだろうか？」

手を引いたまま、観覧車を後日に再び町に出た。

「お前、今夜どうするんだよ？ また戻らないうつもりだら？」

「雪がどんどん酷くなつてくる。町は酔つぱらいと夜の商売の人でいっぱいなのに、妙に静かで不気味だつた。」

「行くところがないなら、家に来れば？」そう言つつもつだつた。だけど、オレは家に帰るつもりはなかつたけど。

「沢田先生つて、今日はいらっしゃるの？」

「え？ いや……和喜さんと出かけたつて」

「以前なら、オヤジがいない方が、遠慮しなくて良いと言つてたけど。今はどうだつう？あの時と今とでは、オレとティアスの距離が違つ。」

「柚乃は？」

「……どうだる。オヤジが家にいないときは、大抵、家にいないけど。」
「ないだみたいに」

「じゃあ、お邪魔しても良い？」

それは一体どうにいつもりで言つてる？今の状況なら、そりゃいつもりで来るところれどもおかしくないぞ？

「何もない、なんて、今のオレには言えない。」

「良いよ。……そろそろ終電無くなるから、戻るか？」

オレは正直、戻りたくないけど。だって、オヤジがいなくとも、秀一は勝手に出入りするし、何より御浜がいる。離れたくてここまで来たのに。

「うん」

彼女は、何故か真っ赤になつて顔を伏せた。これは行ける気がする！完全にOKのサインだろうが、これは。

だけど家に来たら、御浜がいるつてこと、判つてるんだろうか。もしかしたら、彼が来ることが判つてて、オレんちに来るのか？しかし戻ると言つてしまつた以上、必死で余裕の顔を見せながら、地下鉄の駅に向かう。

「……終電、星ヶ丘までだつて」

恵みの雪だつた。流される自分の幸運に感謝したくなるくらい。本当に幸運なのかは謎だけだ。

案の定、地下鉄の地上部分がストップしてしまつていた。

「バス、走ってるかもよ?」

とりあえず地下鉄に乗りつと、オレを引っ張る彼女を止める。

「吹雪いてるのに?」

地下鉄もその内、復旧するだろ?。多分バスもなんだかんだ言ってこれくらいなら走ってるだろ?。雪はどんどん積もるし、風も強くなつてくるけれど、この地方に降る雪なんて、そんな大したものじゃない。

わかつてるけど。帰りたくない。オレが、家に来る?つてきいたけど。矛盾してる行動かもしれないけど。何とかならないものか、なんて他力本願なことを考えてた。

「どうしよう?..」

上目遣いでそう聞く彼女がずるいのか、何も言わないオレがずるいのか、判らなかつた。

黙つて彼女の手を引いて、駅を出た。彼女は逆らわないし、何も言わない。雪を避けて地下街を歩く。駅から離れたところで地上に出て、繁華街へと向かう。

「ホールの学ランを悟られないよう、ホテルの部屋に入つたところで、オレに引っ張られるまついてきた彼女が、扉の前でやつと口を開いた。

「帰れないから、だよね?」

その言葉に、返事が出来なかつた。代わりに、彼女の背中を押して部屋に押し込んだ。

「制服着てるから。見られないよつて、だよね？」

まるで、オレの代わりに彼女が言い訳をしてくるようだつた。それが妙に申し訳なかつた。

こんな時に、誘いの文句すら言えないのか、オレは。普段のようじに、軽く誘えばいいのに。現実味が帶びただけで、どうしてこんなに怖じ氣づいてんだ。

手を伸ばした後にあるものが、怖くて仕方がない。手に入れる覚悟がない。だつて、オレも何も言わないけど、彼女も何も言わない。

何も言わない代わりに、彼女がオレの言い訳を口にする。

この状況になつて、このまま黙つたまま押し倒すのか？さすがにそれは無理だろう？

何も言いたくない。オレからは動きたくない。だけど彼女と共に犯のまま、オレは彼女と寝ようとしてるのか？

お互い様だと、オレは自身に言い聞かせるくせに、彼女がその態度を続けることが、こんなにも不安で不満だ。

オレは動きたくないけれど、彼女には動いて欲しいなんて。虫の良い話だ。

彼女がオレを好きだから、仕方がなかつたんだ。そんな言い訳、通じるわけがないと判つてゐるのに。

「黙つてないで、何か言つてよ」

部屋の隅に陣取る、やたらでかい真つ赤な布貼りのソファに腰掛けながら、オレを責めた。スカートの中、見えそうですけど。誘われてるつて思うのは、ただの自惚れだろうか。

黙つたまま隣に座つたら、入れ替わりに彼女は立ち上がり、風呂場へ向かつた。

「逃げた?今」

「なんで今出でぐる台詞がそれなのよ」

怒ったのかと思った。だけど、彼女は何故かちょっと暗い口調のまま、風呂場の扉の前で立ち止まって、じらうを見ていた。

「……そうこえはテツには、昔、彼女いたつて聞いたことがある。こいつこいつ、来たことあるの?」

ホントに、びつひつひつもりなんか、この女は。今まで何度も聞くタイミングはあつたはずなのに、初めて突っ込んできた。

「……一応」

まあ、ウソついても仕方ないしな。なんか責める口調だったから、気にしてるみたいな言い方だったから、ウソついた方がいいような気もしたけど。今さら初めてですしつつても、白々しいし。

人のことは言えないけど、コイツも一体何を気にしてるんだか。

「でもまあ、真達の言つてたことど、大体当たつてるけど」

「やうなんだ。佐藤さん、いるもんね」

『愛里愛里つて五月蠅いよ。』

「お前は?お前じん、蓮野……」

「今まで彼氏とかつて、いたことないし。」 『うう所来るのも初めてだし』

逃げるよつに風呂場へ入つていつた。自分が初めてだから、オレ

を責めてたつてことか？よく判らんし。

それにしても、蓮野とはホントに何もなかつたのかな。逆にあんだけ否定されると、疑わしい。何もなかつたのに、芹さんがわざわざベルギーから来るだらうか。芹さんが極端なかもしれないけど。

蓮野のことも気になるけど、御浜のことも気にならないでもない。彼と二人でいるかどうかもオレは結局知らされない。後から「一緒にいた」って聞いて、どうして良いか判らなくなることはあるけれど。

蓮野のことは、少なくとも過去のことかもしれないけれど、御浜のことは現在進行形だ。彼に対して彼女が悪い印象を持つていよいのも知ってるし、仲が良いのも知ってる。何より、御浜はティアスに執着してる。驚くほど。

ずっと御浜の横にいたから、オレが誰よりそれを感じとつてゐる。だけど、オレはもう、引き下がれない。引き下がる気もないけど。ただ、覚悟が決めきれないだけで。

彼女は、良いつてことなのか？多分、その風呂場の扉に鍵はないと思うぞ？ガラスで中が丸見えじゃないだけ、ましな方だ。

風呂場の扉のノブに手を掛け、押し開けようとしたら、鍵はかかつてないけれど、重くて動かない。中でバリケードでも作つてんのか？妙な悪あがきをしやがつて。

仕方なく扉の前で座り込んで彼女を待つ。待つていたら、ソファのある辺りから携帯の着信音が鳴り響いた。ティアスの携帯だった。そう言えば、カバンを置いていったような気がする。よく知つてゐる着信音だ。これ以上聞きたくなかったから、必死に聞かないように、見ないようにしていた。

「……何してるのよ

髪をまとめたまま、Tシャツにスカートで風呂場から出た。中に着るものとかあつたのが。ホントに往生際の悪い。

「いや、待ちきれなくて?」

その台詞に怒るかと思つたら、妙にしおらしくなつて、顔を赤く染めた。立ち上がって彼女の手をとり、抱きしめた。

「……何も言つてくれないんだね」

彼女は不満そうに言つたけれど、いつもより、オレを抱きしめ返した。

オレも、あのクリスマスの日から、なるべく会うようにし、なるべく触れるようにしてきた。だけど、彼女が受け入れなかつたら、それも出来なかつたはずだ。

キスをしてから、風呂場の扉の横にあつたソファに彼女を押し倒した。彼女は抵抗しなかつた。

なのに、御浜からの着信に、彼女は手を伸ばす。

「とるな」

自分でも驚くほど強い言葉で、彼女の手を押せた。

「……とらないから」

オレに体をすつよせ、腰に手をまわして抱きついた。

「テツも、もし佐藤さんから電話があつても、とらないでよ?」

やつぱりオレは、彼女の問いに答えることは出来なかつた。

携帯の電源を切つておいた自分の聰明さを、心から褒め称えたかった。彼女の携帯は鳴り響いても、オレの携帯は鳴らない。

彼女の携帯が鳴れば、二人の（オレだけの可能性はあるけれど）

罪悪感を刺激するけれど、それが増すばかりだ。

正直、御浜のかこの着信音がオレの彼女への執着をさらに東激していたのは確かだ。自分でも矛盾してるとは思ひたけれど、どうしようもない。

い……だろう。

そしてどうあえず後悔したくせに 異れかたぐつてゐる自分も
いる。吐き気がするほど矛盾だらけだな、オレは。

裸のままシーツにくるまり眠っている彼女に、起きる気配がないことを確かめ、携帯を持って脱衣場へ向かう。電源を入れるとたまたまていたメールや留守電がどんどん入ってきた。とりあえず無視して、新島に電話を掛ける。

時間は7時5分、さすがに起きてるだろ？
もしかしたら、また電源を切つてる可能性もあるけど。

『なんだよ。デートだつたつたろうが。戻つてきたら、お前も孝多もティアスもいなくなつてたから、氣を使つてくれたんだろうとは思つてたけど』

「……取引しないか？」

『何を？……そういや、お前らあの後どうしたんだ？一人で家に来たくせに……』

電話の向こうで、状況を判断している新島の姿が見えるようだつた。

「お前、どこの出かけてるって言つてるんだ？お前んちの親、普通に五月蠅いだろ？家にいたことにしどけばいいから」

『お前んちはどうなんだ？』

「オヤジは学生時代の友達と出かけてるし、オヤジがいなけりゃ、妹もいない」

『適當だな。幼馴染みの方がよっぽど保護者だな。泉と白神にそいつ言つとけばいいわけか。良いけど』

察しのいい男で助かる。我ながら、おかしなことを頼んでいるとは思つけど。

『……で、結局お前らは、つき合つたことにしたのか？』

「別にティアスと一緒にいるとは一言も言つてないが、……」

『いや、そこは定されても、嘘臭いだけだし』

頭から決めつけてんなよ、この野郎……。間違つてないけど。察しがよちぎつて困るじゃねえか、この男は。

「テツ？何してるの？」

『ほら見ろ』

シャツだけを着て脱衣場に入ってきたティアスの声に、勝ち誇つた様に言つた新島が不愉快で、確認をとる前に電話を切つてしまつた。

「アリバイ工作中だよ。制服を着てくるんじゃなかつたな。このま

ま学校サボるうかと思つてたのに

あと1日遅ければ良かつたのにな。週末だつたら大手を振つて休めたのに。

「サボらなくとも、学校は休みじゃないかな？」

何故か、彼女は満面の笑みを見せ、オレの手を引いて立ち上がらせた。ヘッドレスト側にある窓は、そこが限界なのか、からうじて外が覗ける程度の隙間が空いていた。外には雪が積もつていた。

ここ何年か見たことがないくらい、外は真っ白なように見えたけど……。

「大雪警報が出てるつて。天気予報で言つてたよ？高校は休みじゃない？」

オレが電話をしてる間に、彼女がテレビをつけたらしい。朝のニュース番組が気象情報に囲まれて、小さな画面に收まつていた。高速道路も、JRも、私鉄もほとんど止まつているらしい。普段は天気にほとんど左右されない地下鉄も、地上に出ている部分が止まつているようだつた。

とりあえず、柚乃には連絡しとくかな。親父が帰つてきてたら、どこに行つてるんだつて話になるし。

「行きたい所あるんだけど、つき合つてくれる？」

案外、簡単なもんなんだ、つて言うのが正直な感想だ。オレのずるさか、彼女のずるさか知らないけれど、なんの縛りもお互いからは与えないまま、寝ることは出来た。次はどうか知らないけれど、オレはもう、そのつもりでしか彼女に近付けないし。彼女に「どう

「いつつもり？」とか聞けない自分の後ろめたさが辛い。

だけど、彼女はどうして、最後まで嘘をついたんだろう。女つて、やっぱ嘘つきなもんのかな。愛里みたいに。あの女も、肝心なところで嘘ついてたから。

「良いけど」

オレの返事と同時に、彼女の携帯が鳴り響く。心臓に悪いから、オレみたいに電源を切つておいてくれればいいのに。手に持つたままの自分の携帯の電源を落としながら、心の中で舌打ちをした。

着信音が、いつもかかってくる御浜のものとは違っていたことだけが救いだつた。いくらなんでも、こんな朝からかけてこないか。学校が休みになつたと判つたら、どうでるかは判らないけど。

御浜のことを思つと気が重い。重いけど、もうびつひとつもない。いや、それでもないか？ 昨夜のことを無かつたことにしたら……。

そんなこと、オレ自身が出来るわけがないの。本当にオレ自身が一番判らない。ティアスが目の前にいるのに、いつまでも愛里に執着してゐるし、何度も思い出し、簡単にティアスに手を出しておきながら、御浜のことを気にしてゐるし。

だけど、一つだけはつきりしたことは、それでもティアスにはオレを見て欲しいんだ。今でも。

「……誰？携帯」
「え？ カナだけど……」

オレの手前（もしかしてオレが嫌そうな顔をしていたからかもしれないけれど）、彼女は携帯に出るのを躊躇つていた。申し訳なさそうな顔をしたまま、鳴り響く携帯を開く。その画面を、ちらりと確認したら、彼女の言う通りだったことにオレは胸をなで下ろした。

「出ればいいの」「元の

彼女から離れ、再び風呂場に向かった。手に持っていた携帯の電源を入れ、柚乃にメールを打ちながら。ティアスの行為に、少しだけ心が躍る。彼女の反応に、彼女の行動に、オレのことを見ている実感に、オレ自身が激しく揺さぶられているのを感じていた。最初に彼女と一人で観覧車に乗ったあの日よりも、もっと激しく。

ティアスだけを真っ直ぐ見ていたら、どんなに楽しいだろうか。

そう考えながら、真や相原達がオレのことを枯れたのなんのと言つてたことを思い出して、余計にへこんだ。意外と、当たつてるとも……。楽しいだろうか、じゃねえつつの。

風呂場を出て、彼女が電話を終えるのを遠目に確認しながら、再び携帯の電源を落とした。

「佐伯さん、新島と一緒にいるんじゃないのか?」

「元々、今日は灯路を学校に行かせてから会つ予定だつたから

「そつか。いいのか?」

行きたいところがあるって言つてたの」「。

「ん。どうせ夜の話だし。カナだつて、美衣がいるからうちに来るときくらいしか自分だけの時間がないんだし

「……そつか」

ミイ? そういう中学生くらいの娘がいるんだよな。つーか、娘とそつ年の変わらん男と恋愛してんなよ。不倫じゃないだけマシかもしれないけど。新島とのことを知つて以来、雑誌読んでも、ちょっと生々しい感じがするんだよな。

「そういうや、佐伯さんって、旦那とかいないのか？」

「え？ 結婚して、美衣が生まれて2年で離婚したって言つてたよ？」

「彼氏はいつぱいいたらしいけど」

「ふうん」

「興味ある？」

なんだそりや。妬いてんのか？……なんて答えて良いやら。

「別に。それより、わざわざと出で、何か食べに行こう」

あからさまに話を変えたけれど、彼女は黙つて頷き、着替えを持って洗面所へ向かつた。妙に聞き分けが良くて、ちょっとおかしい感じだけど。

どうも、釈然としない。

釈然としてないのは、ティアスも一緒か。何だろな、この微妙な距離感は。もつと近付いても良いと思っているのはオレだけなのか。多くを求めることの出来る立場ではないと判つてはいるけれど。

いや、立場は良いだろう。オレはフリーなわけだし、ティアスも別に誰とつき合つてるわけでもないんだし。別に何がどうなろうと、つーかなつてるんだし、良いだろう。そもそも、誰かに彼女と一緒にいるところを見られて困るのは、オレだけなわけだし。いろんな意味で。オレが見られて困つて言つのが、おかしいのかもしれないけど。

軽く朝食を食べたあと、彼女の誘導で地下鉄の駅に向かう。案の定、地上部分は復旧作業中だつたけど、地下部分は動いていた。名駅の近くに出来た複合施設内の地下にあるジャズクラブに行きたいところなので、満足に移動できない彼女のために、オレがそこまで連

れて行くはめになる。

良いんだけれど。この、彼女は使えるものを使つていて、自分はそれに使われている感覚つて言つのは、あんまりいい気分ではないな……。彼女が心配にはなるけれど。だけど、それとは少しだけ違う気もする。

ティアスのこと、好きだとは思うけれど。何かが引っかかる。それがオレの持つ、彼女への距離感なんだろう。

「来たこと無いの？名駅」

地下鉄の駅を降りて、きょろきょろと辺りを見渡す彼女がおかしくて、思わずそう突っ込んでしまった。

「ん……最近は、こっちに来たときに乗り越して来ちゃつたことはあるよ。後で灯路に聞いたら、ここで乗り換えるても良いって言われたけど。昔、こっちに来たときと、随分変わってるんだもの」

「昔？どれくらい？お前、あちこち転々としすぎてて、どこにどれくらいいたかわからんねえし」

「この辺にいたこともあるよ？その時は、義兄さんと一緒に、灯路の家にお世話になつてた。テツはずつとこの辺なの？」

「ああ……いや、母親が死んですぐくらいに、ヨーロッパの方に少しだけ住んでたつて言つてた気がするけど、あんまり覚えてない。その話がホントなら、オレ未だ4歳くらいだしな」

「そりなんだ。そのころ私もイタリアにいたよ？父さん達が未だ生きてたころで、義兄さんがけよつと寮に入ったころだったから、よく覚えてる」

「そういうや、コイツの兄貴の話を聞くことって無かつたな。最初のこりは布拉コンだの何だと新島に言われてたけど。

「お前の兄貴って、何やつてんの？」

「……えっと……とれーだー？」

「何でそんな不安そうに言うんだ。よく判つてないのか？お前んちの収入源だろうが。何の勉強してたんだ。寮に入つたつてことは、どつかの学校に行つたつてことだらうが」

「何でいつもそう喧嘩腰なのよ。そのころは未だ5歳とかだし、判断ないわよ。兄さんはいろいろ教えてくれたけど、自分のことはあまり言わない人だし。……えっと、たしか地政学だった気がする」

よくわからん。聞くんじゃなかつた。知識の無さを露呈したつて、ろくなことにならないし。まあ、ティアスも判らなくて、オレも判らないならそれでいい氣もするけど。

彼女の手を取り、地下街を歩いて、地上に向かう階段を登る。電車は止まつているはずなのに、思ったより人がいた。

「あそこ、何があるの？見にいこ？」

駅前のロータリーの先に、ツインタワーの広場があるのを見つけて指さしていた。

「イルミネーションがあるだけだつて。こんな朝っぱらから行つても仕方ないだらうが」

彼女に引っ張られるままエスカレーターを昇り、広場を廻る。暗くなつたらもう一度来ようと約束をしたら、嬉しそうに笑つた。彼女と一緒にいる1日が決まつたことが、オレも嬉しかつた。それで充分な気もしていた。

入つてきたエスカレーターとは別の出口から出で、ビル内に入る。タワーの高層階にあるホテルに直結してエレベーターが並んでいた。雪なのに人が多いと思つたら、ホテルの客だつたようだ。

夜中に止まつた交通機関が少しずつ復旧していくところだから、それとも端にチェックアウトの時間だから、エレベーターから出でくる客が多かつた。

「……愛里？」

エレベーターから出でくる客の中に、一際目立つ派手なスーツケースを転がしながら歩く愛里の姿があつた。一人みたいだけ……。向こうもオレに気付いたらしく、笑顔で近付いてくる。

オレの隣に、ティアスはいなかつた。

第4話 (the heads) 後編

「どうしたのよ、」こんな所で、きょろきょろしながら。学校は？」

愛里は、ついさっきまでオレの隣にいたティアスには気付かなかつたようだ。オレの行動を不審がりながら、簡単にオレの腕に触れる。

辺りにティアスはいなくなつていた。と言つより、人が多すぎて、どこを見て良いか判らなかつた。

「大雪警報で……」

「ああ、そうよね。おかげでこんな所で足止め食らっちゃつたんだつた。テツは一人？」

戸惑つていたのは、おそらく5秒くらいだったと思つけれど。だけその時間が、オレには酷く、重く長く感じられた。

「いや……ツレとはぐれたんだけど」

「そつなの。あんまりテツキに心配かけさせなによつにね。最近、あんたが出歩くことが多いつて、ぼやいてたから」

愛里の口からオヤジの話を聞くことが、どんなにオレを苦しめるか。彼女は気づきもしない。一番見せたくない顔を、彼女に見せてしまいやつになる。

「どうしたの？」

何でティアスはオレの隣にいない？

愛里の訝しげな表情が、オレを追い込む。この手持ちぶさたで

不安定な左手を、今、ティアスに握つていて欲しいの。」

愛里の存在が、オレを追い込み、突き落とす。胸が苦しくなるその感覚を、思い出すことすら嫌なはずなのに、時々それのせいで、うめき声すら上げている。それを愛里が知ることはないと思つと、その事実がさらにオレを追いつめる。

「何でもない」

ティアスが横にいたら、彼女の手を握つていたら。

そうしたら、この傷みは少しでも楽になるのだろうか。楽になるような気がしているのは、期待のしすぎだらうか。

「オヤジ、いつぼやいてたんだよ、そんなこと。オレ、そんなに出歩いてないぞ？」

「そう？ あんまり練習もしてないみたいだつて。進路の話もしてないでしょ？ 来週の月曜から、またレッスン始めるからね」

そういえば、課題曲はほとんど弾けていない。だつて、一人だと指が動かないから仕方ないし。

それにしても、愛里もオヤジもこそ連絡とりやがつて。愛里はオレのこと、ホントにどう思つてるんだろ？

「じゃ、あんまりふらふらしてんじゃないわよ？ テッキが心配するから」

ハンドバッグから携帯を取り出しながら、彼女はそそくさとオレの前から立ち去る。申し訳ないといった素振りなど一つも見せないまま。いや、オレの存在がその程度だつてことくらい、判つてるんだけど。

悔しいけど、それでもオレは、あの女の心に引っかかりたい。

彼女にオレを見てもらいたい。どんなに振り回されても、どんなに余所を向かれても、それでも。

「あつち、人がいないよ?」

ティアスはオレの左手を握り、親指の腹でオレの手の甲を滑るよう撫でた。その指は、オレの涙腺も一緒に触つてしまつたらしい。

彼女はオレの顔を見ないように、ぎゅっと左手を握つたまま引き張つて、人混みの中を歩き出した。

一番見られてはいけないヤツに、泣き顔を見られてしまつた気がする。しかも、愛里のことでなんて。

「……人、いるし」

もう、涙は止まつていたけれど。こんな赤い田でうひうひしたくないし。

「さつきの所よりは少ないでしょ?」

彼女が連れてきたのは、先ほどまでいたテラスの南端だった。所狭しと置かれた点灯前のイルミネーションが壁になつて、確かにさつきの場所よりは人が少ないけれども。日陰には未だ溶けていない雪が固まつて凍つっていて、滑つてしまいそうだ。

「大体、お前はなんでいなくなつたんだ?」

「邪魔かと思つて。それに私、あの人に嫌われてるみたいだし」

「だからつて、お前がいなくなる理由になるか?」

左手に力を込めた。彼女が痛がつたから少しだけ力を緩めたけれど、離すつもりはなかつた。

「だつて……テツは、佐藤さんのこと」

「うう言ひへせ。オレも彼女も、だつてこんなに矛盾だらけだ？
関係ないと言えないオレも。何も言わないオレと寝た彼女も。

「そんなこと……」

「何度も言つたでしょ？知つてるつて。否定しなくて良いよ
「だけど、関係ない」

手は離さない。オレが愛里を好きなことは確かだけ。オレ自身、
バカだとは思ひやしない。あの女のことをどうしても、心の中から振り
きれないけど。

だけど、ティアスのこととは関係ない。

気が多いだけかもしれない。だけど、この手を離したくない程度
には、ティアスのことを好きだと思つ。
多分、昨夜より、今朝より、こうして手を引いてくれた今の方が、
ずっと彼女を愛しく思える。

「イルミネーションが点くまで、どこかで時間潰そつか？私の用事
はもつと夜遅いし」

彼女の提案に、オレは黙つて頷いた。彼女が愛里のことを、あれ
以上何も言わなかつたことに、自分が甘えているのもよく判つてゐる。
だけど、さつきまでのよつに、一緒にいられる時間が決まつたこと
を純粹に喜べはしなかつた。

彼女と一緒に時間は楽しいし、ちゃんとオレの心は浮き立つけ
れど。だけど何かが引っかかつたままだ。その何かは、多分一つじ
やないんだろう。それはオレのせいでもあるし、彼女のせいでもあ
る。

少しだけ変わったような、何も変わらないような、妙な距離感を保つたまま、オレは彼女と時間を過ごす。つないだ手を離す気もなかつたし、違和感はあっても、突き放す気はなかつた。

そうしながら、彼女の用事というヤツを聞いた。今夜、あの音無悠佳がライブをするらしい。そこに佐伯さんと一緒に行く約束をしていたのだといつ。

そんなところにオレが着いていて良いのか?と聞いたら、彼女は一緒に来て欲しいと返した。それがオレの心を少しだけ軽くする。不安定だけど、彼女にとつて必要だと判る言葉が、オレの存在を明確にする。

ライブの話から、やつと自然に音無悠佳の話を聞くことが出来た。彼女は、彼を追いかけてこっちへ来たらしい。それくらい彼女にとって、音楽をする上で、彼の存在は大きいようだ。佐伯さんも、賢木先生も、その支援のために力を貸してくれているのだといつ。もちろん、その礼というのはおかしいが、賢木先生にも、佐伯さんにも、それなりのことをしているとは言つていたけれど。

音無さんは、活動の拠点を急に日本に戻し、しかもこの名古屋辺ばかりに出没するようになつたらしに。オヤジも賢木先生も、神出鬼没だとは言つていたけれど、出没するなんて言われ方もどうなのか。

連絡を取つていてのにあつとも会えない、だから会いに行くのだと彼女は言つていた。元々、佐伯さんも音無さんとは知り合いらしいけど、それでもなかなかつなげないらしい。オヤジとは普通に連絡を取つていたみたいだから、妙な話もあるモンだと思つた。

佐伯さんの話が出たときに、オレに何か言つたそうにしているのが少しだけ気になつた。未だ何か、言い出せないことでもあるんだろうか。オレにまた、少しだけ距離を感じさせていると、彼女は判

つているのだろうか。

オレの悪い癖だとは思つけれど、いやなことをイメージしてしまふ。家に帰つたらまた御浜と秀一がいて、それは普通のことなんだけど、うつかりティアスの話になんかなつたりして、御浜の口からまたオレの知らない情報やら、オレが知つたばかりのことが出てきたりするんだ。それが、思つた以上に辛い。

オレの持つ違和感の正体は、こんなにも明確だ。思つていた以上に簡単に彼女の体は手に入つたのに、彼女との距離が縮まつた気はない。むしろオレだけが、どんどん深みにはまつていく。間抜けな話だ。

素直に、彼女もオレのことを好きなんじゃないかと、オレはどうして思えないんだろう。それならば一人で、全てから隠し通せばいいんじゃないか？ そうできたら、オレにとって一番良いんじやないのか？

あちこち歩き回つて疲れたのと、小腹が空いたからと、百貨店の2階にあるカフェに入る。賑わっている店内だつたが、窓際の席に案内された。雲の隙間から夕陽が差し込んでいるのが、窓から見えた。また雪が降つてきそうな、不穏な空模様だ。けれど、平日と言うこともあるし、昼間は比較的穏やかな天気だつたせいが、人通りは結構多い。

明らかに、カップルにしか見えないんだろうな、オレ達は。窓際の席はペアシートになつていて、二人で横並びに座ることになつた。普段もそうしてゐるけど、改めてそう見えているのだと思うと、少しだけ戸惑う。彼女がオレの左側にいることは、なんの違和感もないのに、不思議な感じだ。

「……実はね」

彼女は真剣な眼差しでメーラーを見つめながら、重い口調で呟く。

「何だよ……その……」

「私、あんまり甘いものって好きじゃないのよね。女子なの」「

「……心臓に悪い。お前、出されたもんは食つけど、相当偏食だよな。あと、味覚があつさん」

「何よ、テツだって偏食じやない。味覚があつさんなのはお互い様だし。でも、たまにはこういう可愛い店も入つてみたいのよ。テツ達みたいに」

その「達」にはオレと愛里が含まれるわけ？

そういうやティアスとは大抵、外でそのまま会うか、夜遅いからファミレスとか、クラブとかだったからな。昨日は愛里がいなかつたから、一人でスタバにいることになつたけど。

「別に、一緒に行けばいいだろ？が。レッスン無くとも、オレはある場所にいるし」

彼女は黙つて微笑む。彼女の膝の上で手を握ると、握り返してくれ。何もなかつたよ？と、オレは再びメーラーを見るよう彼女に促す。

「ティアス。オレ達、これから……」

答えが欲しい。確証が欲しい。

この握っている手の、この温もりに、何も考えずただ甘えたい。彼女がオレと同じ思いなら、オレ達うまく行くんじゃないのか？

「これから……？」

彼女がオレを握る手に、力を込める。

一瞬目を伏せ、照れたようにも見えたけれど。彼女は上目遣いでオレを見つめた。

「これから……」

こんな台詞、自分で吐いたことなんて無いから、なんて言つて良いか判らないけど。

どうしても、彼女の手を強く握つてしまつけど。

「ティアちゃん、ここにいた。背中向けてるんだもの、わかんなかった」

彼女の肩を、佐伯さんが軽く叩く。オレと一人でいることを当たり前に扱う彼女の態度に、オレも彼女も手を離さなかつたけれど、オレの台詞は完全に止まつてしまつた。

むしろ彼女の登場にまつとじてしまつたオレは、やつぱりただずるいのかもしれない。

オレはじづかしている。冷静に考えて見る。何一つ、オレの心を蝕むモノは、無くなつていないのに。

蓮野の件も、彼女自身の心の件も、愛里の件も、何より御浜の件も。にも関わらずまく行くわけがないのに。

「邪魔しちゃつたみたいね。もつちよつと後で来ればよかつたかな」

「少しだけね。でも、もう時間でしょ？早く行きたい

「どっちだ、それは。ホントに一緒にいたかったのか、オレへのた
んなる気遣いか。

「そんなに楽しみ？ライブ」

「ええ。あいつに挑戦状をたたきつけてやれるかと思つとね」

「……おいおい。何しに行く氣だ」

何か、「憧れて」とか「好きで」と言つのとは、ちょっと違つ氣
がするな。何だ、挑戦状つて。

サエキさんに誘導されて連れられたライブハウスは、思ったより
小さなハコだった。入口の前で新島が待っていたのが妙に照れくさ
かった。彼を連れ立つて4人で中に入ると、思つた以上に人がいた。
何とか壁際を陣取り、そこで落ち着く。

「沢田くんは、音無さんのライブつて見たことある？お父さんのお
友達だつて聞いてるけど」

「面識はありますけど……彼が歌つているのも弾いてるのも聞いた
ことがないです。CDでなり。会つたのも、子供のころですし。父
は連絡を取つてるようですが」

「気まぐれなんでしょう？あの人

「みたいですね」

「日本に拠点を置いたくらいから、気まぐれ度が上がつてるのは
え。いいかげん、いい年なんだから、落ち着いたかと思ったのに。
彼のマネージャーも嘆いてたのよね」

「気まぐれ度……まあ、人間関係が適当な印象は拭えないよな。
そのわりには、蓮野の件ではすぐに動いていたみたいだし、オヤジ
が電話して、会えないにしても捕まらないことはないし。」

「落ち着いたんじゃない? 一力所に留まるなんてこと、今まで無かつたし。しかも、自分から出でていった日本によ?」

音無さんに会えるからか、ティアスは少しだけ興奮気味に吠えていた。……オレと寝た後だつて、そんな風にはしなかつたじゃねえか。むかつくな。

「そうね。 そうかもね」

「何か、腑に落ちないって顔よね」

ティアスの言つとおり、彼女は納得がいかないよつだつた。

「元々、勝手な人だつたけど。 だけど最近、酷い気がするのよね」

彼女を見つめるティアスの顔を、思わず見てしまった。

「何? どうかした?」

「いや。 お前はそうは思わないんだと思つて」

「カナみたいて、音無のことを知つてゐるわけではないもの。 あのね、テツ…… その……」

ティアスがオレに手を伸ばし、触れた。 その様子を見て、新島が意図不明な笑みを見せたのを確認したとき、照明が落ちた。ステージがライトアップされ、音無さんが現れた。

オレは、ステージを見ることが出来なかつた。ステージからの強い光が、ティアスを時折照らす。 その瞬間を、オレは食い入るように見つめる。 音無さんのピアノは、まるでオレの鼓動のようにリズムを紡ぎだし、ステージを揺らす。 彼女を押さえるよつて、オレに触れたままの彼女の手を取り、握りしめる。

挑戦状だなんて、ただの彼女の照れ隠しでしかない。彼女はこんなにも、彼に、彼のピアノに焦がれている。オレと一緒に歌つたあの姿は、なんて冷静で、なんて他のものに振り回されていたのか。悔しいけれど。だけど、オレもまた、彼の音楽に振り回される。だけど純粋に感動なんて出来なかつた。オレにない、何かを動かす力を彼は持つている。比べることすら鳥游がましいのかもしないけれど。

「すげえな。ピアノだけなのに。何か、オレはいつのまにかよく判らないけど……」

曲の合間に言葉を探す新島に、佐伯さんは笑顔で応えていた。それに新島もほつとした顔を彼女に見せる。一人が見つめ合つている隙に、オレは黙つてティアスの手を離す。再び、曲が始まり、彼らの意識がステージに向かうと同時に彼女の手を取つた。

彼女の手が熱を帯び、汗ばんでくるのが伝わる。オレはその部分だけ、妙に冷静な気がしていた。理由は判つてる。『悔しい』だなんて、ホントは思いたくもない。世界が違ひすぎるのである。

プログラム通りに6曲を終え、彼は引っ込んだ。アンコールの声に応える気はなかつたようだ。客もそれを判つてているのか、声が挙がつたのはひとときで、今はやんていだが、熱氣は收まらなかつた。

「バツクヤード行こつか? アポとつてあるのよ。ティアちゃんのことも、聞いてるつて言つてたから」

佐伯さんの誘導で、彼女と一緒に彼を訪ねることになつてしまつた。良いのか? こんな簡単に。

オレの不安などお構いなしに、彼女たちはオレを引っ張る。新島に助けを求めたが、彼は彼で自分のことについてぱいのようだつた。

「音無さん。この間、話してた子を連れてきたけど……」

順に入つた、狭いハコの狭い樂屋には音無さんと一緒に、オヤジと和喜さんがいた。オレは和喜さんに会つのは久しぶりだったけれど、オヤジとはよく連絡を取り合つてゐるみたいだし、音無さんとも共通の友人みたいだから、一緒にいるのは判るけど……。

「オヤジ、何でここに? !」

「それはこいつの台詞だ。こんな日は、何でこんな所をうろついてる? 」

「大雪警報で休みだし……」

と、新島と佐伯さんに助けを求めてみたが、オレが制服を着てる理由にはならなかつた。

「『めんなさいね。こんな雪の日に息子さんを連れまわしてしまつて』

「あなたは……?」

不審そうに佐伯さんを見るオヤジに、後ろから音無さんが耳打ちをした。どうやら彼女の説明をしたようだ。でかい声で言えばいいのさ。

「『いかで見たことがあると思ったら。プロデューサーをされてるんですね。音無が、今日あなたとアポがあつた』

「ええ。こんな所で鉄人くんのお父様と会えるなんて、奇遇ですね。でも、ホントによく似てらっしゃる」

さりげなく、自分のせいにしてくれた佐伯さんは、もう頭が上がらないかも。ホントはティアスと泊まりだったとは、いくら家が

それなりにオープンな家庭とはいえ、言えないぞ。

「……鉄城の子供、こんなにでかかつたっけ？嫌だな、年感じるなあ……。なあ、悠佳？」

和喜さんの問いに、音無さんは不思議そうな顔でオレを見るだけだった。音無さんはともかく、和喜さんは少なくとも高校入つてから会つてゐるはずだが。

「コイツ、最近物忘れが激しいんだ。音無、オレの息子の鉄人だ。今年17になる。……何でこのメンツで来たかは知らないが……」「彼女、デビュー前に、音無さんともう一度話がしたいって。何度も私がからも、彼女からも連絡していたと思うけど

……でびゅー？デビューで、何？聞いてないし。どうこう」と、

「オレからも、賢木からも連絡したな、そう言えば

オヤジがちらつと音無さんを見るが、彼は黙つたまま。この人、何か不思議な人だな。

「なんで？なんで何も言わないのよ。ベルギーにいたときは、もうライブはしないって言つてたのに、日本で始めてるし。リョウにもそう言つたくせに、嘘ばっかりじゃない

「覚えてないって言つてるぞ」

あくまで、オヤジにしか聞こえないくらいの小声で喋る彼に、彼女は苛立ちを隠せないようだつた。オレが、彼女の口から出でた男の名に、同じように思つてゐるとも知らずに。

「覚えてないって？！」

「まあまあ、ティアちゃん。そんな喧嘩腰に話してたら、相手がびっくりしちゃうでしょ？」

「喧嘩腰じゃないよ

喧嘩腰だよ。だから一体何があつたんだ。

「お前、ホントに物忘れ酷いのな。オレは覚えてるけど。こんな可愛いのに」

苦笑いしながら彼女のフォローをする和喜さんに対しても、彼は黙つて首を振るばかりだった。何か子供みたいな人だと思つのはおかしいだろうか。オヤジよりも年上なのに。

「お前、この子のプロデューサーをするようて、随分前に言われたろ？途中まで乗り気で、蓮野弟ともこの子とも連絡とつて、偉そうに『ピアノ弾いたり歌つて見せたりしてたろうが』

「私も随分、連絡させてもらいましたけどね。日本での『コーディネーターも引き受けたって、マネージャーさんとは話が付いてましたし……』

オレが思つてる以上に、でかい話になつてないか？それに、蓮野遼平の名前も出てきてるな。ずっと元カレだと思ってたけど、さつき言つてた「『デビュー』がらみの存在つてことか？いやいや、それはきっかけでしかなくて、そのままつき合つてたなんて話はいくらもあるし。

「そういうや、遼平も『コーディネーターみたいな仕事をしてると聞いてたけど。それで賢木が、この子を大学で教えようとしてたつてとか。間に合わなかつたみたいだけど。……お前、何でここにいる

んだ？」

オヤジのしつこい疑問は「もつとも。

「……成り行き？」

オレにもよく判らないけど。

「違うもん！見てなさいよ？私は、別にあんたの助けなんかいらないんだから。テツと一緒に舞台に立って、歌うもの！」

オレの腕を引っ張り、高らかに宣言をする。

「聞いてないぞ、オレは……」

「」の場で怒鳴らなかつたオレは、ホントに大人だと思った。

「悠佳、車の用意、出来たから。さつさと準備して

小声で良いから、冷静に釘を差しておかなければと思って、彼女を睨み付けたとき、楽屋に一人の女性が入ってきた。確かオヤジの友達の「久方みず木」さんだ。もしかして音無さんのマネージャーつて、この人？

「佐伯さん、申し訳ないんですが……」

久方さんに声をかけられた佐伯さんは、ちらりとオレと彼女を見てから

「ええ。『めんなさい』、また日を改めますわ。私に直接でも、マネージャーを通してもうつても結構ですから、是非また。しばらくこの辺りを廻るんですね?」

「ええ。でも、明日は関西方面へ。思つたより外に人が多いので、騒ぎにならないように出たいので。本当に申し訳ありません」

深々と頭を下げる久方さんは、やつとオレに気付いたらしく、目を丸くしながらオレに近付き、まじまじと顔を見つめてきた。

「……鉄城の子? 大きくなつたわね? 何で? 連れてきたの?」

「違う違う。佐伯さんについてきたんだ。一昨年、会わせなかつたか?」

「だつて、こんなに大きくなつたよ。かわいそうに、鉄城なんかに似ちやつて。鉄人くんだつ? 鉄城はこの子と一緒に帰るの? 車用意してあるけど」

「いや、そつちについてくよ。珍しく全員揃つしな。それよ……ティアス、蓮野の兄が遺品を持って日本に戻つてきてるけど、来るか?」

そう言えば、蓮野の兄とオヤジ達は仲が良いんだつ? おそれく、彼も海外にいたのだろう。オレは面識がない。弟に似てるんだろ? ううか。

「……いい。ありがと? 私より、孝多に連絡してもらつても良いですか?」

「ああ、遼平のことを伝えてくれた子か。それは構わないが。しかし、火葬にしてもうつて、お骨も持つて帰つてきてるそ? うだが、良いのか?」

彼女は黙つて首を振つた。

その姿に、何故だか燐つていた怒りの火が、強くなつたよつた気がしていた。さつきの、オレと一緒に舞台に立つて言つ発言も聞いたださいといけないし。その怒りも相まって、オレはどうしても冷静な顔が出来なかつた。

慌ただしく出発の準備をしている音無さん達を後日に、新島がオヤジに蓮野のお骨の話を聞いていた。おそらく、芹さんに先に連絡をするためだろう。

蓮野の兄、太平さんは、弟と一緒に暮らしていたベルギーに彼を埋葬しようと考えていたそうだ。しかし名古屋に、離婚して両親と一緒に暮らしていた母親のために、火葬してお骨を持つて帰つてきたらしい。母親をあちらに呼ぼうと思つていたらしいが、弟の件もあり、彼女のたつての願いで、転職してこちらに戻つてくるそうだ。オヤジは彼の墓の場所も教え、芹さんとティアスに墓参りに来るよう言つていた。

わざわざ日本に来た芹さんの思いや、オヤジの言葉から受取れる蓮野への思いや、ティアスの彼らへの思いは判らないでもない。理解できないわけではない。そう思つ。けれどやつぱりオレは蚊帳の外で、その状況に追いやつている彼らの行動が不愉快だつたし、何より蓮野遼平という男が不愉快だつた。もう、死んでしまつた男だというのに。

目の前のティアスも、オヤジも、彼の回りの人間全てが。勝負したわけでもないのに「勝ち逃げ」されたような気分だ。

「おい、久方。あの子は結局どうなんだ。賢木に聞いても、埒が明かないし……」

恐らくさつきティアスが言つた、オレと「一緒に舞台に立つ」と言つ発言の件だろう。オヤジがオレの様子を伺いながら久方さんに聞いているのが判つたので、オレも彼らは視界に入つていたけれど

見ないようにしていった。

オヤジは、オレが「舞台に立つ」なんて望んでいないこと、よく知っているから。望んでいたら、オレはもっとまじめにピアノに取り組んでいたはずだから。

「悠佳があの調子なのは知ってるでしょう？あの子のプロデュースをするって言う話があつたんだけ……」

「うちの子は？」

「あつちに聞いてよ」

「みず木！」

いつの間にか部屋から出ていた音無さんが、外から彼女を呼ぶ。その声に、久方さんは「やれやれ」といつた顔を見せ、オヤジを引つ張つて外へ出た。

あわただしく出て行つた大人たちに、オレの隣で新島がため息をついていた。

「ちょっと遅いけど、みんなでどこかで」飯でも食べて戻りましょうか？」

「……でも、音無が……」

「ティアちゃん」

「だつて、リョウが……」

「ティアちゃん。他にも色々方法はあるから。私は、何もなかつたような顔、しないから。行きましょう？灯路くん、ティアちゃん連れてつてくれる？私、店をとつておくから」

その不思議な台詞に、新島は当たり前のように頷き、彼女を連れ、オレと佐伯さんを残して楽屋を出た。

佐伯さんがオレに話があるのは判つたけれど、それを簡単に受け入れ、彼女のために動ける新島のことを、少しだけ尊敬した。

「オレに何か？」

「あら、早く助かる」

からかうよな口調に、ちょっとだけ腹が立つた。

「ティアちゃんに、どこのまで話を聞いてる？」

「……多分、何も」

「そう。それは、不愉快にもなるわね。でも、聞いてる話と随分違うのね。私は、あなたの態度はとても落ち着いてるし、大人だと思つたわよ？」

「聞いてる話つて何ですか。この間も少し聞きましたが、僕はろくなことを言われてないようですけど？」

彼女が煙草に火をつけたと同時に、ライブハウスの関係者らしき人が現れ、出るよう声をかけてきた。それに従い、廊下に出る。煙草を噴かしながら、彼女は廊下の壁にもたれ、オレを見つめる。新島がこの人とつき合つてゐる理由が、それだけでもよく判る。この女は、ずるい女だ。

「ティアちゃんに言わせると、すぐ怒るし、すぐむつとするし、常に喧嘩腰だつて。だけど、あなたは充分大人の態度が出来るし、怒りを隠すことも出来る。一七歳の男の子が、あんなに年の近い父親の前で、あの態度はなかなかしないわよ。お父さんの方が遠慮しちやつてるじゃない？まあ、片親だからつて言つるものあるでしちゃうけど」

「そうですか？父は、いつもあんな感じですけど。誰に対しても」

「そう？私も娘にはちょっとだけあんな感じかな。うちの子は君ほど大人じゃないけどね。子供過ぎて、ホントはどうしてほしいのか、わからないもの。その点あなたは、大人の付き合いができるよう

に見えるナビ」

言いたいことが言えないだけなんですけどね、端に。別にオヤジだって、オレの言いたいことがすべて判つてる訳じゃないし、すべて判つたら困るつーの。

「話が前後しちゃって混乱させちやつたわね。ティアちゃんのせいだけじゃないのよ。私からもきちんと説明が出来ればよかつた」

「でも」

「あの子、ちょっと感情的になっちゃつてることがあるからね。特に遼平くん絡みのことでは」

いや、その一言余計だし……何で蓮野絡みのことである女が感情的になるのか、はっきりしろ、そこんとこ……

オレの心の声でも聞こえたのか、佐伯さんは苦笑いを見せてから、ちらりと廊下の先を見た。

「……そろそろ行きましょうか。待たせすぎても悪いから。何が食べたい?」

オレの背中を押す彼女の言葉に、応えられなかつた。

ならびに彼女はオレと寝たんだろう。もしかしたら、オレをコントロールするためにか?

オレに目を付けて、オレと一緒に舞台に立ちたかったけど、オレがそれを嫌がるのが目に見えていたから?だから?

「私は、良いと思うよ?君とティアちゃん。一人とも舞台映えするし。何より、ティアちゃんがやつと氣に入ったピアースなんだか

オレの何が良いのかも判らないのに、「気に入ったピアニスト」なんて言われても、納得いくわけがなかつた。

彼女の口から、彼女の思いを聞きたい。オレの納得のいく答えを。

しかし外で待つていた彼女は、そんなことは既に忘れてしまったかのようにオレ達に笑顔を向けた。全くもつて意味が判らん。何でそう言う態度が出来る？

何でオレばっかり？ 何も判らず、こんな風に悩んで、悔しくて、重たいし、いろんなもの捨てたいのに。結局何一つ捨てられず、オレの中にだけ、わだかまりのようなものを残したままなのか。

新島がタクシーを捕まえてる間、ティアスは佐伯さんと何かを話していたようだ。オレが少し離れて、彼女達を遠巻きに見ていたら、ティアスが近付いてきた。

「……テツ、ごめん。怒ってる？」

佐伯さんに何か入れ知恵されたらう、お前は！

……と言つてやりたかったが、それも大人気ない。つーか、バレバレだよ。しかも、バレバレなのに、思わずくらつと来ちまつたじやねえか。

オレはホントにバカだな。判つてて、ビうじてこういう振り回すタイプの女にばかり惚れるのか。可愛くて、スタイルよくて、気が強くて、我が強くて、自己中で、だけどちょっと抜けてて。こんなのまんま、愛里だし。オレは一生、あの女の呪縛から逃れられないのか？

だから今朝だって、あんなに簡単に泣いたりしちまつんだ。最低だな。

『テツ、ごめんね。怒つてる？』

愛里も、こんな風にオレが本気で怒つてると、機嫌を伺いに来たんだよな。ちょっとだけ怖々と。オレはその彼女の「本気」が怖くてどうしても、「怒つてる」って言えなかつた。彼女が本気で怖がつていればいるほど。

だつて怖いじゃないか。その後の反応が。「もういい」なんて言われたら、オレは多分、地味に立ち直れない。

「何で、怒つてると思つ？」

だから、正直怖かつたけれど。以前より、今の方がずつと怖いけど。

彼女との距離が近付くほど。オレの彼女への思いが強くなるほど。でも、ティアスと愛里は違う。違うと我想つた。しかし、「一回寝たぐらいで」とか言われたら、身も蓋もない。

「あ……やっぱ、ホントに怒つてた？」
「やっぱてなんだ、やっぱて。お前は、とりあえず謝ればいいと思つてただろう。佐伯さんに言われて」

よし、言つてやつた。とか、意外とあつさつした反応じゃないか。ホントに怒つても逃げられないのか？つーか、オレはなんでこんなにびぐびくしてんだ。コイツが悪いし、腹が立つてるのはホントなのに、恐怖の方が大きくなつてる。

「でも、テツが怒つてるのは判つたから。カナが、私のせいだつて言つから」

ああ、さう。だから謝りに来たのか。バカなんだか可愛いんだか。

「何で怒つてるの？」

「……ホントに心当たつの一つもないことでもへ」

あるけど、言つて聞いて顔してるが。何つー判りやすい。

「……判んない」

「判んないのにその顔かよ」

バカで可愛いけど、女はする。オレの心はメチャクチャになる。振り回されて、疲弊しきつてゐる。愛里もティアスも、オレのことをなんだと思ってるんだ。

こういつの、怒つてゐつて言つのか？頭の中が熱くて、もう何も考えたくない。

「判んないなら、いい。オレはお前と舞台に立つ氣なんて、ちひたら無いからな」

このときオレは、舞台がどうとかなんて、ホントはどうでも良かつたけど。後で冷静に考えたとき、色々面倒なことが多すぎて、そう言つておいて良かつたって、心底ほつとした。

結局あの後、舞台に立つたの云々の話は、オレの「機嫌を伺つていたのか知らないけれど、彼女たちの口から出ることではなく、普通に食事をして再びタクシーに乗つた。オレの家まで送つてくれたのだが、そんなに遅い時間でもないのに、家に電気はついていなかつた。

また後日。別れ際、そう言つたのは佐伯さんだった。ちゃんとピアノを聞かせて、と付け加えて。

もちろん、練習しに来るよね。オレの返事を聞く気のないティアスの捨て台詞を残し、タクシーは走り去った。

愛里がオレを振り回すように、ティアスもオレを振り回す。同じようにオレの心がきちんと息苦しくなっているのが、余計に腹立たしかった。

溜息をつきながら顔を上げると、向かいの玄関に秀一と御浜が立っているのが見えた。みんなで一緒に帰ってきて、助かったような、面倒なような。

「……どういうことですか、あれ。佐伯佳奈子じゃないですか？」

「言わなかつたつけ？ティアスの話」

御浜は、ホントにビームまで知ってるんだろうな、ティアスのこと。

「テツ。柚乃は今日は帰りが遅いそうですから。何か食べますか？」

家の管理人が、お前は。

「いや、いい。佐伯さんに奢つてもらつたから。牡蛎食つてきた」

ポケットを探り、家の鍵を弄びながら玄関に向かう。その後ろを二人がついてくる。

「どういふことですか」

「佐伯さんはティアスのプロデューサーだよ。オレに、彼女の後ろでピアノ弾かないか、ってや」

「テツみたいに、ろくに練習もしてないヤツにですか？妙な話ですね」

五月蠅いな。しないんじゃなくて、出来ないの。……とは言え

ないけど。

玄関に上がり、コートを脱いで、ロビングに向かつたため廊下を進む。

「その話、受けたの？」

後ろからついてくる御浜の声は、少しだけ不安氣だつた。その理由は、今のオレには判らない。

「そんな氣はありません。お前、もしかして、ティアスから聞いてた？」

「うん。でも、テツはコンクールも苦手で出ないくらいだから、難しいんじや無いかなとは言つておいたけど」

やつぱり。御浜は御浜だけど。

御浜の彼女への対応は間違つてないし、事実を言つてるし、あらかじめ断つておいてくれたのはありがたいはずなんだけど。はずだけど。何でティアスも御浜も、そつ言つこと言わなかんかな。ティアスはともかく、御浜に限つて。

いや、原因は分かつて。ティアスのことだからだ。オレが彼女との間にあつたことを、どんな小さなことでも細心の注意を払つて伝えるよじこ、彼も、そこまではなくとも、そう思つてる部分があるはずだ。はつきりと、彼がそう言つたわけではないし、どこまで疑つてるか判らないけど、オレに釘を差す程度には、オレのことを彼女がらみの件に関しては警戒してるはずだ。オレがそつするようだ。

でも、オレが彼を警戒するのは、何も彼から彼女を奪おうとしてるわけではなくて……。いや、もう、何をどう言つても言い訳になるな。言わなきや良いんだ。もう近付かなきや良い。一度や2度のこと、黙つとけば無かつたことになる

「その話をしてたんだ？」

オレがピアノの椅子に座ると同時に、彼らはソファに座った。御浜の視線を真正面から受けるのは、ちょっと今は辛い。

「いや。音無悠佳のライブがあるから、見に行こうって言われただけ。でも、音無さんは、うちのオヤジ達と一緒に、蓮野のお兄さんに会いに行つたみたいだけ」

「そうなんだ。お兄さん、こっちに戻つてくるんだ」

「何か、遺灰を持ってきて、実家に戻るとか何とか。新島が聞いてた話を少し聞いてただけだから、何とも」

多分オレが知つてることなんて、彼は全て知つてのだろう。こんなに簡単に話が通じることが、こんなに不愉快に思う田が来るのは思わなかつた。

「なら、ティアスもそつちへ？」

「いや、親父が声をかけてたけど、断つてた。代わりに芹さんに連絡するつて」

「やっぱりそなんだ」

「やっぱり？」

オレには納得がいかなかつたことを、彼は簡単に納得する。田の前の御浜が悪いわけじゃない。あの女が悪いって判つてる。判つてるのに。

「うん。ティアスさ、蓮野さんと約束したつて言つてたから。彼に、彼のことを忘れるように言われたつて。長くないことを彼自身が知つていたことを、彼女は知つていたし、知つていたからこそ彼の側

にいてあげたかったけど、彼がそれを拒んだ。そう言つてた

「『『いてあげたかった』』って、『テキてたつてこと?』」

「そつとは言わなかつたけど、そつだつうね。その話を聞いたとき、さすがにオレも何も言えなくてさ……」

まあ、元カレの話をさらつと言われたわけだから、普通に考えてショックだらうよ。もう少し気を使えよ、あの女は。御浜がティアスに氣があるのなんか、バレバレなのに。

そもそも氣を使つてるなら、オレとホテルには行かないか。オレとの行為のことを話している素振りは無いけれど……どうしよう。

「音無さんの名前は聞いたことがありますよ、先輩から。奥さんと結婚する前から仲の良い友人の一人だつて。賢木さんも確か共通の友人ですよね。先輩に紹介してもらつたんですか、あなたが?」

オレと御浜の微妙な会話をどういうつもりで聞いていたのか、秀一は最初の話に無理矢理引き戻してきた。

「んなわけない。親父達がいたのは、たまたまだつて。元々、音無さんにプロデュースしてもらつた話だつたらしい。周りの人たちもみんなそれ知つてたし。その話が、音無さんの心変わりで無しになつて、佐伯さんがティアスのバックにいる今の状況なんだと」

「なら、あなたに舞台に立つよつたのは、佐伯佳奈子なんですか?」

「どうだろ……」

「ティアスだよ。佐伯さんは、ティアスを待つててくれてるつて言つてたから

言葉にならなかつた。

ティアスがオレを選んだということを彼に言つてたという事実と、

オレに言わず彼にだけ言つていたといった事実。物事は側面次第で、こんなにも違うのか。

彼女がオレを求めていたことの嬉しさと、彼女のずるさへの怒りと、彼と彼女の仲に対する嫉妬。オレはもう、処理しきれない。

「チャンスって気がしますけどね。やれるときにやれることをやつておかないと、年をとつたときに後悔したりしますよ」

「お前が言つと、重みがあるな」

「余計なお世話ですよ。私は、そんなに世渡りもうまくなければ、チャンスもなかつた。地味に努力して、今の場所にいますから。そう思つと、若くて、チャンスにも恵まれているあなたが、一時の感情でそれをフイにするのはもつたいたい気がしますね。あなたはこのままピアノを続けて、どうしたいんです？」

ちょうど2年前、秀一は高校受験を目の前にしたオレに向つて言った。もしかしたら、親父に何か言っていたのかも知れないし、ただの老婆心からかも知れない。真剣にピアノをやりたいなら、コンクールにももつと出るべきだし、進路も考へた方がいい。それは、愛里にも言っていたから充分判つていた。だけどオレは、それを先延ばしにすることを選んだ。

ただ愛里の側で、ピアノを弾ければ良かつた。コンクールは苦手だつたし、その苦手を乗り越えてまで何かを手に入れようと言つ欲求は、その時のオレにはなかつた。

「チャンスかもしれないけど、そつじゃないかも知れない。あいつらがどうしたいかも判らぬ、オレの何を気に入つたのかも判らぬ、ただティアスのおまけとして扱われることが、オレにはチャンスとは思えない。ティアスの音無さんへの対抗心を満たすためだけの道具かも知れない」

「随分、言つじやないです」

「……なんかあつた？」

心配そうにオレを見る御浜の視線を、今のオレは素直に受け止められなかつた。オレは何か、まことに言つただろうか。

彼女に對して怒りを感じているのに、一度動いた恋心のよくなものがどうしても消えない。それどころかオレを支配し、余計に苦しめる。彼女を切り捨てられない。

そして彼女と同様に、御浜も。

「別に。ただ、秀一がチャンスとか言つほど、具体的な話じゃないつてことだ」

「具体的じゃないなら、余計に動いた方がいい気がしますけどね」

彼の老婆心が、オレには重すぎた。

「テツが嫌がることを彼女は知つてたから、提案しづらかったみたいだけど。今まで、いろんなピアニストと組んでみたけど、うまく行かなかつたから、どうせなら荒削りで多少技術的に未熟でも、自分が気に入った人と組みたいて言つてたからね」

「お前、何げに酷い」と言つてゐるぞ」

未熟で悪かつたな。発展途上と言つてくれ。

「でも、テツが気にしてるのはそこだろ？何で『オレなのか』ってのは、やつ言つひとだろ？」

「……まあ」

複雑だ。複雑すぎる。彼女の思いを、御浜から聞かされてる。素直に、彼女の思いは嬉しい氣もするけど、彼がその相談に乗つていたことをこんな風に聞かされるのは正直、きつい。嫌味の一つも言

いたいところだけど、怒りにまかせて暴言でも吐いてしまいたいけど、それもオレには出来ない。

彼に内緒で、彼女に触れ続けたことを、激しく後悔している。いやになる。

「いや、でも、オレには向かないし。いいよ。ピアノも、好きで弾いてるだけだし。未熟なのは誰より自分が判ってるし。受験もあるし、練習時間もそろそろ減らすつもりで、あまり弾いてなかつただけだし」

我ながら、うまい」と呟つもんだと思つた。自分にも御浜にも秀一にも、そして愛里達にも言い訳が立つ。これで良いじゃないか。ティアスにだけは言い訳できないけど、だけど、もうやめないと。こんなに彼と彼女は近いのに。体だけのオレに勝ち目はない気がするし、仮に勝つたとして、勝利と引き替えに御浜がいなくなるだけだ。

「もつたいたいですね」

「秀一がもつたいたい、て言う意味がよく判らないけど。オレとしては、テツとティアスが一緒に舞台に立つたら面白いかなって思つてただけで。何より、彼女が望んでたし。テツもね」

「オレ?」

「そう。彼女が歌つている姿を、羨ましそうに見てたから」

どうしても反論の言葉が出ず、黙つて首を振つた。

「賢木先生のピアノを思い出したろ?」

オレは、彼らの前で譜面を読んでただけなのに。

「彼女がライブの話をする度に、少しだけ悔しそうにしてたの、自覚してる？」

「判らない。だけど、息苦しくなるような、締め付ける思いはあった。それが、彼女が他の男と一緒にいることに対するものか、その行為に対するものか、彼女の横にいる同じくスピットを浴びる存在に対してなのかは、オレには判らなかつた。

恋愛感情なのか、コンプレックスなのか。何れにしろ、彼女がオレの何か欠けた存在であることだけは確かだけ。

「そんなことは……ないんじゃないか？」

「かもね。オレの見る範囲だからね」

「かもね、とか言いながら、自信たっぷりじゃねえか。ホントに何なんだろ？、コイツのこの妙な存在感と説得力。

「テツつてさ、考え過ぎなんだよね。しないならしない、するならするで、どっちでも良いし？時期を待つなら待てばいいと思うし」「何、だよ、そこまで言つといて、その突き放した意見は」「だつてそつだろ。そこにただ留まる以外はどうしたつて良いんじやない？だつて、自分の責任だし」

「留まるつて？」

「何もしない、ってこと。それを自分で選んだのならともかくね」
動くのが怖いから、何もしない、じゃダメだろ？が。ダメだろ？
な。

「あと、嘘はダメかな。練習量を減らしてるつて言つのとか。減らしてゐる人は、10時ぎつぎりまでピアノの前に座つたりしないし
ね」

やつぱりばれてる。弾けないのを知つてるとは思つてたけど。

秀一と言つて、御浜とい、何で、オレの行動が手に取るようになつたんだ。

「せめて、もつと夜遅くまで弾けると良いのに。未だ何か言われる？」

「言われなくても、近所迷惑ですよ。家までまる聞こえですからね」

ティアスが、家に練習しに来ればいいって、そう言つてたんだ。

思わずそんなこと、口が滑りそうになつた。

言つたほうが楽かもしれない、とも思つたけれど。だけど、多分、オレはまだ何かを期待していたのだろう。

かすかにだけど、御浜はオレの心を言い当て、その先を（どうしかといふと退路を絶たれた感じだが）指示示した。にもかかわらず、オレはこの男を裏切つていいのか？

まあ、答えはこのなんだけど。それはあくまで理屈の問題なんだよな。頭では判つてるんだ。だからオレがこんなに、考えすぎといわれながら、悩んでる。

だからオレは、いつもここに留まることを望んでいるのか。

「御浜。ティアスがどうとか、面白やつとかなしでさ。オレはどうしたらいいと思う？」

「知らない。好きにすれば？」

なんか、答えは判つてたけど……突き放すな——いつは。

「オレが見てるテツなんて、ほんとのテツの気持ちじゃないと思うし。テツが自分で何とかしたいと思わないなら、何したって意味が

ないし」

「相変わらず、厳しいですね。案外、自分よりも他人のほうが、客観的に自分の事を見ててくれるから、正確かもしませんよ?」

「でも、決めるのは自分だよ」

修一はその御浜の台詞に苦笑いを見せたけど、きつい言葉とは思つたけれど、その通りだとも思つた。

「……やつこえは、今日はどこに行つてたんですか?先輩に聞かれると困るんですけど」

思い出したように確認をする修一。多分、話を変えたかったんだろ?。御浜は多分、答えも出さないし、その態度を変えることもないだろうから。オレを哀れに思つたか。

「音無さんのライブで一緒になつたときに、聞かれなかつたんですか?その後、電話とかは?」

「……そつにえは、電源切つてた」

脱いだコートのポケットに入れっぱなしになつた携帯を探し当て、電源を入れる。ほぼ同時にメールやら留守電やら入つてきた。最近、こんなのがばかりだな。

「どうして、また」

時々、そつやつて保護者みたいな顔をするのはずるいぞ、修一。隣で御浜が聞いてるじゃねえか。アリバイ工作しといつよかつたよ。

「ライブだつたから。あと、新島んちに泊めてもらつてたから。……悪い、ちょっと電話でいい?」

「誰ですか、こんな遅くに」

「佐伯佳奈子」

一応、余計な話にならなこうと、携帯をもつてリビングを出た。

佐伯さんからの電話は呼び出しが、例の、ティアスが住んでるマンションのエントランスに来いというものだった。

オレはティアスに会う意思がないことを伝えたら、会わせるつもりもないと言っていた。いいから来いという彼女に押され、仕方なく、深夜だけ家を出た。なんと言うか、有無を言わせない女性だと思った。親父がいたらどうする気だよ。相手が修二だからよかつたものの。

御浜には佐伯さんのマンションに行くだけ告げた。（ティアスが住んでいる場所のことを知っているかどうかは判らないけれど、怖くて話を出せなかつた）

原付で向かつたら、15分ぐらいでついてしまったので、約束の時間を遅めに告げたことを後悔しながら、普段ティアスと会うときには使うことのなかつた側のエントランスで待つていた。

深夜だからか、エントランスの奥にある管理室前の受付に若い男性が立つていて、声をかけられてしまった。なんて答えていいかわからぬところに、佐伯さんが上から降りてきた。

「なんか、ホテルの受付みたいになつてるんですけど

「普段も常駐してるんだけどね。こっちから入つたことなかつたんだっけ？ 奥にラウンジもあるのよ。ごめんね、そっちで待つっていて

くれたらいいかと思つてたんだけど」「

ますます、どこかのホテルみたいだぞ?いや、結構すうじこマンションだとは思つてたけど、予想以上にすうじくないか、うう。

「そつちの、駐輪場側からしか入つたことなかつたですから」「ああ、通用口のほうね。ティアちゃん、表玄関から入ると、管理の人気が立つて緊張するつて言つてたから」

彼女に誘導されるままに、エントランス奥のラウンジに案内される。マンションの住人しか入れないといふ、スペイン風の簡単なバーがあつた。その存在に、なんだか頭が痛くなつてきた。

「あんまり、外に出ないよつとしてるの。こんなとこひびき出しちやつてごめんね」

「いえ……」

やばい、完全に飲まれてる。つーか、何でカウンターで、しかも隣に座らせるんだよ。ずるくない?

「何から聞きたい?ティアちゃんのこと」「

ストレートすぎて、何も言えなくなつてしまつた。

「オレのこと、からかつてませんか?」「少しだけよ、少しだけ」

嘘でも良いから否定しろよ。完全に子供扱いだな……つーか、子供か。オレなんか、この人から見たら。新島は男扱いつづけの胸に落ちんけど。

「別に、ティアスのことなんか、どうでも良いです」

「そんなこと言つと、ティアちゃんが泣いちゃうわよ」

「オレが突き放したくらいで泣きますかね？あの氣の強い女が」

蓮野のために泣く彼女を思い出し、佐伯さんのせいじゃないつて判つてゐるのに、余計に腹が立つてきた。

「そう？あの子、よく泣くのよ？甘えるの下手なくせに。遼平くんにもそうしてれば良かつたのに。不器用だから」

オレがこの「場」に凹惑つてゐるのを彼女は悟つてゐるのだ。簡単にオレに了承をとつて、勝手に飲み物を注文してゐた。もしかしたら、わざと蓮野の話も振つてゐるかも知れない。

「そんなに警戒しなくても」

「別に、してませんよ？」

「それがしてゐるつていつのよ」

彼女は苦笑いを浮かべながら、出されたグラスの一つをオレに勧め、乾杯の素振りだけを見せた。

「……別に、ティアスのことなんかどうでも良いですって言つたじゃないですか？オレがあなたに聞きたいのだとしたら、ティアスが言つていた『舞台に立つ』話ぐらいです」

「どうしてそんなに喧嘩腰なの？まだ良い話とも、悪い話とも聞いてないのに。少なくとも、悪い話じゃないわよ？」

「悪い話かどうかはオレが判断します」

氣を悪くするかと思つたが、彼女は人の悪い笑みを見せただけだ

つた。

「だったら、悪い話だと思つてゐるからその態度? ティアちゃんがずっと気にしてたからね、君のこと」「気にしてた?」

オレの質問に、わざと間をおいて答えた彼女の対応に、してやられたとしか言ひようがない。また、オレは彼女のペースに持つていかれた。

「白神くんだつけ? 沢田くんの幼馴染みが、君のコンサート嫌いの話をしてくれたって。小学生くらいのこひなせ、従姉妹のお姉さんと一緒に何度も出てたみたいだけど、中学生くらいからほとんど出たことが無くなつて、学校行事くらいしか人前に立たないつて。どうして?」

彼女は明らかにオレに氣を使つていて。それはよくわかる。ひどく言葉を選んでいるといふことが、痛いほど伝わつてくる。

そりやそうだ。この年で、受験どうする? なんてレベルまで音楽やつてゐくせに、コンサートやコンクールが苦手なんていう奴の理由なんて、たがが知れてる。ましてや、思春期真つ盛り、腫れ物を触るようすに扱われたつておかしくない。

……なんて、冷めたこと考へてゐて知つたら、オレも新島みたいに男扱いしてもらえるんだろうか。正直、愛里や親父がオレのことをそんな扱いしてくるから、もう慣れっこだ。思春期も反抗期も、それらしいものは残念ながらやつてこなかつた。

辛かつたり、恥ずかしかつたり、悔しかつたり。わけのわからないものに振り回されたのは一瞬だつた。オレを振り回すのは、あの女に対する執着だけだ。ほかはどうでもいい。

「あまり、好きじゃないですか」

「緊張なら、誰だつてするものよ？」

やつぱり、そつ思われてるよな。そつだよな。

「……意味がないですし。いや、オレの感情より、オレに場数が少ないことは、その話を聞いたら判りきったことでは？」

愛里と一緒にオレはピアノを弾いていたし、愛里に習ひーとが出来るからオレはピアノを続けている。元々、子供のころに習っていた先生とは合わなかつたから（エキセントリックな先生で、愛里は優秀だから気に入られていたけど、オレは出来が悪かつたからよく怒られてた）、愛里が受験のために先生を変えたタイミングでやめて良かつたけど、彼女が教えてくれると言つから続けていただけ。ピアノを弾くことは好きだつたし。

コンサートは元々苦手だつたけど、先生につかずに、愛里に教えて貰うようになつてからは、逆にその手の柵が無くなつて楽になつたと思つてたくらいだ。

……とか、絶対この人の前では言えないし。

我ながら、恥ずかしいくらい愛里に依存し、振り回されまくつてる人生！

「何で、オレなんですか？ティアスは他にも色々違うピアニストをバックにつけて歌つてるでしょ？今でも」「ティアちゃんが気に入つたからよ？簡単な理由。ほかに必要？」
「その意味がわからないんですよ」

彼女が言つ「簡単な理由」という奴が、オレの心の奥深いところ

で、なんか引っかかる。

嬉しい氣もする、怖い氣もする、納得いかない氣もする、悔しい氣もある。

「考える時間がほしい？」

「え？」

「そんな顔してたから。なんか難しく考えすぎてない？」といふ

やつてみればいいのに」

「……そんな」

難しい顔してたか、オレは。

「ティアちゃんみたいに、といふ

……

思わずグラスを落とすといふだつたじやねえか！なんつう……いや、他意はないと思う、多分。いや、新島のあの台詞から、この人も確実にオレとティアスがやつたと思ってんな。いや、事実ですけど。

てか、とりあえず。そうですか、といふ。そんな軽がると。まあ、そもそもあの女、オレに嘘ついてんだよな。彼氏いたことないつて。なら、蓮野は何なんだよ。大体、初めてじゃないせに。いや。そんなこた、どうでもいいはずなんだが。引っかかる、引っかかる。気持ちが悪い。びついたらいいんだ、オレは。

「……もしかして、今まで彼女とかいたことないの？そんなに動搖しちゃって。ちょっとからかっただけなのに」

ちつ、悪意だらけかよ、ちくしょう。この女……。

「いましたよ。失礼じゃないですか？別に、動搖とかしてませんし？」

いや、親父より年上の女だから、わからないでもないけど。せめてもう少し反応して見せろよ。悲しそうだ、完全に馬鹿にされる。

「冗談よ。でもわかった。ティアちゃんが君に興味を持った理由が」

「……理由？」

「どうあえず、悪い口ひみにはしないから」

そういって、彼女はオレに、名刺とスタジオのチラシを押し付けた。

「何ですか、これ」

「文句はやつてから言いなさい。いろいろ気に入らない理由はあるみたいだけど、やらない理由らしにもの、彼女に言える？」

だつて、舞台上に立つたときに指が動かなかつたらどうするんだよ。とは言えないけれど。いっそ、言つてしまえば良いのか、何度も迷つてたんだから。

いや、それはそれで、なんだか逃げのようにも聞こえるし、言いたくない。第一、オレだって、それが引っかかるわけじゃない。

「それは……大体、あの女が最初に言わないのが」

そう、彼女に食つて掛かつたが、御浜の顔が浮かんでしまったので、それ以上言えなくなってしまった。

御浜は知ってる。言わないだけで。オレのことを何もかも。だからオレの妹がそうするように、彼も愛里にい感情を持つていない。

それだけオレは、あの女に振り回されてる。オレを大事に思つてくれる人たちが、彼女をよく思つていのなんか、知つてる。

だけど御浜は、ティアスには言わなかつただろうし、これからも多分言わない。彼の気遣いが、彼女からオレに話が伝わらなかつた遠因だと知つことを知つたら、それは誰のせいにもしたくない。

御浜は、彼女からオレの話を聞いたとき、どう思つたのだろう。蓮野の話を聞いたときのような動搖をしたんだろうか。

だとしたら……。

「やつてみたら、案外いいかもよ？」

「音無さんに対抗するための道具つてのは、気に入らない」

「利用し返してやるつっていう程度の野心くらい、持てばいいのに

それはそれで、そういわれると悔しいぞ。野心がまつたくなつて言つのも、男としてなんだか、恥ずかしい。

「プロデューサーですから、一緒にやるならきちんと話くらい聞くから。本格的に彼女が動くなら、私もつきつきりになるし」「ずいぶんティアスに期待してるんですね」

それは、公私ともども、彼女に援助をしていく佐伯さんの態度で知つてはいたが。言葉にされるとなお重い気がする。

それも、オレが引いてしまう理由のひとつではある。

彼女への期待の大きさを、オレの指が壊してしまつんじやないかつて。

野心がないといわれて腹が立つのに、期待がでかいと引いてしまうオレは、気が小さいことか？

指が動かない」とすら、そのせいだと思われたら、いや過れる。

「それもあるけど、遼平くんの遺言だからね」

なんだかやりきれないこの思いを叫んでみたいような気もしたけど、たくさん理由がありすぎて、何から言つていいかわからないけど。でも、ひとつだけ、何者にもばかられず、だけど人知れず叫びたいことは、この男だ。

話したことも、会つたこともない、今は存在すらしていない。そのくせに、オレの前に立ちはだかる。

これはたぶん嫉妬だ。御浜や愛里のことを考えたとき、こんな風にティアスを思い出すことはないのに、蓮野の話になつたとたん、はつきりとオレの中に彼に対する妬みと、彼女に対する思いが噴き出していく。

ずいぶんオレははざるものだと、思わず冷笑してしまう。だけれども、どうしようもない。

認めたくないけれど、全てオレの中にある。
オレは、どうしたらここ…どうしたら…。

「テツ」

ティアスが、オレの後ろに立っていた。横で「会わせるつもりはない」と言つていた佐伯さんが苦笑いをしていた。

「私の隣で、ピアノを弾いて」

「何で……」

「私が、楽しくするつて言つた。責任とれつて言つたのはあなた

彼女は手を伸ばし、オレに触れる。たつたそれだけのことなのに、触れられた部分は以前よりも酷く痺れる。彼女の上に乗つたことを思い出すと、その出来事があつたにもかかわらず、余計に。オレの手をとり、立ち上がらせる。彼女に逆らえない。

だめだ。このまま流されたら、だめだ。

「……だけど、隣で、人前では、無理だ。オレ……」

「テツ、私ど「るときは弾いてたじやない。弾けるでしょ？」

彼女はオレの手をとつたまま、バーの奥にあるステージに引いていく。グランドピアノのカバーを勝手にあけ、オレを座らせた。客は佐伯さんを入れても3組。ここで弾けつてことか？

「テツが気にしてるのは、時々指が動かなくなること？それとも、別のこと？」

彼女は知っていた。彼女が知っているのも、知っていた。多分、御浜も知っている。ティアスも御浜も、知らない振り、見なかつた振り、何もなかつた振りをしてくれていた。知つてて、オレは甘えた。

オレの練習不足を嘆く愛里は、きっと知らないけど。だから彼女には、必死に取り繕つた。

「動かないかもしれないぞ」

本当は「全て」だと黙つてやりたかった。オレ自身、どうしていいかわからなくなつっていた。そうとしか、言えなかつた。

ほか「全て」なんて、オレがオレ自身を責める要因を増やすだけ

だ。十分判つてゐる。

今オレができる、精一杯だ。

「大丈夫。動くよ

「どこからそんな自信が

「だつて、私と一緒にときは、弾いてくれたじゃない

彼女が楽譜をオレの前に置く。てつくり、以前読めといつて渡された佐伯さんがアレンジした曲だと思ったのだが、違つた。子守唄だ。

「お前、するいよ

どうせ心を持つてくなら、愛里への執着も全て、持つて行つてくれたら良かつたのに。

あの夜から、オレはとつとつと持つていかれていたのだと、いまさら自覚させられた。

愛里への執着も、そのままだつたけれど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2170b/>

W.E.M【世界の終わる音が聞こえる】

2010年10月14日20時09分発行